仮面ライダー龍騎☆マギカ・願う未来を呼ぶ魔法

一条ツカサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー龍騎☆マギカ・願う未来を呼ぶ魔法

【Ｎコード】
Ｎ６９９６Ｒ

【作者名】
一条ツカサ

【あらすじ】
――かつて、己が願いの為に戦い合った１３人の戦士達がいた。そこは、兄妹の望んだ誰もが笑顔で暮らす世界。しかし、希望に満ち溢れていたはずの未来は、大いなる暗雲に塗り潰されようとしていた。希望を与える『魔法少女』と絶望を振り撒く『魔女』。戦いの傷跡と引き換えに、全ての記憶を失った戦士達もまた、新たな『願い』を巡る闘争に巻き込まれていく。願いを胸に戦え。未来を描く為に！（仮面ライダー龍騎×魔法少女まどか☆マギカ）

プロローグ・同じなのは欲望だけ（前書き）

・両作品のネタバレあり。

・龍騎は最終回後。修正された未来での話。

・ストーリーは基本的にまどマギ準拠。

・龍騎とナイトはオリジナルキャラ。しかし真司と蓮とほぼ同じ経験をしています。他のライダーも資格者が変わる可能性あり（なぜそうなったのかは本編にて）。

・やや海外版『仮面ライダードラゴンナイト』の要素が入る可能性あり。ただし、今のところは隠し要素程度の予定。

・全てのライダーを出せるかどうかは（作者の技量的に）未定です。ただ、龍騎ライダーズはどれも個性的で面白い連中なので、出来る限り登場はさせようと思っています。

・鬱展開は出来る限りブレイクしていきます。

では、どうぞ。

プロローグ・同じなのは欲望だけ

「僕、昨日から……ずっと考えてて……それでも、分かんなくて……」

そこは、現実と虚構が繋がった世界。
鏡の先に存在するもう一つの世界によって、食い潰されようとしている世界。

「でも、さっき思った……」

声が掠れた。口に広がる鉄の味は、あまりに現実味を帯びていて、否応なしに迫る『死』を告げてくる。

「やっぱり、ミラーワールドなんか閉じたい……戦いを、止めたいって……」

ずっとずっと探し続けていた答え。
誰かの願いを犠牲に、自分の願いを叶えなければならない狂ったシステム。
全ての参加者に善悪は無く、みんなが自分の信念を貫くために戦っていた。
それを否定する権利なんて誰にも無い。

「きっと、凄くつらい思いしたり、させたりすると思うけど……それでも止めたい」

だから――僕は願う。
僕が信じるものを。僕が、正しいと思う答えを。

「それは、正しいかどうかじゃなくて、僕も、ライダーの一人として……叶えたい願いが、それなんだ……」

「ああ……だったら生きてその願いを叶えろよ！」

霞んでいく意識の中で、あいつは泣いていた。
同じライダーで、いつか殺し合わなければならないライバルで――ずっと一緒に戦ってきた、無二の親友。優しさを仮面の下に隠して、ずっと非情になりきろうとしていた意地っ張り。そんなあいつが、ボロボロと大粒の涙を流していた。

「私と戦え！　勝手に、死ぬな……！　死んだら、終わりだぞ……！？」

「そうなんだよなぁ……蓮花（はすか）、お前はなるべく……生きてくれよな……」

「っ、お前こそ生きろ！！　龍二（りゅうじ）、死ぬな……死ぬなッ！！」

最初に会った頃からは、考えられない言葉。
ライダーになって、がむしゃらに戦いを止めようとしてきたけど……結局、止められなかったけど……それでも僕は、蓮花の何かを、変えられたのかな……。僕のやってきたことは、無駄じゃなかったのかな……。

痛みを堪え、僕は精一杯、笑った。

「お前が僕に、そんな風に言ってくれるなんてな……」

「おい……おいッ！」

「あり、がとう。蓮花。……ずっと……。……」

友達、だよな。僕達……。

それが、僕の最後の思考だった。

「龍二？　おい龍二！！　龍二ぃぃぃぃ――！！」

◆◆◆

「合わせ鏡が無限の世界を形作るように、現実における運命も一つではない」

それはきっと、理不尽な選択肢を延々と繰り返す、短調で悪趣味なゲーム。

「同じなのは欲望だけ。全ての人間が欲望を背負い、戦っている」

「……詩人なのね」

皮肉のように返したつもりだが、少女も内心ではそれに同意していた。

何度繰り返そうが、人の心には常に欲望が巣食っている。

僅かな差異はあれど、誰もが欲望の成就のために願い――無残に命を散らしていった。

「そしてお前もまた、背負いきれないほど大きな欲望を持つ者」

「ええ、かつてのあなたと同じようにね」

「何を願う？」

「――救いに至る道を」

淡白だった表情に、確かな信念の炎が灯る。

「何を犠牲にしても構わない。あの子を、絶望の輪廻から解き放つ道を願う」

「……絶望の運命を捻じ曲げる、か。それはかつての俺でも出来なかったことだぞ。俺の平穏は結局のところ、大切な人間の命を諦めることで手に入れたものだ」

「あなたの体験談に興味はないわ。私は何度だって繰り返す。例えそれが永遠の迷路だったとしても、絶対に出口を見つけ出してみせる。

――こんなのが運命だなんて、私は絶対に認めない！」

ボロボロの外套を羽織った男の瞳に、少女が映り込む。

まるで、少女と誰かを重ねているかのように。

「いいだろう。ならば――」

暗闇の中にいた男の隣に、黄金の騎士が降り立った。

鳳凰を象った神々しい姿。片手には鎧と似た装飾の杖が握られている。

少女の頬を冷や汗が伝った。
ただ目の前に立っているだけで気圧されるなんて。
『魔女』を相手にした時を含めても、ここまで脅威を感じたのは初めてだ。

「オーディンのデッキに残された力は僅かだ。人の生き死にに関わるような、大きな運命を修正することはできない。
修正可能なのはせいぜい、俺の知る戦士達とお前達『魔法少女』が、必ず接触できるようにすること――つまり、『出会い』の運命くらいのものだ」

「けど、あいつから例のカードを取り戻せば、他の運命も全て変えられるのよね？」

「ああ。出来る限りの協力はするが、あまり期待はするな。俺も活動範囲が限られている身だ」

「それには及ばないわ。今までずっと、誰にも頼らずに戦ってきたんだもの」

素気なく少女は答え、黄金の騎士はベルトに装填されたデッキから、一枚のカードを引き抜く。

ふと、騎士の傍らに立つ男は、思い出したように何かを少女に放った。それは、黄金の騎士のベルトに装填されているものと同じ形状のもの。
黒色であること、紋章が無いという違いはあるが、確かに騎士の物と同じカードデッキ。

「これは？」

「かつてそのデッキを持っていた人間は、この戦いには向いていない。誰か、信頼できる相手に渡せ」

「……私に信頼できる人間がいるとでも？」

「必ず渡せとは言っていない。ただ、持っているだけでも役に立つというだけだ」

「そう。――なら、貰っておこうかしら」

「結構」

騎士の杖にカードが挿入され、少女の盾が時計の歯車のようにガキリと回転する。

「では、始めよう」

「ええ」

【ＴＩＭＥ．ＶＥＮＴ】

無機質な電子音。
それは、新たな戦いを告げる鐘。
唯一つの願いを求める者達の、絶望に満ちた戦いの始まり。

◆◆◆

次回、仮面ライダー龍騎☆マギカ。

「でも、本当に久しぶりね。城戸くんから話しかけてくれなかったら、あのまま気付かないままだったかも」

「僕も同じだよ。しばらく見ない内に、マミちゃんガラッと雰囲気

変わってるもん」

「本当に城戸くんは変わらないね。……私は、こんなに変わっちゃったのになぁ」

――「いつでも助けに行くからさ」

願いを胸に戦え。未来を描く為に。

プロローグ・同じなのは欲望だけ（後書き）

どうも、作者の一条です。
なにかと類似点の多い龍騎とまどマギのコラボ、いかかでしょうか。
……やばい、ぜんぜん書くことがない（笑）
ので、キャラ考察に逃げます。

・まどマギのキャラを龍騎キャラに置き換えると？
（）内は似ている理由。

まどか→龍騎（戦い止めたい）
ほむら→ナイト（特定の誰かを助けたい）＋オーディン（タイムベント）
さやか→ファム（特定の誰かを助けたい、武器繋がり）＋ライア（音楽家の友達）＋タイガ（だんだんと病んでいく）
マミ→ゾルダ（武器繋がり）＋シザース（言わずもがな）
杏子→王蛇（戦闘好き、食うか？）＋インペラー（実利主義、東條に見せた優しさ）
キュゥべえ→神埼（全ての元凶）＋ゼイビアックス（宇宙人、悪徳商法）

行き当たりばったりになりそうな本作ですが、楽しんでいただけると嬉しいです。
QB？　とりあえずリンクベントで吹っ飛ばしたいしたいですね☆
では、また次回。

いつでも助けに行くからさ．1

「ついてない……。こんな急いでる時にガス欠って……」

雲一つない爽やかな朝。
にも関わらず、僕こと城戸龍二（きど・りゅうじ）の気分は晴れない。
それもそうだ。寝覚めの悪い夢を見た挙げ句に寝坊。親元から離れて一人暮らしの僕を起こしてくれるヤツもいない。メシも食わずに慌てて家を飛び出し、トドメにスクーターのガス欠。

高校生活が始まってはや数ヶ月、完全に遅刻確定だ。
急ぐ気力なんて欠片も残ってない。

「ちゃんと燃料メーター見てればなぁ……ああ、もう！　それもこれもあんな夢さえ見なければ！」

本当に変な夢だった。

まず、僕は今の年齢よりずっと大きくなっていた。
多分、二十代くらいだろう。
更には僕が死にかけてて、傍らには知らない女の子が泣きながら寄り添ってて、最後は僕が何かかっこいいこと言いながら事切れて……。

「だいたい何なんだあの女の子は！　こちとら年齢＝彼女いない歴だぞコンチクショー！」

あれか、素敵な出会いを求める僕の空想の産物か！　だとしたら残念すぎるぞ僕の思考能力！

（……でも、なーんか覚えがある気もするから不思議なんだよな）

誓ってもいいけど、僕は今まで一度たりとも、あんなドラマチックな場面に遭遇したことはない。だが頭の中には、これを夢だと認めない自分も確かにいて。

「まったく、なんなんだよ。この厨二病の一歩前みたいな夢」

あと、聞いたことない単語もいくつか聞いたっけ。『ミラーワールド』とか『ライダー』とか。

……ってか、こうしてみると随分精密な夢だなオイ。

（まぁ、夢のことばかり考えていても仕方ないか）

心機一転。うんうん。ようやく僕らしい思考ができるようになってきた。

よし、まずは上手い遅刻の言い訳を模索しないと……。

――――キィィィィィィィィィィン！

「えっ？」

スクーターを止めて立ち止まる。鼓膜を震わせる不協和音。甲高い耳鳴り。

きょろきょろと周囲を見渡すが、ここは大通りに近く、車の騒音や人の喧騒に溢れている。

この雑音の中にあって、あんなに強く響く音を出せる物体なんて、まったく見当たらなかった。

しかも、あれだけ大きいボリュームにも関わらず、僕以外の誰も気に留めていない。

（なんだろ。空耳かな……ガラスを爪で引っ掻いたような音だったけど）

なんとなしに、すぐ傍にあった大通りに面するビル――そこに貼られたガラスを見る。

――――ガァァァァッ！！

「あれっ？」

僕は目を細めた。おい、今一瞬、ガラスに『赤い大きな影』が映らなかったか？

再度大通りの方を確認する。しかし、そこには見慣れた街の風景しかない。

せいぜい赤いものといっても、僕の赤いスクーターと、ちっちゃいポストが一つだけ。

「……あはははは」

いよいよもって本格的にヤバいかも知れない。
この歳で幻覚とか勘弁してくれ。僕の目標は８０くらいまでボケずに一生を終えることだからな。

「さて、学校学校っと」

スクーターをお供に、僕は再び通学路を行く。

今にして思えば、僕はきっと気付かないふりをしていたんだろう。
不思議な夢。奇妙なノイズ。そして、赤い大きな影。
これを通して感じた――『懐かしさ』を。

◆◆◆

城戸龍二は、どこにでもいる普通の高校生だ。
――なんて、味も素っ気もない出だしじゃ満足してくれない人もい

るだろうから、ちょっと説明。

年齢は１６歳。現在は城南学園に在学中。
体力には少し自信があり、学力は……うん、察してください。
容姿も（たぶん）平均値だ。特徴らしい特徴といえば、この後ろで結ってある茶髪くらいだけど、これだって僕のイメージアップに貢献してはいないだろう。

趣味。
報道された事件やニュースを、自分なりに調べること。
誤解して貰わないように言っておくと、別に報道関係の職業を志望してるわけじゃないぞ。将来はわからないけど、今んとこそれを目標にはしていない。
ただ単に、僕が昔から何でも首を突っ込みたくなる性格なだけだ。

だから僕の原動力は、単純な好奇心や興味。
このジャーナリストごっこ以外にも、関心が少しでも向けば、とことん首を突っ込んでしまう。

これはもはや悪癖に近く、友達内ではよくバカにされる。けど、これば かりは僕も止められない。

リスクよりも、動き出したいという方に天秤が傾く――それが僕、城戸龍二という人間だ。

「てなわけで……Ｌｅｔ'ｓ　不法侵入！」

僕が今追っているのは、最近この街で起こっている謎の失踪事件だ。半年くらい前から増え始め、何の痕跡もなく、狙われる相手も無差別。オマケに目撃者もまるで無しとくれば、僕の好奇心が疼かないはずがない。

そして今、俺がいるのは、失踪者の一人が住んでいたというマンション。

……遅刻の反省文のせいで来るのが遅れてしまったけど、これはこれで好都合。

人通りが少なくなった後なら、色々と動きやすいし。

「お邪魔しますよっと」

管理人室を堂々と通り過ぎ、件の失踪者の部屋へ。

ＫＥＥＰ．ＯＵＴのテープを鮮やかに無視して、鉄扉のドアノブに手をかける。

もちろん、面倒を避けるために、手袋をはめるのも忘れない。

「お、開いてる」

ラッキー。

ピッキングはあまりやりたくないんだよね。そんなに手際良くやれるわけでもないし。

扉の奥には、被害者の荷物が引き払われておらず、妙に生活感の残る部屋が広がっていた。
警察の現場保存の精神のたまものか、いつ主が帰ってきてもおかしくないような錯覚を覚える。

「……？　暗いな、この部屋」

それもそのはず。窓にはなぜか厚い新聞紙が貼られ、夕方の僅かな光を遮断していた。

いや、窓だけじゃない。
戸棚のショーウィンドウ、洗面所の鏡、果ては時計の文字盤を覆うガラス。
可視光線を反射する物質――つまり、鏡の特性をもつものすべてが、何らかの形でその姿を隠されていた。試しに戸棚の新聞紙を剥がすが、特に変わった様子はない。

「なんでこんなことしたんだろう……お、このティーカップ高級品」

っていけない。これじゃ完全に火事場泥棒だ。
被害者さんすいません。僕は純粋に事件を追う一市民でございます。

「けど、本当に何にも手がかりなさそうだな。噂じゃ事件当時、ここは密室の中だったって言うし……」

――カタッ。

つま先が何かを蹴飛ばした。

「？　何だコレ？」

拾い上げてみると、それは黒いカードケースだった。
装飾も何もなく、中には青い表装のカードが何枚か入っている。

「被害者、トレーディングカードでもやってたのか」

試しに一枚引き抜いてみる。表面もシンプルで、特筆すべきところはない。

一枚目のカード名は――『ＳＥＡＬ』。……封印？

――キィィィィィィィィィィン！

「うっ！」

突如発生するノイズ。
これ、今朝と同じ音じゃないか……？
けれど、今度は車や雑踏さえも存在していない。完全な静寂の中にあって、どうしてこんな甲高い音が聞こえてくるんだ？
しかも今朝の時よりも、更にはっきり聞こえてくる。

……なんだか薄気味悪くなってきた。
いくら好奇心があるといっても、恐怖心がないわけじゃない。
『好奇心猫を殺す』とはよく言ったもので、そのあたりの引き際は

弁えている。

どうしようか迷った挙げ句、ケースをポケットに突っ込み、僕はそそくさと部屋を後にする。

「……？」

ふと、最初から新聞紙が貼られていなかった窓を振り向く。
破れた紙の隙間から、夕日の光が差し込んでいるだけだった。

◆◆◆

「……なんか変なんだよなぁ。今朝から」

大通りをぼけーっとしながら歩く。
手元には、さっき持ってきてしまったカードケース。

耳鳴りはもう聞こえないが、マンションから出て以降、変な違和感は纏わりついたままだ。

なんかこう……常に誰かに見られてるみたいな。

殺し屋か？　１３の称号を持つスナイパーだかブラックキャットが狙っているのか？

「……って、それこそ厨二病まっしぐらな妄想じゃん」

溜め息混じりにカードケースをポケットに入れる。

（……さっさと帰った方がよさそうだな）

今朝のこととといい、こういう日はさっさと寝てしまうに限る。

腹も減ったし、『花鶴』で何か食べてから帰ろうか……。

今後の予定を立てながら、何回目かの角を曲がった。

その時、不意に視界の正面に影が割り込んできた。

「わっ！」

反応はできたが、回避は不可。

「きゃっ！」

そんな可愛らしい声。直後、どさりと何かが落ちたような音。

僕はなんとか転ばずに済んだが、向こうはそうもいかなかったらしい。

目線を下に移すと、そこには女の子が一人、尻餅をついていた。

「あっ、ごめん。大丈夫？」

曲がり角でごっつんこなんてシチュエーション、男なら一度は憧れるものだけど、実際に起きたら平謝りするしかないのが現実だ。

「えっと、大丈夫？　立てる？」

「いたた……あ、大丈夫です。こちらこそすみません。余所見しちゃってて」

僕が差し伸べた手を取り、女の子は立ち上がる。

見た感じ、俺とそこまで年は代わらないが、着ている制服は中学校のものだ。

確か……見滝原中学のだったかな。

手入れの行き届いた金髪はツインテールにされ、左右に伸びる髪はくるくるとロールにされている。

どことなく上品な雰囲気を醸し出していて、服の埃を払う様まで優雅に見えてしまう。

顔立ちやスタイルもかなりのもので、万人が美少女と評価するに違いない。

「本当に大丈夫？　怪我とかしてない？」

「いえ、お構いなく。お気遣いありがとうございます」

ニコリと笑う様子に、不覚にもドキッとしてしまった。

うわー、かわいいなこの子。

（……あれ？）

女の子の笑顔を見た途端、また例の既視感が襲った。

むう。今日はこんなのばっかりだな。

「？　あの、どうかしましたか？」

「あ、ううん。何でもないんだ」

こんな美少女に『変な人』とカテゴライズさせるのはゴメンだった。

普通にヘコむ。

「その、本当にごめんね」

「ふふっ、二回目ですよそれ。でも、私なら大丈夫ですから」

優美な笑顔を最後に、女の子は反対方向に歩いていく。

むー、どっかのお嬢様みたいだったなぁ……ま、もう会うこともないだろうけどさ。

ちょっぴり虚しさを感じながら、僕も女の子の後ろ姿から目を離す。

『じゃあ、約束！』

『うん、約束っ！』

「……」

立ち止まる。
まさか。という思いが去来し、身体の自由を奪った。

根拠もなにもない。
でも、確かめずにはいられなくて。

「ねぇキミ！」

「？　はい？」

きょとんとした顔で、女の子が振り返った。少し気が削がれるが、構わず問いかける。

「あの、間違ってたらごめん。
――ひょっとして、マミちゃん？」

女の子が目を見開いた。

「え、ええ。私は、巴マミですけど……ごめんなさい。どこかでお会いしました、か……？」

女の子の声が、尻すぼみになっていく。
物凄い剣幕でこっちとの距離を詰め、そのまま僕を凝視してきた。

……っていうか、あの、近いです。
ヤバい、この状況はいろいろとヤバい！
鼻を突く女の子特有のいい匂いとか、超至近距離にある唇とかが特に！

そんな俺の心境を知ってか知らずか、女の子はようやく離れ、口を開く。

「あなた……城戸、くん？」

信じられないという風に、女の子――マミちゃんは僕に聞いてきた。

「そうそう、城戸龍二。嬉しいなぁ～、覚えててくれたんだ！」

「忘れるわけないでしょ。失礼ね」

「そうかなぁ？　一目じゃ僕だってわかんなかったくせに」

「それ、お互い様じゃないかしら？」

うっ、痛いところを。

「しょうがないだろ、もう何年振りだと思ってるんだよ。マミちゃんもずいぶん雰囲気変わってるしさ」

「あら、城戸くんこそかなり雰囲気変わってるわよ。声も少し低くなったし、髪まで染めちゃってるし。背はあんまり伸びてないけど」

「ひっでぇ！」

懐かしいやり取りのせいか、つい口元に笑みが浮かんでしまった。つられてマミちゃんもくすくす笑っている。

「まぁとにかく、久しぶり。城戸くん！」

「ああ。久しぶり、マミちゃん！」

――無限に広がる運命のひとつ。

運命に囚われた者と、運命を変えた者。
その出会いは――必然。

いつでも助けに行くからさ．１（後書き）

えー、本編はマミさんルートを辿りそうですが……作者は杏子が好きです（え

当初は浅倉みたいにダーク路線まっしぐらかと思いきや、いい子過ぎるだろ杏子……。

・「大久保編集長は真司の大学時代の先輩」……というのが公式設定らしいので、現段階では龍二と編集長は出会ってません。

・オリジナル主人公の城戸龍二くん。

真司よりもどちらかと言えばドラゴンナイトのキット寄りな性格です。

真司よりも更に子供っぽく、真実のためなら危険を省みないところもあり、なかなかに危なっかしい。

しかし、強い正義感と自他ともに認めるバカなのは、本編の龍騎と同じです。

・ブランクのカードデッキ入手。変身自体はそう遠くない内にやりますが、契約はまだ先です。

次回はオリジナルキャラが来ます。まぁ、使い回しキャラと言えなくもないのですが……；

では（＾Ｏ＾）

いつでも助けに行くからさ．２

男は立ち尽くし、ただ一枚の画用紙を凝視していた。

広くはない部屋だった。ステンドグラスが四方を囲み、色鮮やかな光が差し込んでいる――しかし今、その光はやや薄ぼんやりとしている。
それもそのはず。ステンドグラス一面には大量の画用紙が貼られ、外からの光を遮っていたからだ。どことなく、異様な雰囲気を漂わせている。

異様といえば、描かれた絵の内容も実に奇妙だった。

多種多様な動物の落書き。
その全てに共通するのは、常識では考えられない容姿をしているということ。
まるでロボットのように機械的なものから、人間のような八頭身の身体のもの。中には杖を持っているものまである。

生き物というよりも怪物――『モンスター』と呼ばれるべき存在だ。

「これは……」

そして、男の持つ一枚の画用紙。
一見すると、赤い線が無秩序に引かれただけの絵。
しかしよく観察すると、赤線で囲われた空白が、何かの動物の形を作り上げている。

まるで、絵の中の動物だけが、勝手に抜け出したかのように。

男は険しい表情のまま、ガラスに貼られた別の絵を瞳に移す。

「……皮肉だな。戦いを望まないお前が、再び赤龍を引き寄せるのか」

男の視線の先にある絵――そこには、龍の影を纏う赤い騎士が描かれていた。

◆◆◆

『花鶏』。
都内某所に店を構える小さな喫茶店。
一昔前の意匠を凝らした洋風家屋に、赤レンガ積みの壁。
メニューも悪くない、隠れた名店だ。

「コーヒー置いてないのが難点なんだけど、いいかな？」

「ええ。私、紅茶派だから」

からんからん、と乾いた来客用の鈴が鳴り、視界には木造の床と数組のテーブル席、質素なカウンターが広がった。

「リョウさん、こんばんは～！」

「お～、龍二くん。いらっしゃい」

応対するのは４０代前半の男性。

このカフェの店長、榊原リョウさんだ。

……いや、実際には店長ではない。
ただ、本当の店長が、隙あらば外国に飛ぶ旅マニアで、リョウさんはただの代理店長とのこと（おかげで僕は、未だに本当の店長を見たことがない）。

顔に刻まれた皺は渋さを色濃く体現し、がっしりした体格は格闘家と比べてもなんら遜色はない。
実際、前に「俺って実は中国拳法の達人なんだよはっはっは」って言ってたし。

気さくかつ話しやすい性格で、常連客からの人望もあるナイスなおじ様だ。

「珍しいですね。この時間だったら、もうちょっとお客さんが来てると思ったのに」

「あはは、自営業の喫茶店の客足なんて、バラつきがあるもんだよ。――おや？　そっちのお譲ちゃんは？」

「うん。ちっちゃい時の友達。そこで偶然一緒になってさ」

俺の後ろにいたマミちゃんが、小さく会釈する。

「巴マミです。はじめまして」

「あ、これはどうもご丁寧に。俺は榊原リョウ。よろしく、お譲ちゃん」

小さなお客さんにも、リョウさんは飄々とした態度で答える。
この対応力、いつかご教授願いたい。

自己紹介の後、リョウさんは僕とマミちゃんを交互に見比べ、なぜ

か妙に腹の立つ笑みを浮かべた。

「ほほーう。龍二くんも隅に置けないねぇ」

「……何を勘ぐってるのか知りませんケド、僕とマミちゃんの間には何もありませんから」

「またまた〜。こんなかわいい子つかまえてそりゃないでしょ」

「はいはい、中年の噂好きもいいですが、注文ちゃんと聞いてくださいね」

いや、マミちゃんがかわいいのは認める。
だけど、所詮は友達というだけ。
加えて言うなら、もう何年も会っていないような間柄だ。

結局僕らが注文を終えるまで、リョウさんはニヤニヤを止めてくれなかった。

「……ごめん。リョウさん、悪い人じゃないんだけど」

「ふふっ、わかってるわよ。ほら、早く座りましょ」

マミちゃんは特に気にした様子もなく、手近なテーブル席に座り、僕もそれに倣う。

「素敵なお店ね。こんなところ、全然知らなかったわ」
「目立たないところにあるからね。僕も学校帰りに偶然見つけたんだよ」
「学校か……城戸くんは今、どこに通ってるの？」
「ああ、城南学園。実家遠いから一人暮らし中なんだ」
「そっか。おじさんとおばさんは元気？」
「元気元気。ついこの前も、参考書の束送ってきたし」
「あ。成績結構悪いんだ」
「ほっとけい」

くすくす笑うマミちゃんを見て、やっぱり変わったなと思う。
ちっちゃい頃は、こんな外向的なタイプじゃなかったのに。

――僕とマミちゃんは、一応幼馴染と呼ばれるものだ。
といっても前述のとおり、もう何年も会っていない風化した関係性。

小学校二年生くらい、だったか。
僕の家が引っ越してしまうまで、ずっと一緒に遊んでいた。
男女と一歳違いという差こそあったけれど、かなり仲のいい方だっ

たと思う。
元気バカな僕が、友達付き合いが苦手なマミちゃんを引っ張っていたという感じ。

ただ、僕が引っ越してしまった後、時間の流れもあってか、マミちゃんの家とは疎遠になってしまった。
手紙も何度か出したが、返事が返ってきた覚えはない。

なんのことはない。小さい頃にありがちな思い出話で、ついさっきまで忘れていたこと。
まさか、あれから何年もたった今、こうして会うことになるとは思わなかったけど。

マミちゃんの側もそれは同じのようで、

「でも、本当に久しぶりね。城戸くんから話しかけてくれなかったら、あのまま気付かないままだったかも」

「僕も同じだよ。しばらく見ない内に、マミちゃんガラッと雰囲気変わってるもん」

「あら、私そんなに変わった？」

「うん。大人っぽくなったって言うのかな。ちっちゃい時のマミちゃんが嘘みたいだよ」

「あはは、ありがと♪　城戸くんは、あの時と変わらないのね」

「え、何ソレ、貶してる？」

「ううん、褒めてる。小さい頃と同じで、一緒にいて安心できるもの」

またマミちゃんの必殺スマイル。

……これは一応、まだ友達関係は続いてるってことでいいんだよな。

「けど、本当にマミちゃん変わったよな。引っ越す時『いかないで』なんて泣きじゃくってたから、あの時の僕としては心配だったんだけど」

「うっ……な、なんでそういうことはしっかり覚えてるのよ」

マミちゃんと言えど、こういう思い出は恥ずかしいらしい。

この子の場合、今がしっかりしてる分、小さな頃は黒歴史の宝庫だろうからなー。

「ずーっと昔の話でしょそれ。何年も経てば、私だって変わるわよ。……本当に、あれから色々あったし」

「……？」

ぽつりと付け加えられた言葉に、やや違和感を覚える。
僕が首を傾げたのを見たのか、マミちゃんは取り繕うように言った。

「私のことより、城戸くんのこと教えてよ。せっかくまた会えたんだし、私のことばっかり聞くのはフェアじゃないでしょう？」

「何だよその理不尽な理屈……」

しかも、マミちゃんのことはほとんど聞けてねーし。
いや、別にいいんだけどさ。

「僕のことか……ああ、そうだ。最近は変な事件とか追ってるかな」

「変な事件？　新聞部にでも入ってるの？」

「いんや、これは完全に僕の趣味だよ。　興味が湧いたことは首を突っ込まなきゃ気が済まないんだ」

「昔も幽霊が出るって言われてた屋敷に忍び込んでたものね。しかも噂はウソで、挙げ句城戸くんは、おじさんとおばさんに怒られただけだったし」

「……マミちゃんこそ、何でそういうことを覚えてるかな」

さっきの仕返しか、マミちゃんは満足げな表情を浮かべ「それで、今はどんなことを調べてるの？」と続きを促した。

「ああ、失踪事件だよ。ここ半年で激増してる『見滝原連続失踪事件』」

「……！！」

「最近じゃかなり表沙汰になってきたニュースなんだけどね。マミちゃんも名前くらいは知ってるだろ？」

「……え、ええ。まぁ人並みには」

あれ？　食い付きが悪い。マミちゃんの顔が一瞬で強張った。学生の間でもよく話題になるトレンディーな事件なのだが。

「マミちゃんどうかした？　　あっ！　まさか、失踪者の中に知り合いがいたりなんてことは……」

「う、ううん。そういうわけじゃないの。ごめん、続けて」

トラウマを刺激したという訳ではないらしかった。

安心半分、ならば何故、あんな表情をしたのだろうか？　という疑問が残ったけど、とりあえずは話を進めることにする。

「この失踪事件がさ、なんだか普通じゃないらしいんだよ。密室の中で消えたってケースもあるみたいでね」

「でも、噂なんでしょう？」

「確かに。でも、火の無いところに煙は立たぬって言うだろ。それに、こんなに次から次に人が消えるなんて、やっぱり普通じゃないし」

「……城戸くんは」

刹那、僕は息を呑む。
目の前に座るマミちゃんが、急激に声を落としたからだ。
僕を映す瞳は深く、そこに秘めた感情は読み取れない。

「城戸くんは、その事件を追ってどうしたいの？」

「えっ？　ど、どうって……」

「確かその事件、警察でも捜査が難航してるんでしょう？
被害者もどんどん増えてるみたいだし、城戸くんの言う通り、明らかに普通じゃないわ。最悪、城戸くんが消えちゃうかも知れない」

畳み掛けるようにマミちゃんは言う。
口調は静かだったけれど、不思議と気圧される声だった。

「子供の頃は怪我で済んだかも知れない。でも、その幸運がいつまでも続くとは限らないのよ？　中途半端に関わろうとするのは、止めた方がいいと思うわ」

僕は思わず言葉を失っていた。
有無を言わさぬ力強さを持つマミちゃんの声に、威圧されていたからだ。

僕の驚きによって途切れる会話。
明らかに重くなった空気の中で、マミちゃんは、はっとした表情になり、

「……ごめんなさい。変だよね私、こんなムキになっちゃって」

「いや、謝んなくていいよ。何も間違ったことは言ってないんだし」

肩を落とすマミちゃんに、慌てて僕は話を繋ぐ。

なんで焦ってるんだよ僕は。

会わなくなって数年。その期間で積み上げた成長の中で、マミちゃんが僕の知らない一面を持つのは当然のことだ。

さっきの意見だって、僕を気遣ってくれたからこその厳しい言い方だろう。
感謝こそすれ、僕が怒る謂われはない。

「中途半端に関わるな、か……。うん、肝に銘じとくよ。
でも、マミちゃんこそ気を付けなよ？　事件を追ってなかったとしても、最近物騒なのには変わりないんだし」

「あら、心配してくれるの？」

「心配しないと思うの？」

真顔で言い返す僕に、今度はマミちゃんが口をつぐんだ。

「……もう何年も会ってないような友達なのに？」

「関係ないだろ。昔だろうがなんだろうが、友達は友達だ」

そんなの当たり前だろう。
マミちゃんはしばらく呆けたように僕を見ていたが、やがて表情を緩め、

「本当に城戸くんは変わらないね」

それからぽつりと、小さな声で付け加える。

「……私は、こんなに変わっちゃったのになぁ」

「？」

どういう意味、と聞こうとするが、再び落ちた重苦しい雰囲気に、口が開かなかった。

「はい、日替わりパスタ『辛味噌スパゲティ』お待ちどう様！」

そんな僕らに救世主が颯爽登場。
リョウさんが、注文した日替わりパスタを机の上に置く。

「……リョウさん、この妙に赤々しいパスタは一体」

「いや、辛味噌ラーメンがあるんだから、辛味噌パスタがあってもいいかなと思ってね。ちょっと作ってみたんだ」

「た、確かに合うのかもしれませんけど……」

マミちゃんもリアクションに困っている。

だってこのパスタ、すげー辛そうだもん。実物を前にしてみると、とても「これ食ってもいいかな？」と率先して食う気にはなれない。

「まぁ、騙されたと思って食べてみなって！　ちなみに栄養バランスには自信あるよ～。それはもう生まれ変われるほどに強くなれる！」

客に対して、騙されることを強要する店ってどうなのよ。

つっこむ暇すら与えてくれず、リョウさんはカウンターの奥へと消えていく。

『……はぁ』

重い空気が霧散してしまい、二人で溜め息をつく。
さて、とりあえずはこの爆弾メニューを片付けよう。

いつでも助けに行くからさ．３

「辛かった……」

「でも、意外に食が進んじゃったね」

結論から言うと、辛さを除けばおいしかったですよ『辛味噌スパゲティ』。

だがおそらく、花鶏の日替わりパスタを僕が頼むことは二度とはないだろう。
今回はなんとか無事だったが、今後更なる爆弾メニューが作られる可能性もある。
油断は禁物だ。

で、その後の僕らはというと、取り敢えずは並んで帰路についている。
マミちゃんは「気にしないで」と言ってたけど、やっぱ女の子の一人歩きは何かと危ないしね。

……心配性と笑うなら笑ってくれ。

「マミちゃんも、一人暮らしって言ってたよね。どのあたり？」

「えっと、ここをまっすぐ行ったところにあるマンション」

分かれ道の右を指差すマミちゃん。
僕の家とは別方向だった。

「そっか。じゃあここでお別れね」

「付き添わなくて大丈夫？」

「うん。もうそんなに距離もないし。それとも城戸くん、私の私生活が気になるのかしら？」

「べ、別にそんなつもりで言ったわけじゃないっての」

悪戯っぽく笑うマミちゃんの不意打ちに、顔が紅潮していくのがわかる。
……夕方だし、紅くなってるの見られてないよな？

――キィィィィィィィィィン！！

「っ！！」

咄嗟に頭を押さえる。
またか……。いったい何なんだ、この耳鳴り。

「城戸くん？」

マミちゃんが心配そうに顔を覗き込んできた。

「どうしたの？　急に頭押さえて……」

「あ、ああ。大丈夫大丈夫。最近寝不足な日が続いててね。気にしないで」

このなんでもない反応を見る限り、マミちゃんにさっきの音は聞こえていないんだろう。
なら、言ったところでどうにもならない。余計な心配をさせるだけだ。

「そう……でも、無理な夜更かしはしちゃ駄目よ。疲労は溜まるし、免疫も弱くなっていくんだから」

「あはは……面目ない。――ねぇマミちゃん、ケータイ持ってる？」

「？　持ってるけど」

「ちょっと貸して」

マミちゃんは首を傾げながらも、バックからシンプルなデザインの携帯電話を手渡してきた。

うわっ、アドレス帳がら空きじゃんか。
あんまり使ってないのかな？

「ほい。僕のアドレス」

「えっ？」

慌てて返却されたケータイを見るマミちゃん。
そこには新しいアドレスが登録されているはずだ。

「せっかく近くに住んでるんだし、また暇な時にでもメールしてくれよ」

「え？　あ、でも、私……」

「あ、迷惑なら消しちゃっていいから。
でも、もし困ってることがあるなら連絡してくれ。

いつでも助けに行くからさ」

もちろん、純粋にマミちゃんとの縁を切りたくなかったというのもある。
けど、彼女が困っていたら助けに行きたい、という気持ちにも嘘はなかった。

ふとマミちゃんを見ると、ケータイをガン見したままノーリアクション。

「……あー。やっぱ図々しかったかな」

ちょっとショックだが仕方がない。
頬を軽く掻いて、アドレスを削除しにかかる。

「だ、駄目！」

しかし、今度のマミちゃんはケータイを渡してくれなかった。
ケータイを胸に抱えるようにして、僕の手が届かないようにガード。

「ぜんぜん迷惑じゃないから！　消さなくていいから！」

「あ、ああ。そう……」

再会して以降、最も必死なマミちゃんの様子。……まぁ取り敢えず、迷惑じゃないなら良かった。

僕が手を引っこめると、マミちゃんは安心したように、もう一度ケータイの画面に視線を戻す。

しばらくマミちゃんは嬉しそうだったけれど、やがてその表情にも陰りが差し込んだ。

「……城戸くん」

「ん、何？」

「本当に、助けてくれる？」

マミちゃんの瞳が深まっていく。
さっき僕が、失踪事件の話を持ち出した時と同じ、形容し難い威圧感を放つ表情。

だが、何故だろうか。
プレッシャーを感じると同時に、僕の目にはマミちゃんの姿がとても儚く映っていた。まるで――

「私が助けて欲しいって言ったら、本当に助けてくれる？」

今にも泣き出してしまいそうな。
だから、僕は迷わず答えた。

「当たり前だろ。友達なんだから」

僕がそう言うと、マミちゃんは嬉しそうな、しかしやっぱり何処か悲しそうな笑顔を向けてきた。

「……そっか、ありがとう」

去り際、マミちゃんは呟くように言った。

「本当に、城戸くんは変わらないね」

さっきと同じ言葉。
だが僕は、その一言だけで突き放されたような気持ちになる。
夜の暗闇がマミちゃんを飲み込むまで、僕はその場を動けなかった。

◆◆◆

「あー、頭痛ぇ……ッ！」

マミちゃんと別れた後も、頭の中に響くノイズは酷くなる一方だった。
耳元でガンガンガンガン鳴り響いてんのに、何も音源っぽいもんが見当たらない。

いよいよもって、これは空耳じゃなくなってきたな。

「何だってんだよ一体……」

独白のようにぼやき、帰りの道沿い、改装中のビルに差し掛かった時だった。

「おい、カードデッキはどこだ？」

唐突にかけられた声。
振り返ると、そこには一人の女の子が立っていた。

俺と同じくらいの年格好。
艶やかな黒髪をショートカットに切りそろえ、その下にある瞳は肉食獣を思わせるほど鋭い。女子に似合わない長身に、ジーンズに黒コートを纏う姿は、かなりボーイッシュな印象を受ける。

（……あれ？　このコ、どっかで……？）

記憶の海から情報をひねり出す。
……あっ、そうだ！
今朝見た夢に出てきたコだ！

「お前、聞いてるのか？　カードデッキは何処だと聞いているんだ！」

「か、カードデッキ？」

「とぼけるな！　さっきの音が聞こえているんだろう？　ならお前が持っているはずだ！」

乱暴に胸倉を掴み上げられた。
おいおいおい、こんな場所でカツアゲか！？

「は、放せって！」

女の子の手を強引に外し、僕は改装中のビルの中へと逃げる。

「おい待て！」

「待てと言われて待つバカがどこにいんだよ！」

僕は確かに自他共に認めるバカだけど、そんなレベルのバカにまで堕ちた覚えはない！
……あれ、変だな。涙が止まんねーや。

ちょっとセンチメンタルな気分になりながらも、入り組んだ建物を利用して、どうにかあの女の子を撒くことができた。

「はぁ、はぁっ……危ない危ない。こりゃマミちゃんの忠告に感謝しなきゃな」

失踪事件とは関係ないけど、確かに危ない目にはあった。
とにかく今は、見つからないようにビルから抜け出して……。

――キィィィィィィン！！

「うる、さいっ……」

しかもこのノイズ、さっきからどんどん大きくなってくる。
くそっ、早く鳴り止んでくれよ！

「……？」

ふと、ビルの暗がりの中で何かの気配を感じた。
違和感の先を探り、すぐ近くにあった大きな『鏡』を見る。
そこに映るのは、苦痛に歪む僕自身。

そして――

「っ！？」

僕は息を呑む。

鏡に映る僕の背後――そこには優に６メートルはあろうかという大蜘蛛が立っていた。
黄色く、関節や脚は機械のような光沢を放ち、大きく開いた口は、捕食される側への恐怖心を煽る。

――キシャアァァァァッ！

「うわぁっ！？」

大蜘蛛は、平面の世界である鏡の中から脚を伸ばし、三次元に存在する僕を襲ってきた。
かろうじて反応が間にあい、捕まることはなかった。
しかし直後、僕のポケットの中で何かが輝く。

「今度はなんだぁ！？」

取り出してみると、光源はカードデッキからだった。
目映いばかりの光は僕を包み込んで行く。
あまりにものまぶしさに、僕はつい目を瞑ってしまった。

（い、一体何がどうなって……！！）

――次に目を開けた時、そこには合わせ鏡の造り出す無限の世界が広がっていた。
どこを見渡しても鏡、鏡、鏡。万華鏡の例えが相応しいかもしれな

い。

「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――っ！！」

常識などまるで役に立たない。
僕の身体は非常識という名の法則に従い、鏡の先へ先へと引っ張られていった。

◆◆◆

「……ったく」

「城戸龍二、と言ったかしら。いつもあんな風なの？」

「ああ。どこまでも人の忠告を聞かないバカだ」

秋山蓮花（あきやまはすか）は、龍二の“吸い込まれた”鏡を見て、呆れたように溜息をつく。

彼女の傍らにはもう一人の少女がいた。
蓮花とは対照的に長く伸びた黒髪。
すらりと伸びた細身の体躯に、白を基調とした服と紫色のスカーフ。
そして左手には、異彩を放つ円盤形状の盾と、手の甲についた紫の宝石。

どことなく脱力した印象の瞳は、三白眼のお手本のようだった。

「それで、お前の方はどうだ？」

「逃げられたわ。まどかの性格を上手く利用された。美樹さやかもいるし、あまり好ましくないパターンね」

「わかった。お前はインキュベーターと使い魔の方を頼む。私はあのバカを引っ張り出してくる」

「ええ、ミラーモンスターの方もお願いして構わないかしら？」

「任せろ。終わり次第そっちに向かう」

頷き合って、少女はビルの更に奥へと消えていく。
蓮花はコートのポケットからカードデッキ――龍二の持つものとは違い、蝙蝠のようなエンブレムが刻まれていたが――を取り出し、鏡に翳した。

すると、鏡に映る蓮花の腰に、銀色に輝くベルト――Ｖバックルが装着された。
鏡の姿は、現実の姿に帰属するもの。
鏡にしか映っていなかったＶバックルは、いつの間にか現実に存在する蓮花にも装着される。

右腕を軽く曲げ、蓮花は声を張り上げ叫ぶ。

「変身！！」

掛け声と共に、Ｖバックルのスリットへカードデッキを装填。
エンブレムが輝き、蓮花に幾重にも重なった影がオーバーラップする。

それはまるで、騎士のような出で立ちだった。
黒いスーツに銀色の甲冑。表情を覆う鉄仮面は、エンブレムと同じ蝙蝠をモチーフとし、口元には特徴的なクラッシャー　。

「ふっ！」

鏡の騎士――仮面ライダーナイトは、愛剣である翼召剣『ダークバイザー』を携え、鏡の世界へと飛び込んでいった。

いつでも助けに行くからさ．３（後書き）

今回は二話投稿。
もう一つのメイン連載が進まない怒りをぶつけています……

・オリジナルキャラ……と言えるのかどうかわからない榊原さん。
彼は作者が「唯の叔母さんのキャラが掴めない……」と泣き言をほざいた挙げ句に生まれたキャラです（この世界にもちゃんと唯の叔母さんはいますよ）。
ちなみに本編とは名前が変わっていますが……名前の由来、分かりますか？

・マミさんとフレンドリーな龍二くん。しかしマミさんは若干遠慮気味。
僕の中でマミさんは、橘さんに近いものを感じるんですよね……メンタルの振れ幅が激しいといいますか。

・遂にナイト登場。当時は龍騎よりも好きでした。サバイブの格好良さは異常。

次回……折れます（笑）

それではまた（＾Ｏ＾）

いつでも助けに行くからさ．４

「イテッ！」

ようやく鏡の迷宮を抜け、僕は再び鏡から放り出された。
くそっ、吸い込んだり吐き出したりどっちかにしろよ……！

「ん？　　あ、あれ？」

顔に触れると、固い感触。
僕が出てきた鏡を見てみると、そこには奇妙な騎士の姿が映っていた。

顔を覆う鉄仮面の奥に、視界を確保する為の赤い複眼。
黒いスーツの上には銀色の鎧が装着され、カードデッキは腰のベルトに装填されている。
トドメに左手は、メカニカルなデザインの手甲。
まるで特撮に出てくるヒーローだ。

「な、なんだこれ？　　いつの間にこんなコスプレ服を……？」

次に目がいったのは景色。

何というか、文章に起こすのが不可能に近い場所だった。
方向感覚がまるで掴めないぐにゃぐにゃの世界。
改装に使われている鋼材や、立ち入り禁止の看板がフワフワ浮いてるし、空に当たる部分は緑色。

子供のラクガキが現実になったような節操の無さ。
しかしそれ故に、絶大な不気味さを醸し出している。

そしてダメ押しと言わんばかりに、僕の目の前には――

――キシャァァァァ！！

鏡に映っていた大蜘蛛が三次元に飛び出し、僕を喰わんとすべく、
その大口をぱっくりと向けていた。

「う、あっ……」

声が掠れた。
怖じ気づくな僕。
あの蜘蛛は幻じゃない、このままじゃ絶対喰われるぞ！

――キシャアァァァァ！

「のわぁぁぁぁ！」

全速力で大蜘蛛から逃げ出す僕。
右も左も分からないラクガキ空間を、とにかく道なりに走っていく。
その間も大蜘蛛は、とんでもないスピードで僕を追いかけてきていた。

（冗談じゃない、死因が蜘蛛に喰われたなんて絶対イヤだぞ！）

だが、僕の祈りも空しく、大蜘蛛は壁伝いに移動して先回りし、僕の進行方向に立ちふさがった。

目の前には、数秒後には僕を捕食するであろう口。
やべえ、マジで終わったかも知れない。

色々な映像が走馬灯として駆け巡っていく。グッバイ僕、１６年という短い時間だったけど、それなりに楽しめたぜ。

とうとう大蜘蛛は、その鋭い脚で、僕を捕らえにかかった――

――ブォン！！

しかし次の瞬間、大蜘蛛は、周囲に浮かぶガラスから飛び出してきた何かに弾かれた。

「おいおい、また変なのが来たぞ……」

飛び出してきた何かは、どうやら乗り物のようだ。
見た目は縦長のカプセルのようで、地面との摩擦で火花を散らす前後輪は、どことなくバイクを想起させる。

と、バイクのカプセル部分が上に開き、中から操縦者が顔を出した。
ちょっとデザインは違うけど、今の僕と同じ。鉄仮面と甲冑をつけた騎士だ。

蝙蝠のような印象を受ける騎士は、僕の前に立ち、新たな敵を警戒する大蜘蛛と対峙した。

「私にカードデッキを渡さないからだ」

こちらをちらりと見ながら、蝙蝠の騎士はそう零した。

……この声は……！

「キミ、さっきカードデッキを盗ろうとした……」

僕を無視して、蝙蝠の騎士は自分のデッキに手を伸ばし、カードを一枚引き抜く。

携えた長剣の装飾、蝙蝠の翼のような鍔を開き、そのカードを装填した。

【ＳＷＯＲＤ．ＶＥＮＴ】

無機質な電子音が鳴り響き、上空を舞った黒い影から、巨大な槍が騎士に受け渡される。

「下がっていろ」

言い残して蝙蝠の騎士は、大蜘蛛へと向かっていく。
騎士の槍と、大蜘蛛の鋭い脚がぶつかり、激しい攻撃の応酬が繰り広げられていた。

「これか……？」

さっきの騎士がしたように、僕もデッキからカードを一枚取り出す。

ガチャッ！

すると、左手の手甲がスライドし、カードを装填する溝が現れた。
恐る恐る、カードを入れてみる。

【ＳＷＯＲＤ．ＶＥＮＴ】

電子音が鳴り響き、天から振ってきた一振りの剣が、地面に突き刺さった。
不気味な色の空を見上げてみるが、剣を授けてくれるありがたい存在はどこにもいない。

……すげぇ。本当に僕にもできた。

「ふんっ！」

力任せに剣を引き抜く。ずしりと伝わってくる重さに、僕は興奮を隠せなかった。

「よぉーし……なんか分かんないけど、僕も！　――だぁぁぁぁぁぁ！」

大声と未知への好奇心で恐怖を振り払う。
僕は剣を握り締めたまま、まっすぐに大蜘蛛へと向かっていった。

「！　おい待て！」

蝙蝠の騎士が何か言っているが無視する。
大丈夫だ、僕にだってやれる！

「うおりゃあっ！」

気合い一発。
大蜘蛛に向かって、力いっぱい剣を振り下ろし……、

バキィンッ！

……振り下ろした瞬間、剣の刀身は半分に折れた。

「えっ？　折れたぁ！？」

ええ、あんな小枝のように見事な折れ方は、後にも先にもこれが初めてでしたよ（龍二・談）

結果、無能を晒した僕は大蜘蛛のカウンターを食らい、後ろに吹っ飛ばされた。
その進行方向には、蝙蝠の騎士。
……あ、仮面越しにもわかるくらいに蔑んでる。
やめて、そんな目で僕を見ないで！

「ふんっ！！」

「ぎゃっ！！」

ハエを払うような淀みなさで、騎士は槍の柄の部分を使い、僕の吹っ飛び方向を右に変える。
地面をずしゃーっと滑りながら、僕はようやく停止できた。

「痛って〜〜！」

「邪魔をするな！」

騎士のキツい叱責を浴びながら、僕はおとなしく傍観に徹することにした。
……べ、別に悔しくなんかないからな！

【ＡＤＶＥＮＴ】

――キィィィッ！

新たなカードが読み込まれ、くすんだ空を巨大な蝙蝠が甲高い声をあげながら滑空していく。
なるほど……さっきの槍は、この蝙蝠が運んできてたってことか。

蝙蝠が大蜘蛛の相手をしている間に、騎士はもう一枚――デッキの

エンブレムと同じ絵柄のカードを装填した。

【ＦＩＮＡＬ．ＶＥＮＴ】

それが何かの合図であったかのように、騎士は槍を構え直し、大蜘蛛へと特攻をかける。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ！」

さっきの蝙蝠が騎士の背中に張り付くようにして、漆黒のマントに変化。

「はっ！」

目標の手前数メートルで、騎士は天高く飛翔する。
空中から槍を大蜘蛛に向けると、そこを起点にしてマントが螺旋状に巻き付いていく。
まるで削岩機だ。

「はぁぁぁぁぁ――――――ッ！！」

天空より放たれる黒き一閃。
騎士と蝙蝠が一体となって生み出された技は、圧倒的な貫通力と刺突力を持って、大蜘蛛を粉々に粉砕した。

「うわっ！！」

ドォンッと派手な爆発に、僕は両腕で顔を覆った。
騎士はまるで動じた様子もなく、蜘蛛の残骸と、技の余波で燃える炎の中から悠々と立ち上がる。

「あ、ちょ、ちょっと！」

大蜘蛛の残骸を一瞥して歩き出す騎士に、慌てて駆け寄る僕。
このどっきりビックリな状況下、頼りになるのはこの騎士だけだったからだ。

「キミも僕と同じなんだよね？　人間なんだよね！？　こ、これ、一体どうなってんの！？　それに、この格好は何なんだ！？」

「説明している時間はない。一旦『結界』から出るぞ」

「け、結界？」

「……！！　避けろ！」

焦ったような声と共に、騎士はまた僕を突き飛ばす。
次の瞬間、さっきまで僕がいた場所は、特大の火炎弾によって吹き飛んでいた。

「これは……ドラグレッダーか！」

騎士が見上げた上空で身体をうねらせていたのは、赤い龍。
雄々しい二本角に、鋭い牙。つり上がった黄色い眼が、僕を睨み付けていた。

――ガァァァァァァァッ！！

猛る赤龍の咆哮が、空気を震わせた。

「……ドラグ、レッダー……？」

――あの龍と、契約して。
また知らない女の子。そして鏡に映る龍を前にして、カードを翳す
僕の姿。

ズキリ、と頭が痛む。
聞いたことがないはずなのに、覚えのある龍の名前。

そうだ……僕は、あの赤い龍を知ってる。でも、どうして？

「おい、ボサっとするな！　早く逃げるぞ！」

「え！？　ま、待ってくれ！　逃げるってどこにだよ！」

すぐに駆け出す騎士の後を追うが、赤い
龍は雄叫びも高々に僕達を――いや、違う！！

「なんで僕狙いなんだよぉ！」

よく見りゃ僕の方にしか炎吐いてねぇ！
何の嫌がらせだこの野郎！　蝙蝠騎士に吐けとは言わないけど、
僕に何の恨みがあんだよ！

『うあぁぁぁ――っ！』

連続発射された火炎弾が、ついに僕らを捉えた――

――次回、仮面ライダー龍騎☆マギカ。

「キミ達は一体、何者なんだ？」

「彼女は秋山蓮花。仮面ライダーナイトよ」

「仮面、ライダー？」

――「お前には何もできない」

願いを胸に戦え。未来を描く為に。

いつでも助けに行くからさ．４（後書き）

折れたぁ！？

・はい、ドラゴンナイトにも継承された迷シーンです。そう言えばこの「折れたぁ！？」、高岩さんのアドリブらしいですね。このアドリブで真司の方向性が決まったと思うと感慨深い……のか？

・あの世界はミラーワールドではなく結界です。「おや？」と思った方は、第三話内での説明を見てください。

未だに魔法少女版のマミさんや、ほむほむとは接点なしの龍二君。次回から絡みが増えていきますよー。お楽しみに！

どうでもいい近況

マテリアルゴーストコミカライズ……だと……？　おいおい嬉しくて鼻血出そうなんですが（え

生徒会の一存新シリーズに加え、葵先生ワールドは広がっていくなぁ……。

プロフィール紹介（5月18日更新）

城戸龍二
イメージＣＶ．鈴木達夫
年齢／１６歳
職業／城南学園高校一年Ａ組
成績／下の上
趣味／事件の独自捜査
特技／料理（得意料理は餃子）
好き／肉料理．牛乳．身体を動かすこと．猫
嫌い／雨．トンボ．犬
座右の銘／獅子奮迅
好きなゲーム／龍が如く２
好きなヒーロー／五星戦隊ダイレンジャー
理由「中国拳法カッコイイじゃないか！）」
悩み／背が伸びない
作者への不満／僕の一人称を『俺』と間違える癖を直して。

備考
基本的にアホの子。
ブレブラの奏夜とは違い、深い考えがあってバカな行動を取るのではなく、大真面目にバカな行動を取る。良く言えば自分にまっすぐ。悪く言えば無鉄砲。しかし、その大半が他人を助ける結果に繋がる為、なかなかあなどれない。

秋山蓮花
イメージCV．坂本真綾

年齢／16歳

職業／城南学園高校一年D組

成績／上の中

趣味／人間観察．読書

特技／観察眼（例・相手の体重を見抜ける）

好き／焼き魚．静かな場所．かわいいもの全般

嫌い／犬．人の話を聞かない奴．騒がしい場所

座右の銘／過ぎたるは及ばざるが如し

共感できる小説／僕は友達が少ない

好きなヒーロー／激走戦隊カーレンジャー

理由「このご時世、フィクションの中でくらい笑える方がいいだろう？」

悩み／主に龍二関連でストレスが溜まり気味。

死ぬまでに一度はやりたいこと／神崎をぶん殴る

備考

基本クールなのは蓮と変わらず。

しかしそこに年頃の女の子らしさが加わる為、たまにキャラが保てなくなる。

今後はクールさだけでなく、女の子らしさも出していきたいです。

ちなみにほむらとは、苦労人同士で気が合っている模様。

おまけ

魔法少女達の好きなヒーロー（作者予想）

・まどか→炎神戦隊ゴーオンジャー

まどか「炎神のみんなが可愛いから♪」

・ほむら→仮面ライダー555
ほむら「内容というか……ヒロインの子供時代を演じた小役が好きなのよね。何でかしら？」

・さやか→救急戦隊ゴーゴーファイブ
さやか「人の命を守るってスタンスが一番強調されてるから！やっぱ正義の味方は人助けでしょ！」

・マミ→仮面ライダークウガ
マミ「戦わなきゃならない宿命を一人背負いながら、それでも決して笑顔を絶やさない……凄いことよね。私もこんな強さを持てたらなぁ……」

・杏子→海賊戦隊ゴーカイジャー
杏子「戦う理由が基本的に自分達の都合ってとこがいいんだよな。マーベラスの『気にいらねぇもんはぶっ潰す』ってセリフにゃあ痺れたぜ」

プロフィール紹介（5月18日更新）（後書き）

ほむほむが555好きな理由が「わけがわからないよ」という人は、真理の少女時代を演じた人を調べてみてくださいな。

お前には何もできない．１

「くっ！」

「ぎゃふん！」

炎の生み出す衝撃と熱波。
騎士は見事に着地し、僕は地面に正面からダイブ。

「走れ！」

「無茶言うなよ！」

震える足を叱咤し、必死に騎士を追いかけていく。
騎士が駆けていく先には、大蜘蛛の映っていた大鏡が鎮座している。

「アレに飛び込め！」

「はぁ！？　正気なのか！　鏡が割れるだけだろ！」

「安心しろ、私達は『仮面ライダー』だ！　姿の映るものさえあれば、この『結界』から出られる！」

「……あ～もう！　責任とってくれよ！」

細かい理屈は全部あとだ。
どっちみち、この騎士に従うしか助かる見込みはないんだから。

――ガァァァァァァァ！

龍はすぐそこまで迫っていた。
背中を押す熱が、トドメの火炎弾が放たれたことを告げてくる。

（どうにでもなれぇ！）

僕は仮面の下で目をぎゅっと瞑り、大鏡の中へと飛び込んだ。
鏡が水面のように揺れ、またあの引っ張られるような感覚。
二回目とあって悲鳴さえあげなかったものの、目を瞑り続けていたために、近付いてくる硬質な床に対応できなかった。

「ぎゃん！」

もう何回目になるかわからない床との衝突事故。
その衝撃に耐えられなかった――というわけでは全然ないだろうけど、僕を覆っていた黒い鎧は、ガラスの破片のように砕け散っていた。

「あ、あの龍は！？」

「安心しろ。元の世界だ」

さっきまで仮面の奥から聞こえていた声。
しかし、そこに蝙蝠の騎士はおらず、黒コートを纏う女の子が立っていた。

「……あ」

助けてくれてありがとう。
礼を言おうとするが、ここに来て恐怖心が戻ってきて、声が出ない。

「……。結界が消えたか」

「えっ？」

女の子は僕を無視して、あのラクガキ空間の出口となった鏡の方を見る。
すると、僕の見ている前で鏡はグニャグニャに歪んでいく。
歪みが止まると、鏡の先には見た通り、ビルの柱だらけの空間が広

がっていた。

「な、なんだ今の鏡のグニャグニャ……！？　それに、あのラクガキ空間は！？」

「いちいちはしゃぐな！！」

「なっ！？　だ、誰がはしゃいでるんだよ！」

理不尽な叱責に反応するほど、僕は子供じゃない。

だけど……何故だろう。この女の子の言い方には、腹が立って仕方がなかった。

彼女はビルの奥を睨みながら「チッ！」と舌打ちし、

「いいか、ここを動くなよ！　もしさっきの龍が鏡に映ったら、デッキの中にある『封印』のカードを使え！」

「おい、ちょっと待てよ！　言うだけ言って逃げようとすんな！　まだキミには聞きたいことが……！」

「黙って言うことを聞け！　勝手にぶらついた挙げ句、龍に喰われたくなかったらな！」

黒コートを翻し、彼女はビルの闇に消えていった。

「〜〜！！　何なんだあの無愛想な態度！」

遠くなっていく足音にイライラをぶつける。震える足を無理やり動かし、僕は立ち上がった。

なんだか知らないが、あんな言い方されておとなしく従うなんて、僕のプライドが許さない。

（それに……）

カードデッキを見つめる。
マミちゃんに話した例の失踪事件。
詳しいことは何もわからないけど、もしあの大蜘蛛や龍が、人々を誘拐していたのだとしたら、全部スジが通る。
警察が解決できないわけだ。こんなの、非常識にもほどがある。

あの女の子が戻ってきたら、確実に僕のカードデッキを取り上げるだろう。
そうなれば、もう失踪事件に繋がる糸口はなくなる。
このデッキが、あの空間に行くためのカギであることは明らか。なら、このデッキを手放すわけにはいかない。

「危険は増すかも知れないけど……」

カードデッキを強く握りしめる。
人が知らず知らずのうちに消えるなんて、そんな理不尽を放っておけるか。
デッキをポケットに押し込み、僕は足早にビルを後にした。

◆◆◆

「ほむら」

暗闇の中に揺れる黒髪を見つけ、蓮花はそこに駆け寄る。
ほむらと呼ばれた少女は横目で蓮花を見て、すぐに視線を戻した。

「魔女はどうした。倒したのか？」

「魔女は逃げたわ」

凛とした声。
ほむらを挟んだ先には、三人分の人影。

桃色の髪を両サイドで縛り、どことなく幼い風体を持つ少女。両手に抱えているのは、白いウサギのような奇妙な生物。

桃色の髪の少女を守るようにして立っているのは、短く切りそろえた蒼髪が特徴的な女の子。慎重差からか、この二人はまるで姉妹のように見える。

そして、もう一人。

「追うなら早く追った方がいいわよ。今回はあなた達に譲ってあげる」

髪と同色の宝石があしらわれた黒いベレー帽。白のブラウスにコルセットを纏い、片手には、闇の中でも鈍い光沢を失わないマスケット銃。

違いは多々あるが――間違いない。

龍二の幼馴染、巴マミだ。

蓮花は眼光鋭く、マミを睨む。

「『グリーフシード』に用はない。私達が用があるのは……」

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの」

……ここにもし龍二がいたのなら、さぞマミの態度に驚いていたことだろう。
普段の柔らかい物腰は息を潜め、高圧的かつ敵意に満ちた声音に取って代わられていたからだ。

「お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

「今まで巻き込まれてきたトラブルに、余計でないものがあったとは思えないな」

「……ふ、言われてみればそうね」

二人の視線が交錯し、蓮花がカードデッキを、マミがマスケット銃をそれぞれ構える。
だがそれと同時に、ほむらが蓮花の突き出した左腕を掴んだ。

「止めなさい蓮花。そこの二人が“接触”してしまった以上、ここで戦う理由はないわ」

「……」

ほむらに諭され、蓮花はデッキをしまう。
マミも「賢明な判断ね」とマスケット銃を下した。

「行きましょう。あなたのお友達のことも気になるし」
「そうだな。放っておけば、何をしでかすかわかったものじゃない」
「ま、待ってほむらちゃん！」
身を翻しかけた二人を――正確にはほむらを呼びとめる声。
声の主は、マミの後ろにいた桃色の髪の少女。
「……なに？」
「え。あ、あの……」
呼び止めたはいいが、少女も何を話せばいいのか整理がついていないようだ。
しばらくの間、二人の間で無言の見つめ合いが続く。
そんな空気に焦れたのか、蓮花が突き放すように言う。
「鹿目まどか。それに、美樹さやかだったか」
「えっ？」
「な、なんであたし達の名前……」
まどか、そしてさやかと呼ばれた蒼髪の少女が目を瞬く。

ほむらはまだしも、あの高校生――蓮花と会うのはこれが初めてだったはずだ。

「私はお前達がどんな選択をしようと興味はない。……だが、他人にすがって叶えられる願いなど偶像に過ぎない。これだけは覚えておくんだな」

刃を思わせるほど鋭い口調に、まどかとさやかは背筋を凍りつかせる。マミも僅かながら、表情を強張らせていた。
一触即発の空気が漂うが、「行くぞ」と蓮花は暗闇の中に消え、ほむらもまた振り返らず、彼女のあとに続いた。

◆◆◆

「……で」

ほむらの声は冷たかった。
隣で立ち尽くす蓮花は茫然と、さっきまで結界の展開されていた広間を凝視する。
もちろん「動くな」という忠告を無視し、早々に逃亡した龍二の姿は、そこにはない。

「この様子じゃ、あなたが私を追って行ってすぐに逃げ出したみたいね」

「……」

――ガンッ！

無言のまま、蓮花はビルの柱を拳で叩いた。その額には青筋が浮かんでいる。
ほむらはやれやれ、とでも言いたげに、腕に装着していた盾の裏面――様々な武器を収納しているスペースの中から、水の入ったペットボトルを取りだし、蓮花に手渡す。

「今ならまだ、居場所が掴めるのではなくて？」

「……ああ」

キャップを開け、中身の水をばらまいた。
パシャリと水滴が跳ね、乾いた床を伝って水溜りが広がっていく。
鏡面にも似た水面には、変身した蓮花の連れている『契約モンスター』――ダークウィングが写りこんでいた。

「あのバカを追え。ばれないようにな」

――キィィィ！！

コウモリの姿に違わぬ甲高い鳴き声を残し、ダークウィングは水溜りの切り取る景色の外へと飛び去って行った。

「一つ、いいかしら」

「なんだ」

ほむらは蓮花に同情的するような視線を向ける。
出会ってそれほど日が長いわけではないが、無表情がデフォルトのほむらのこと。
このレベルの感情の変化にしても、かなり珍しいことだった。
……それだけ、自分を哀れんでいるということか。

「バカな友人を持つと苦労するわね」

「……お互いにな」

なにも否定できず、蓮花はそう皮肉を返すのが精一杯だった。

お前には何もできない．１（後書き）

・ほむほむと蓮花はとりあえずタッグを組んでます。不器用者同士、意外と気が合っていそうなご様子。

・ようやく登場の正規主人公のまどか＆いろいろ同情したくなるさやか。
出番少なくて満足できねぇぜ……という人はまどマギ本編で満足し（サティスファクション）てください。たぶんしばらくはこの扱いが続きます；

次回はようやく神崎以外の原作キャラが登場します。……まだチョイ役＋高校生化してますけど（苦笑）

では、また次回！

お前には何もできない．２

きーんこーんかーんこーん。

「ふわぁぁ……終わった終わったぁ……」

城南学園一年Ａ組の教室。
あのトンデモ体験から一夜明け、僕は元の日常へと戻ってきていた。
今は帰りの会が終わり、クラスメート達も「この後どこ行くー？」と、放課後の予定に思いを巡らせている。

（呑気だよなぁ……いや、僕もつい昨日まではそうだったんだろうけど）

今にも鏡から、あの大蜘蛛の仲間が飛び出してくるかも知れないのに。

――昨日から一応、カードデッキは持ち歩いている。
あの龍も、奇妙なノイズもあれからは聞こえないが、油断は禁物。

あの女の子の言っていた『ＳＥＡＬ』――封印のカードが入っていることを確かめ、僕は鞄を片手に立ち上がった。

「あ、龍二」

……立ち上がった矢先にこれか。
小さく溜め息をついて、僕を呼び止めた声の方を見る。

「……何だよ美穂。僕は忙しいんだけど」

「あらら。解決できもしない事件を追っかけて、無駄な時間を過ごすことを忙しいとは言わないのではなくて？」

茶が混じったロングヘアを揺らしながら、僕のクラスメート、霧島（きりしま）美穂（みほ）は人を食ったような笑みを浮かべる。

文武両道、クラス委員長、ついでにスタイルはモデル並み。大人びた顔立ちに、色白の柔らかそうな肌――と、神サマがいかに不平等かを証明してくれるプロフィールを持つ。

一年生にして、学内に絶大な人気を誇る存在だが、騙されてはいけない。
容姿がいくらよくても、性格はいろいろと残念なヤツだ。

「どうせアンタ、また放課後ヒマなんでしょ？　だったら私に付き合いなさい」

「お前の都合なぞ知らん。それにヒマというなヒマと。探求心を満たす高尚な行動と言え」

「ちょっとカッコいい言い方しても無駄よ。アンタ、その人を食ったような態度なんとかならないの？」

「安心しろ。僕がこんな態度するの、お前の前だけだからさ♪」

殴られた。

「おまっ……腹パンって……描写すらされない速度の腹パンって……！」

「ふん。せっかくの人のお誘いを無下にするようなバカにはいい薬でしょ」

「いや、これは薬とかじゃれ合いじゃすまんぞ……立派な暴力だ……」

これである。

……この悪の大魔王みたいな女と僕が、いかにして知り合ったのかについては、一応語るべきエピソードがあるのだけど……正直思い

出したくもないので割愛シマス。

「まぁとにかく、付き合って欲しいのには付き合って欲しいの。お姉ちゃんの誕生日が近くってさ」

「――ああ、そういう用事か。てっきりまた『新作ケーキができたからおごれ』みたいな話かと」

「……アンタは私を何だと思ってるの？」

「人の皮を被った悪魔。またはそれに準ずる何か」

腹パン二回目。

「うふふ～♪　まだ薬が効かないのかしらん？」

「は……はい、すんません」

「わかればいいのよ」と、美穂は笑顔。

美穂さん美穂さん、そうは言いながらも、目がまるで笑ってませんよ？

「それで？」

「……わかったよ。付き合ってやる」

僕も以前から、美穂のお姉さんにはお世話になっている。
美穂個人のワガママなら軽くあしらっていたところだが、そういう用事なら手伝わないこともない。

「でもさ。男の僕の意見が、プレゼント選びの参考になるとは思えないんだけど」

「いいのいいの。こう時は、視点や感性が違う人を連れて行くのが一番なのよ」

「ふーん、そんなもん？」

「そんなもん」

美穂は無邪気に笑う。
……その笑顔をもう少し安売りして貰えないものか。

「じゃあ、行きましょうか。ちょっと歩くけど、いいわよね？」

「オッケー。なるべく早く済ませ……」

「おーい、城戸ぉー！！」

僕と美穂が教室を出ようとした時だった。
出口付近のクラスメートが、僕を呼んでいる。

「なにー？」

「お前に用があるって子が来てるんだけどー？」

「？　僕に？」

誰だろう。
僕が首を傾げていると、その人物はゆったりとした動きで、教室に入ってきた。

「……！！」

背筋が凍り付く。

固まった僕を差し置き、その人物――昨日の夜、蝙蝠の騎士に変身していた少女は、感情の読めない表情を浮かべていた。

昨日の黒コート姿とは異なり、城南学園のクリーム色のブレザーとスカートに身を包んでいる。その姿はボーイッシュな印象を相殺し、彼女が確かに女性であることを証明していた。

「何の用かはわかっているな」

僕が小さく頷くと、彼女は「来い」と教室を出て行く。

「……悪い美穂。プレゼント選び、行けなくなった」

「えっ？　　な、なんでよ。それに、あの子は……？」

「本当にごめん。また今度、ちゃんと埋め合わせはするから。それじゃ」

「あっ、ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　龍二！！」

美穂が止めるのも聞かず、僕は彼女を追って、教室を飛び出した。

◆◆◆

「キミ、この学園の生徒だったんだね。全然気付かなかったよ」

「……」

「なぁ、あの騎士の姿は一体何なんだ？　僕の変身した姿とはちょっと違うみたいだったけど」

「……」

「……あのラクガキ空間とか、怪物とかは何？」

「……」

ガン無視かよ。

さっきから何度も話しかけているのだが、彼女はまるで答えてくれない。

つかつかと、廊下を歩いていくだけだ。

廊下を過ぎ、下駄箱で靴を履き替え、誰もいない校舎裏まで来たところで、彼女はキッと僕を睨み付けた。

「カードデッキはどこだ？」

「……昨日からそればっかだねキミ」

まぁ予想はしてたことだけどさ。

「あのデッキがあれば、昨日のラクガキ空間に入れるんだろ？」
「……」
話す気はないらしい。僕は一方的に質問を続ける。
「それと、『契約』ってなんのことだ？」
「っ、誰からそのことを聞いた！？」
彼女の目の色が変わった。少し引きながら、僕はありのままを話す。
「あ、あの龍を見た時、なんか、イメージが浮かんで……」
「……死にたくなければ、あの龍には関わるな。食われるぞ」
「？　何でだよ。キミだってあの蝙蝠を連れてるじゃないか」
頭が痛いと言わんばかりに、彼女は溜息をつく。
むっ、そこまで呆れられるようなこと聞いたか？
「……とにかく、デッキをよこせ。お前には関係の無いことだ。早

く忘れるんだな」

「関係ないって……そんなこと言ってる場合かよ」

もう被害は出ている。今この時にも、被害者が増えてるかもしれないんだ。
誰も知らないうちに人が消えるなんて、許せないじゃないか。

「人が消えるのを黙ってみてるなんて、そんなこと出来るわけないだろ」

「……安い正義感だな。身の程を弁えずに行動するバカは早死にするぞ」

「生憎と、行動力だけが取り柄なんでね」

お互い、一歩も譲らずに睨み合う。
……まただ、この感じ。夢でこの子を見た時と同じ既視感。
こんなぶつかり合いを、今まで幾度となく繰り返してきたような……。

「――もういいでしょう。蓮花」

と、緊迫した空気を破る涼やかな声。
その主は、蓮花と呼ばれた彼女の隣に立つ、もう一人の女の子。マ

ミちゃんと同じ見滝原の制服を着て……。

……あれ？

（い、いつの間に前に来てたんだこの子！？）

僕はずっと前を向いていたはず。
なのに乱入してきた女の子は、まるで瞬間移動でもしたかのように、いきなり僕の視界に現れたのだ。

「ここまできたら、むしろ話した方がいいと思うわ」

「……正気かほむら。話せば、このバカは余計に関わってくるぞ」

「ええ、そうでしょうね」

ここで初めて、乱入してきた女の子は僕の方を見た。

「頼んでもいないのに他人を助けようとして、その為なら自分の命も簡単に放り出す……そんな愚か者の目をしているわ」

冷ややかな口調だった。幼さの残る顔立ちからは考えられない、力強さを醸し出している。

「けど、このまま何も教えずに付きまとわれる方が面倒じゃないかしら？
なら、現実を教えてあげればいい。それでも尚関わってくるのなら、あとは彼の責任だわ」

「……鹿目まどかとはずいぶん対応が違うな」

「ええ。私にとってあなたのお友達はどうでもいいもの。そうした方が合理的だというだけ。
あなたがあくまで黙秘を望むのなら、強制はしないけど」

しばらくの沈黙。
彼女――蓮花は「チッ」と舌打ちして、校舎の壁へと身体を預けている。
これは……教えてくれるということだろうか。

遠慮がちに、僕は問いかけた。

「……キミ達は一体、何者なんだ？」

「私は暁美ほむら。そして彼女は秋山蓮花。仮面ライダーナイトよ」

「……仮面、ライダー？」

少女――ほむらは語り出す。
この世界の裏側に巣くう、真実を。

お前には何もできない．２（後書き）

・霧島美穂登場。なんで出したかは……わかりますよね？

・蓮花と蓮のイメージの違いに戸惑う方が多いみたいなのですが……やっぱ挿し絵とか書くべきなんでしょうか。意見求ム。

次回はほむほむ先生の『結界とミラーワールドの定義について』。

どうでもいい近況

最近の作者の個人的にびっくりなニュース。

・ひみつの嵐ちゃんにミッキー登場

・傷物語劇場アニメ化

・大学サークルのリーダー就任したこと

・這い寄れニャル子さん&マテリアルゴースト漫画化

・劇場版ゴーカイジャーにリュウレンジャー出演

お前には何もできない．3

「まず、あなたの持っていたカードデッキ。それは私の落とし物なの」

「えっ、そうなの？」

「ええ。ある人物から貰ったものだったのだけれど、いつの間にか無くなっていてね」

「でもこれ、連続失踪事件の被害者の部屋で見つけたんだけど」

「そう。どこかで落として、その被害者が拾ったのかしら……いずれにせよ、その人は不運だったわね。あなたと同じように“見えて”しまって、ヤツらに目を付けられたんでしょう」

「ヤツらって……」

「あなたも見たでしょう？　あの赤い龍や大蜘蛛――鏡の向こうに巣くう怪物、ミラーモンスターよ」

あの時感じた恐怖心がフラッシュバックした。
彼女――ほむらちゃんは淡々と説明を続ける。

「カードデッキが持つ力は主に二つ。
一つは、あなたがやったように、異界に潜む存在を知覚する力。

そしてもう一つは、鏡の回廊を渡り、ミラーモンスターと戦う騎士――『仮面ライダー』に変身する力よ」

ちらりとほむらちゃんは、仮面ライダーナイト――蓮花をチラ見する。
当の彼女はというと、こちらには一瞥もくれず、壁に寄りかかって沈黙を守っていた。

「ミラーモンスターは本能的に人間を補食し、その生命エネルギーを奪う。
それらモンスターを倒す存在、それが仮面ライダー」

「仮面ライダー……じゃあキミ――ほむらちゃんも、仮面ライダーなのか？」

「いいえ。私が狩るべき対象はミラーモンスターじゃない」

ほむらちゃんは首を横に振る。
おかしな言い回しだった。まるで、他にも戦うべき相手がいるみたいに。

「私は願いの成就と引き換えに、異能の力を得た『魔法少女』。私

が狩る相手は、結界の先に潜む『魔女』とその『使い魔』よ」

「……」

ぽかーん。

「えっと待って。魔法って、マージマジ・マジーロみたいな呪文を唱えるヤツだよね？
それで魔女は、アットホームな幹部を率いて世界を石コロに変えようとするヤツだよね？」

「その知識には偏りがあるけど、概ね正しいわね」

魔法は説明不能の奇跡を起こすもので、魔女は絶望を撒き散らすものだから。とほむらちゃん。元ネタがわかったかどうかは疑問だけど。

「……鏡の化け物からずいぶん話が飛んだね」

「否定するのは自由よ。ただその場合、あなたが直面した危機を否定する方が先だと思うけれどね」

……それを言われると痛い。

この目で見た手前、今さらあの大蜘蛛や龍を夢だと切り捨てる気はない。

『魔法少女』とやらについては信じるに足るものが無いが……、

（あの鏡の世界の出来事は、いろいろと衝撃的過ぎたからなぁ……）

僕の価値観も狂ったもんだ。

あんな化け物や騎士がいるんだから、魔法少女や魔女とか、アニメみたいな存在がいても不思議じゃない――なんてさ。

「……まぁとりあえず、信じる方向で行かせてもらうよ。

それで、その魔女だの使い魔ってのはなんなんだ？　ミラーモンスターとは違うのか？」

「それについてはまず、二つの擬似空間について説明しなければならないわね」

ほむらちゃんはしゃがみ、地面に二つの円を描く。

「魔女とミラーモンスターは人を襲う。ここはどちらも同じ。違うのは、テリトリーとする空間」

「テリトリー？」

ほむらちゃんはまず、一つ目の円を指差す。

「ここがミラーワールド。ミラーモンスターが住む鏡の向こうの世界。
ただしこの世界は、ある人物によって封印されていてね。ミラーモンスターはここから出ることができず、人間に干渉することもできない」

「えっ？　　でも僕、実際に襲われたけど」

あの大蜘蛛は確かに、鏡の向こうから腕を出していた。
僕の疑問に答えるように、ほむらちゃんはもう一つの円を指差す。

「そこで登場するのが魔女のテリトリーである『結界』。
魔女は常にここに身を潜め、私達の世界に干渉する。
ターゲットとする人間の周囲を、結界の中に取り込むという形でね。
あなたと蓮花が入ったのも、この『結界』よ」

「……ほむら。いちいち意味ありげに私を見るのは止めろ」

蓮花は不機嫌な立ち振る舞いを崩そうとしなかった。
なんだかなぁ……やっぱりコイツ、気に食わない。

「そして、結界もミラーワールドも同じ異空間。
魔女が結界を作るとミラーワールドがその力に呼応して、二つの異空間に道が繋がる。
その際に結界とミラーワールドは融合し、互いの特性を合わせ持つ『新たな異空間』が誕生するの」

ほむらちゃんが二つの円をラインで結び、それらを更に大きな円で囲っていく。

「ミラーモンスターは繋がった道を使って結界に侵入する。
魔女の獲物を横取りしたり、新しい獲物を結界の外から引き込んだりして、最後に結界が解除されると、ミラーワールドへと帰っていくというわけ」

「……スミマセン。もうちょっとわかりやすい説明をプリーズ」

「……」

デキの悪い息子を見るような目をされた。中学生に。

「要するに」

?:魔女が現実世界に結界を貼る

?:ミラーワールドと結界が繋がり、連鎖的にミラーワールドも現実世界と繋がる。

?:ミラーワールドに住むモンスターもまた、現実世界の存在である人間に干渉可能になる。

?:結界が消えると、ミラーワールドは現実世界と繋がれなくなり、モンスターもミラーワールドに帰っていく。

「――わかったかしら」

「おお、わかりやすい」

疲れたように溜め息をつくほむらちゃん。
いやだから、その呆れたような目をやめて。地味に傷つくから。

「……現実世界の存在である私達は、基本的に結界には入れないし、知覚することもできない」

疲弊したほむらちゃんに気を遣ったのか、蓮花が説明を代わる。

「例外は五つだ。
一つ、魔女のターゲットにされた人間。
二つ、ミラーモンスターに引き込まれた人間。
三つ、結界が展開される際、偶然巻き込まれた人間。
まぁ、結界を貼った魔女を倒さない限り、入ることはできても、出ることはできないがな。
そして四つ目と五つ目。唯一自由に出入り可能なのが……」

「仮面ライダーと、魔法少女ってわけか……」

蓮花は頷いた。

「……凄いんだな」

ポケットからカードデッキを取り出す。
まさか、こんな何の変哲もないカードデッキが、そんな凄い力を秘めていたなんて。

「さぁ、粗方の説明はしたぞ。おとなしくカードデッキを渡すか？
それともまだ、安っぽい正義感をひけらかすつもりか？」

「安っぽいって……そんなこと」

「ないと言い切れないだろう？
いいか？　これは大した力も無いヤツが、中途半端に関われる問題じゃない。
あの大蜘蛛はモンスターの中では中堅クラス、あれに手間取るようじゃ戦力外だ。
もっと現実を見ろ。……お前には何もできない」

お前には何もできない。

蓮花の言葉が僕に突き刺さった。
中途半端に本当の事件に関われば、危険に晒されることもある……か。そういや昨日、マミちゃんにも言われたっけな。

鏡の向こうに消えていく人々。
理不尽に訪れる死を止めたいという気持ちに変わりはない。
けど、具体的にどうすればいい？

さっきの戦いで十分わかる。僕のデッキでは、あのモンスター達に対抗できない。
無駄に命を散らせる結果に終わるだけ……。

（……あれ？　そう言えば……）

蓮花――仮面ライダーナイトが連れ歩いていたあのコウモリ。
あれもミラーモンスターのはずだ。
なぜ、あのモンスターは彼女に付き従っているのか。

あのコウモリを連れたナイトの力。あれは自分の変身した仮面ライダーとはケタ違いだった。
なら、僕もミラーモンスターを従えることができれば、あるいは……けど、どうやって？

（……そうだ、モンスターとの『契約』）

あの龍を見た時に浮かんだイメージが、ここにきて繋がった。
この単語を出した時の蓮花の動揺……きっとこれが、何かのカギになる。

「なぁ。モンスターとの契約って……」

――キィィィィンッ！！

『！！』

その場にいた全員が虚空を睨む。
昨日で完全に聞き慣れてしまったミラーノイズだ。

「蓮花、魔女よ」

「ああ、この感じからしてそう遠くはないな。インキュベーターの邪魔が入る前に――おい！？」

蓮花の静止を振り切り、僕は駆け出していた。
……残念だけど、何も出来ないのかどうかはキミが決めることじゃない。

僕が決めることだ。

お前には何もできない．３（後書き）

説明に少し補足。

・結界はミラーワールドではないので、基本的に時間制限はなし。

・仮面ライダーは入った鏡じゃなくても出られる。
→龍騎でも物語途中でかなり無視した設定ですし、ディケイドでも入った場所以外から出入りしてたので「別にいらない設定かな」と思い、制限は外しました。

次回、再びブランク体の戦いです。

お前には何もできない・４

ノイズが大きくなる方へなる方へと足を進めていくと、そこは９階建てほどの廃ビルだった。

ぱっと見おかしなところはない。……だがわかる。何となくだけどここに“何か”がいるのは知覚できる。

「よし……！」

ポケットから取り出したカードデッキを前方に構える。

掛け声とかは……まぁ適当に。

「変身！」

……。

……しーん。

「……変身！」

リトライ。しかし例の鎧はまったく装着されない。

「……変身！　変身？　へんしん！　ＨＥＮＳＨＩＮ！　気力転身！　ＫＡＭＥＮ．ＲＩＤＥＲ！」

発音や掛け声を変えてみるも、結果は同じだった。

「どうなってんだよ……」

あの時は確か、大蜘蛛に引き込まれたら勝手に変身してたけど……
まさかまた引き込まれないといけないのか？
イヤだよ。そんな他力本願な変身。

「……あっ、そうだ。鏡」

大蜘蛛に襲われて結界に入った時も、龍に追われて結界から出る時も、鏡が出入り口になった。
なら今度だって……。

廃ビルの窓ガラス、自分の姿が映り込んでいるのを確認し、デッキ

を構える。

すると、ガラスに映る僕の腰回りに、メカニカルなベルトが現れた。目線を下に下ろせば、現代にいる僕の腰にも、ベルトが装着されている。

間違いない。ナイトや僕が変身した姿が付けていたのと同じものだ。

「あの子は、確かこの溝にデッキを入れてたよな」

深呼吸をし、緊張を振り払う。

鏡に映る自分と目を合わせ、僕は右手を左斜め上に伸ばし、叫ぶ。

「変身！」

デッキを装填すると、ベルトの赤いランプが輝く。

鏡向こうの僕に、幾重もの虚像がオーバーラップし、僕の姿を黒い騎士に変えた。

「――っしゃあ！」

変身完了。
高揚する気持ちを抑え、僕は鏡の向こう側の世界――結界へと飛び込んでいった。

◆◆◆

「魔女の気配はここだな」

龍二の到着から数分遅れで、蓮花とほむらは廃ビルに辿り着いていた。
結界特有の違和感は、ここに立っているだけでも伝わってくる。

「急ぐぞ。あのバカが先走る前にな」

「！　待って」

デッキを取り出しかけた蓮花を、ほむらが止めた。
ビルの入り口袖に隠れ、建物内を指差す。

「あれを見て」

「あれは……」

二人が見る先には、三人分の人影があった。
昨日、別の結界内で出会った鹿目まどか、美樹さやか、そして魔法少女である巴マミ。

「二人とも、私から絶対に離れちゃダメよ」

「は、はいっ！」

「わかってますって！」

マミに先導されながら、まどかとさやかはマミによって破られた結界の入り口へと入っていく。

三人の後ろ姿を見ながら蓮花は「チッ！」と舌打ちして、

「なんて間の悪い時に……」

「急いだ方がよさそうね。“この展開”ならまどか達は大丈夫でしょうけど、あなたのお友達が無事に終わるかどうかは保障できないわ」

「ああ。だが、ここで鹿目まどか達と接触するのも面倒だ。別ルートから結界に入るぞ」

「ええ、行きましょう」

◆◆◆

「……変身はできてもバイクはない、と」

鏡から弾き出され、僕は再び床に転がるハメになった。
あのカプセル型バイクは、何か条件を整えないと使えないようだ。

（まぁ、何はともあれ）

起き上がり、周囲に視線を泳がせる。……前は大蜘蛛に追われて気にする暇もなかったけど、見れば見るほど悪趣味な作りだよな。この『結界』とかいうヤツは。

カラフルな配色の風景に、物理法則もへったくれもないグニャグニャの回廊。
そのくせちゃんと元のビルの内装も踏襲してるもんだから、余計に不気味さに拍車がかかるってもんだ。

「あの大蜘蛛……ってか、ミラーモンスターはいないみたいだけど……」

しかしミラーモンスターがいないなら、あのノイズが聞こえないわけがない。
ならば、発生源は別の何か。そう、それこそほむらちゃんの言っていた――

「〆●∇∂！！」

「わっ！？」

未だかつてない奇声に、僕は肩を跳ね上げる。
気が付くと物陰から、景色以上に不気味な生物が現れた。

「うげ、なんだこいつら」

ドロドロした身体に、アゲハチョウの翼が引っ付いた生き物。
ミラーモンスターがメカニカルだった分、これは変に生々しくて気持ち悪い。
タグを付けるなら『なにこれこわい』だ。

「……そうか、これが使い魔ってヤツか」

明らかにミラーモンスターとビジュアルの方向性が違う。
ほむらちゃんの話は本当だったわけだ。

（まぁそれでも、ミラーモンスターと不気味さはどっこいどっこいなわけで……）

無言で半歩下がる。
だってこれ確実に襲ってくる雰囲気だし。
僕はデッキからカードを一枚引き抜き、左手のバイザーに装填する。

【ＳＷＯＲＤ．ＶＥＮＴ】

前回まるで役に立たなかった剣が、天より地面に突き刺さった。

（この使い魔はあの蜘蛛よりは脆そうだし　……まぁ、無いよりはマシだよな）

剣を引き抜き構える。かなり長い得物ではあるが、僕はそれを片手で握った。

何故かはわからないが、片手の方が戦い易い気がしたからだ。

「さぁ来い。化け物」

「◇∇Φ●ーー！！」

僕の挑発を皮切りに、使い魔達は一斉に襲いかかってきた。
裂けた口を目一杯開いて、僕を喰おうとしてくる。

「はっ！」

四方八方からの突進を僕はしゃがむことで回避し、そのまま上段へと剣を振るった。

――ザンッ！

刃から柄越しに伝わる、何かを切断した感覚。
二つのパーツに別れた使い魔が何体か、霞となって消失した。剣は――大丈夫だ。折れてない。
いや、それよりも。

「――なんだ？　この感じ」

剣で使い魔達を片付けながら、僕は自分の中の奇妙な違和感に気がついた。

（――わかる。戦い方が）

昨日はビビって震えてたけど、それを差し引いても、身体の反応速度がケタ違いだった。

（何でだ？　どこからの攻撃に注意すべきか、剣を振るう時どうすれば一番力が入るのか、全部わかる）

まるで、ずっとこんな戦いを続けてきたみたいに。

「……いや、考えるのは後だ！」

接近してきた使い魔をまた一体切り捨てる。

戦えるのはありがたいけど、それでも集中力を欠けば、確実にバクバクッと食われてしまう相手。

油断は禁物だ。

「よっしゃ、取りあえず奥の方に行ってみるか！」

追ってくる使い魔の相手をし、時に隠れたり引き返したりしながら、僕は結界を道なりに進んでいった。

奥へ奥へ、結界に最深部というのがあるのかはわからないが、とにかく走り続けた結果、それらしい場所に出ることができた。

「……うわぁ」

正直、想定していた“それ”のイメージとはまるで違った。
固体なのか液体なのか判定しかねる巨体に、使い魔のそれとは段違いに広いアゲハチョウの翼。
蔓のような足と、食虫植物を思わせる頭部には、薔薇がまばらに咲いている。
周囲の景色も自己主張のつもりか、所々に不気味な薔薇が植えられていた。

「……命名するなら『薔薇園の魔女』ってとこですか？」

ってか何処が魔女だよ。
もっと普通なの想像してたよ。
それこそバンドーラ様みたいなの想像してたよ。
もうこれもミラーモンスターでいいだろうに。
僕がどうでもいい感想を浮かべていると、

――ぎょろり。

薔薇園の魔女が無い目でこちらを睨んできた。
僕は無言で剣を向ける。

「――やぁ怪物」

それからの動作は一瞬だった。
剣の間合いを詰めるべく、僕は一気に薔薇園の魔女まで駆ける。

「だぁっ！」

横薙ぎでは折れる心配があったため、剣にダメージの来にくい刺突攻撃。
しかし魔女は蔓の足で跳ね、僕の攻撃を回避。
空中に躍り出た巨体からもう一本、鞭のようにしなる足が、僕に向

けて繰り出された。

「ちっ！」

カードを一枚引き抜き、すぐさま手甲に装填する。

【ＧＵＡＲＤ・ＶＥＮＴ】

天から現れた長方形の盾を腕に装備し、蔓の足の延長上に置く。
これでなんとかいけるか？

――ガンッ！！

「ぐあっ！？」

結論から言うと、一応防げはした。
しかし、その引き換えに盾は粉々に砕け、ダメージはなくとも踏ん張りがきかなかった僕は、そのまま後方に吹っ飛ばされた。

「くそっ、剣も落としちまったぞ……」

遠くに突き刺さったままの剣を拾いに、僕が立ち上がろうとした時だった。

「◎◆§Ψ！！」

「なっ！？」

いつの間にか足や身体に、大量の使い魔がまとわりついている。
それらは瞬時に一本の紐となって僕を縛り、上空へと振り上げた。

「うおっ！？」

しまった。空中で全然身動きが取れない。
しかもあの触手の先は、いつの間にか薔薇園の魔女に続いている。
主たる魔女のこと、下級の使い魔は自由に操れるということか。

（やっばい……！！）

目の前には、薔薇園の魔女が大口を開けている。
片や僕は、触手に吊されて宙ぶらりん。

盾は砕けて剣は遥かかなた。

（あ。マジ終わった）

死に際に立っているという割に、思考は冷静だった。
迫る脅威を前に、僕は仮面の下で目を瞑った。

◆◆◆

――ダァンッ！

乾いた銃声。
魔女の悲鳴と共に触手が千切れ、僕はそのまま地面に自然落下した。

「っ、痛って～～！！」

あの高さからの落下はさすがにツラかった。
ピンチも忘れて痛みに歯を食いしばる。

「危なかったわね」

涼やかな声に、僕は凍り付いた。
いや、別に威圧的な口調だったとかそういうことじゃない。

「あなた新人さん？　秋山蓮花と似た姿だけど」

「……あ」

ちょっと小馬鹿にするように、彼女は笑う。硝煙を上げるマスケット銃を担ぐ姿は、悠然としていて頼もしい。

白いブラウスの上にコルセット。
ベレー帽の羽根飾りには、黄色に輝く宝石。
前とは完全に趣を異にする姿。

けど、間違いない。見間違えるものか。

「まぁいいわ。とにかく下がっててて。今日はちょっと派手になりそうだからね！」

僕の幼なじみ――巴マミちゃんは不敵に、マスケット銃を薔薇園の魔女に向けた。

お前には何もできない・４（後書き）

龍二「（まぁそれでも、ミラーモンスターと不気味さはどっこいどっこいなわけで……）」

神崎「／ガタッ／」

兄は妹のセンスをバカにされたくないようです（笑）

・誤解しないように補足。ブランク体は仮面ライダージョーカークラスのスペックはあります！　ただ武器が脆いだけなんです！（力説）

ブランク体のガードベントは設定だけ存在してるので使わせて貰いました。

いよいよ出会った魔法少女版のマミと龍二。

次回をお楽しみに。

・どうでもいい近況

這い寄れニャル子さん7巻でフツーにまどマギネタがあって吹いきましたｗｗ

真尋がさやかと声優同じだからといって、すぐさまネタにする万太先生マジＧＪ。

相変わらずのの仮面そしてライダーネタも素晴らしい。
シュラウドネタから橘さんネタまで……。

お前には何もできない．5

城戸龍二くんがどんな人かと聞かれれば、私は迷わず『優しい人』と答える。

小さい頃の私――つまりは『魔法少女』になる前の私は引っ込み思案で、幼なじみの城戸くんが「遊ぼう」と誘ってくれれば、　それに連れられる形で遊んでいた。

お父さんもお母さんもそれに反対はしなかったけど、今にしてみれば、若干の不安はあったのかも知れない。
当時の城戸くんは近所でも評判のやんちゃ者で、なにかとトラブルを呼び寄せる天才だったからだ（ちなみに本人の自覚はナシ）。

具体例。

同級生をいじめていた中学生グループに向かっていく（しかも勝った。全治2か月と引き換えに）。
冬の寒空の下、一晩中捨て犬の世話をしていた（凍死寸前）。
その他、警察が少しばかり絡むレベルの事象……と、数え上げればキリがない。

そして何か面倒を起こすたびに、城戸くんは大人から怒鳴られ、「後先考えないバカ」というレッテルを貼られ続ける。

その繰り返し。

――でも、私は城戸くんとの付き合いを止める気はなかった。
むしろ「なんでみんな、城戸くんを怒ってるの？」と、不思議がっていたくらいだ。

だって、同級生の子も、捨て犬も助かってるのに。他のことだって全部、誰かを助けようとしてやったことなのに。
城戸くんはぜんぜん間違ったことしてないのに。

だから私は、城戸くんが大好きだった。
周りにどれだけバカにされてても、私にとって彼は、誰よりも優しくて、誰よりもカッコいい自慢の友達だった。

……そしてそれは、今でも同じ。

久しぶりに会った城戸くんは、なにも変わってなかった。
本人は、私の変わり具合を驚いていたけど、私からすれば、城戸くんの変わらなさの方が異常だ。

あの頃と変わらずに、優しいままの城戸くん。

だから……気が緩んじゃったのかな。「本当に助けてくれる？」なんて。

助けてくれるわけないのになぁ……。

私は『魔法少女』で、城戸くんは普通の人間。

これだけは、何年経ってもずっと変わらない事実。

――そう、絶対に変わらないことなら、何も気にする必要はない。

どうせひとしきり泣けば、すぐ気にならなくなることなんだから。

◆◆◆

マミが指を一鳴らしすると、龍二が変身したブランク体の身体に黄色い紐が巻き付いた。

「うわっ！」

紐がしなり、ブランク体は上層部へと放り投げられた。
痛みに耐えながら首をもたげると、そこにはそれぞれピンク色と蒼色の髪を持つ二人の少女が立っていた。

「鹿目さん、美樹さん！　そこの彼よろしく！」

「ええっ？　マ、マミさん！？　この人何なんですか！？」

蒼い髪の少女――美樹さやかが、ブランク体の容姿に驚きながら聞く。

「あとで説明するから、結界の中に入れてあげて！　戦闘不能みたいだから害はないわ！」

「は、はい！　まどか、手伝って！」

「う、うん……。キュゥべえ、ちょっと降りててくれる？」

「りょーかい」と、まどかの手から、キュゥべえと呼ばれた白い生き物が飛び降り、空いた手でまどかとさやかは、ブランク体を引きずっていく。
そのままマミが貼った対魔女用の防御陣――虹色の光の中にブランク体を横たわらせた。

「痛ッ……あ、ありがとう」
「ど、どういたしまして？」
切れ切れの息で礼を言うブランク体。
さやかは会釈したが、まどかは対応に困っているらしく黙ったままだ。
さやかがキュゥべえに問う。
「キュゥべえ、この人は誰？　魔法少女なの？」
「ああ、二人は見るのは初めてだったね」
「……なんだ、このウサギみたいなヤツ？」
痛みに苛まれる身体で、ブランク体が自由に動かせる口だけだった。
「ふむ。キミはどうやら、まだ『仮面ライダー』に成りたてみたいだね。
とりあえず、初めましてかな？
僕はキュゥべえ。こっちは鹿目まどかに、美樹さやか。
で、あっちで戦ってるのが巴マミだよ」

やっぱり。
マミの名前が出たことで、ブランク体は自分の見間違いでなかったことを確認した。

「まぁ、細かい説明は後回しだ。それより、まどかとさやかはマミの戦いを見ていた方がいいんじゃないのかい？」

キュゥべえに促され、二人は階下で繰り広げられている戦いに視線を移す。
ブランク体もまた、痛む身体を叱咤し、緩慢な動きで首を下にもたげた。

◆◆◆

「ふぅ……」

精神統一の一環か、マミは深く深呼吸し、スカートの両端を僅かにつまみ上げる。
と、いつの間にかその裾下に、二丁のマスケット銃が出現した。

――ダァンッ！！

決して軽くない、少なくとも女子が片手で持てる代物ではないそれを、マミはまるで玩具を扱うかのような気軽さで握り、撃つ。

「〆◎∫◆！！」

薔薇園の魔女も負けてはいない。
ブランク体に見せた跳躍力を用い、マミの射撃をかわしていく。

「速いわね」

短く舌打ちし、マミはベレー帽を脱ぐと、それを自分の正面で、何かを払うように動かす。
先程と同じように、ベレー帽の中から大量のマスケット銃が現れ、マミを囲うように地面に突き刺さった。

「これならどう！？」

マスケット銃を撃ち、弾が尽きるとまた新しいマスケット銃を手に取り、それを繰り返す。
彼女の手際良い武器交換による射撃は、連射式の銃器と比較してもなんら遜色はない。

大量の予備銃器によるリロード時間短縮。これがマミのスタイルのようだ。

それでも尚、薔薇園の魔女は弾丸を回避し続ける。
結界内にはずれ弾の穴だけが空いていく中、マミは新しいマスケット銃を取ろうとするが――

「あっ！？」

マミが気付くがもう遅い。
ブランク体の時と同じく、大量の使い魔達がマミに集ってきていた。

それらは即座に一本の蔓へと変わり、マミを空中へと吊し上げる。
マミはマスケット銃の連射を続けるが、薔薇園の魔女には当たらず、しなる蔓によって壁に叩きつけられてしまった。

「くっ！！」

逆さ吊りになったマミから、壁の破片がパラパラと落ちる。
薔薇園の魔女は、捕らえた獲物を食らうべく、再び口を開いた。

「マミさん！！」

まどかが悲鳴にも近い叫びを挙げる。
片や、マミはこの逆境の中にありながら、まどかに笑いかけた。

「大丈夫。――未来の後輩に、あまりカッコ悪いとこ見せられないものね！」

変化はすぐに現れた。
はずれ弾が地面に空けた風穴から、繊維のように細い黄色の糸が伸び、薔薇園の魔女を捕縛したのである。

「ψ£∫◎！？」

「惜しかったわね」

マミが首元のリボンを外すと、そのリボンは刃のような形状に代わり、蔓を切断。
拘束を解かれたマミの手の中で、リボンは螺旋状に伸び、巨大なマスケット銃――いや、もはやキャノン砲と呼んでもいい銃器に変化した。

照準を合わせ、マミはそれが魔女への手向けであるかのようにウインクし、

「ティロ・フィナーレ！！」

撃鉄が降り、黄色い閃光が薔薇園の魔女を貫く。
薔薇園の魔女は断末魔を挙げ、無数の蝶となって散っていった。

その中にあって、マミは持ち歩いていたのか、自分のティーカップを口に運び、まどか達に微笑む。

「か、勝ったの……？」

「すごい……」

「……」

さやか、まどか、ブランク体が三者三様の反応を返す。
と、魔女が消えたことで結界も閉じ、周囲に日常の景色が戻ってきた。

変身を解除したマミは、薔薇園の魔女が鎮座していた場所で何かを拾い上げると、まどか達の元に戻ってくる。

「二人とも、大丈夫だった？」

「は、はい……大丈夫、です」

「ど、どうってことないっすよ！！」

やや表情が強張っていたが、まどかとさやかのそれは、恐怖ではなく興奮からくるものだろう。
常識を逸脱した光景は、時に恐怖心を超えた感動へと変わる。

「……さて、あなたも特に酷い怪我はしてないみたいね」

「あ……」

まだショックから立ち直れていないのか、ブランク体は呻くだけだ。
答えるべきかどうか迷う暇すらなく――ブランク体の変身が解けた。

鎧がガラスの破片のように砕け散り、マミ達の見る前で、ブランク体は龍二の姿に戻る。
同時に、変身が和らげていた痛みが回帰してきた。

「うっ……！！」

身体中を襲う激痛に苛まれる龍二。
片や、変身解除に驚くまどか達だったが、とりわけ驚愕したのはマミだ。

「……なん、で……！？」

マミの目は限界まで見開かれ、両手は激しく震えていた。

ありえない。
目の前にいるのは、ここにいてはならないハズの人。

しかし、一連の事実は否定することを許さなかった。

「どうして、城戸くんがここにいるのよ……！？」

マミの言葉に答えるより早く、龍二の意識は闇に沈んでいった。

◆◆◆

「あの様子だと、巴マミと知り合いのようね」

「……」

物陰に立つ蓮花とほむら。ほむらは普段通りの無表情、蓮花は心なしか苛々しているようだった。

「城戸龍二は『運命改変』に巻き込まれないハズだったけど……何かの手違いかしらね」

「……どういうことだ、神崎」

蓮花は建物のガラスを睨んだ。
鏡にしか映らないその男は、ボロボロのコートを纏い、覇気の欠落した胡乱げな顔立ちをしている。

「お前はあいつを、龍二を巻き込む気はないんじゃなかったのか」

「ああ、そのつもりだった」

「なら何故、巴マミと龍二が知り合っている！？」

男――神崎士郎は頭が痛いと言わんばかりに溜め息をついた。

「オーディンも、タイムベントによる運命改変を完全に操れるわけではない。
1から10全てを意のままに出来るなら、俺はとっくに優衣の運命を変えていた」

「つまり、城戸龍二と巴マミが出会ったのは、確率の低い偶然というわけ？」

「そうなるな。……どこまでも俺の予想を裏切ってくれる」

皮肉っぽく、神崎はマミ達の傍で気絶した城戸を見る。

「もはや、避けられない運命なのか……？　あいつが、仮面ライダーになることは」

神崎の呟く鏡の奥、そこには赤き龍――ドラグレッダーが、外の世界を睨み付けていた。
何かを、待ち続けているかのように。

◆◆◆

――次回、仮面ライダー龍騎☆マギカ。

「モンスターと契約を結べば、お前は後戻りできなくなる。最後まで戦い続けるしかない」

「僕さ。元々、なんでも首を突っ込まないと気が済まないんだ」

――「あの龍と契約しろ」。

願いを胸に戦え。未来を描く為に。

お前には何もできない．５（後書き）

ティロ・フィナーレは、一人で寂しいマミさんが暇つぶしに考えた名称だと思う今日この頃。
マミさん……翔太郎と気が合いそうだ。彼も一瞬でファングストライザーとか考えるヤツですし（笑）

必殺技名自体はカッコいいのに、どうしてこうもネタっぽいオーラが漂うのか……。

次回の第３話の中でやっと契約します。お楽しみに！

追記
まどマギ最終回良かったですね……！
まだ見てない人のためにネタバレは控えますが、あれは最後まで希望を捨てなかったまどかだからこそ、選び取れたＥＤだと思います。

みんながみんな救われたわけではないかも知れないけれど、それでもあの結末は幸せなＥＤでした。
……関係ないですが、最後のほむほむとＱＢのやり取りが異様に可愛らしかったのは作者だけでしょうか？
久しぶりに大ハマりしたアニメ、魔法少女まどか☆マギカ。フォーエバー。

あの龍と契約しろ．1

以下、寝言。

「……やめろウナギ大尉……抑制装置無しでライオン完全態に乗るのは無謀だ……早まるんじゃない。攻強皇國機甲の誇りなどいい……生き恥を晒そうが、今は生き延びるんだ……やめろ……よせ……」

内容がまるで予想できない夢に魘され、龍二は飛び起きた。

「死ぬなウナギ大尉――！！」

ゴンッ！！

『痛ぁっ！？』

二人分の悲鳴。

ベッドから跳ね上がった龍二の頭が、偶然彼の顔を覗き込んでいたまどかの頭とぶつかったのだ。

「うう……」

「痛てて……あ、ごめん、大丈夫？」

「は、はい。気にしないでください……」

まどかは涙目のまま必死に笑う。

「あなたこそ、どこか痛いところはないですか？」

「うん、頭以外は大丈夫。それで、ここどこ？」

ベッド……は、自分のものじゃない。どこかファンシーな雰囲気を醸し出す部屋のレイアウトにも、まるで見覚えがなかった。

「あ、マミさんの家ですよ。マミさんが言うには怪我も大したことなかったし、病院よりもこっちの方が近いからって」

「……マミさん？」

「？　マミさんと知り合いなんじゃないんですか？」

小首を傾げるまどか。

寝ぼけていた龍二は、マミの名を聞き、ようやく意識が覚醒し始める。

（そうだ。さっき僕、仮面ライダーに変身して、魔女にやられそうになって）

――マミちゃんに助けられて。

「……えっと、キミは」

「あ、私、鹿目まどかっていいます。その、はじめまして」

やや固さが伺えたが、まどかは礼儀正しく挨拶する。
彼女の緊張を解そうと、龍二は柔らかな笑みを浮かべた。

「ああ、よろしく。僕は城戸龍二だ。……挨拶ついでで悪いんだけど、マミちゃんは今ここにいる？」

「えっと、さやかちゃんとキュゥべえと一緒に魔女を探しに行ってます。さっきの魔女以外にも、近くで魔女の気配がしたらしくって――」

まどかがそこまで言いかけて、狙い澄ましたかのように、部屋の奥の鉄扉が開いた。

「まどか〜、ただいま〜」

「お帰りさやかちゃん。どうだった？」

さやかと呼ばれた蒼髪の女の子が、間延びした声と共に部屋に入ってきた。
肩には、先ほど結界の中でも出会った白い不思議生物――キュゥべえが乗っている。

「ぜーんぜんダメ。結構探し回ったけど、魔女のまの字も見つかんなかったわ」

「僕達への警戒の速さから察するに、なかなか強力な魔女みたいだね。――おや、そっちの彼はお目覚めかい？」

いっそ清々しいまでの気軽さで、キュゥべえが黒い眼を龍二に向ける。
ぬいぐるみのように簡素な目は、可愛らしさというよりはむしろ空虚さを醸し出していた。

「お、気が付いたんですね。怪我とか大丈夫ですか？」

「ああ、お陰様でね。ありがとう」

「いや、あたしは礼言われるようなことは何も。まぁなんにせよ、無事で良かった！」

まどかとは対照的に、活動的な印象を受けるさやかだが、その見た目を裏切らない気さくさだった。
何というか『世の中って素敵だな』とか素で考えてそうな。

「マミさんもほら、入り口んとこで突っ立ってないで！　彼氏さん起きましたよ！」

心臓が早鐘のように脈打つ。
ベッドに座ったまま、僕は再び入り口に目をやった。

やがて「……彼氏じゃないわよ」とぼやきつつ、重々しい足取りでマミちゃんが部屋に入ってきた。服装は見滝原の制服に戻っていたが、纏う雰囲気は普段と完全に別モノだった。

『……』

いやな沈黙が両者の間に漂う。

聞きたいことがありすぎて、何から聞けばいいのかわからない。腹の探り合いという、友人関係にある二人には似つかわしくない状況だった。

「……説明、してくれるかな」

「ええ。それはお互いにだろうけどね」

二人の口元に、笑みはもうなかった。

◆◆◆

「――とまぁ、僕が結界にいたのはそういうわけさ」

「成る程。つまり城戸くんが仮面ライダーになったのは、ただの偶然ってことね」

テーブルを挟んで、僕とマミちゃんは向かい合っていた。剣呑な雰囲気に押されながら、僕は粗方の事情を話し終えた。

「仮面ライダー……魔法少女以外にも、魔女と戦う人がいたんだ……」

「ねえキュゥべえ。前に転校生と一緒にいたヤツも、その仮面ライ

ダーってヤツなんだよね」
「そうだよ。何のためにあの二人が組んでるのかは、わからないけどね」
まどかちゃんとさやかちゃんが、キュゥべえとかいう白い生物の補足説明を受ける傍ら、僕とマミちゃんの会話は続く。
「秋山蓮花と暁美ほむらに会ったのよね。城戸くん何かされなかった？」
「？　いや別に。それとなくバカにされたりしたけど、酷いことされたりはしてないよ」
「……そう。ならいいの」
ほっと胸をなで下ろすマミちゃん。
なんだ？　そりゃあの二人は人当たりが良いタイプじゃないが、そこまでヤバい性格じゃ無かったと思うんだけど。
「……さぁ。次はマミちゃんが話す番だよ。まさかこの期に及んで黙秘はないよね？」
「……」
図星だったのか、マミちゃんは目を伏せる。僕が畳み掛けようとす

ると、キュゥべえが被せるような形で口を開いた。

「マミ、話した方がいい。キミがここで口を閉ざしても、いずれ彼は暁美ほむら達から真実を聞くだろう。どうせ同じ結果なら、キミの口から説明してあげた方がいいんじゃないのかい？」

「……ええ、わかってるわ」

マミちゃんは苦虫を噛み潰したような表情をして、ポケットに手を突っ込んだ。

取り出されたのは、タマゴくらいの大きさの、黄色く綺麗な宝石。

見覚えがある。あの変なカッコをしたマミちゃんの帽子についてたヤツだ。

「これは？」

「ソウルジェム。キュゥべえに選ばれた女の子が『契約』によって生み出す宝石よ。私が戦いに使う魔法の源でもあるの」

「魔法……ってことはやっぱりマミちゃんは」

「ええ。私は魔法少女。魔女と戦う使命を課せられた存在なの」

予想はしていた。
ほむらちゃんの話と、マミちゃんの戦い振りを繋ぎ合わせれば、連想できないことじゃない。
当たって嬉しい予想ではないけれど。

「まどかちゃんとさやかちゃんも、魔法少女なのか？」

ふと気になって、二人に尋ねてみる。
魔女や魔法少女、そんな非現実的な世界に関わる以上、まどかちゃんもさやかちゃんも、同じ力を持っているのではと考えたからだ。

「あ。私とさやかちゃんは違うんです。まだ『願い事』も決まってないし」
「今はマミさんの手伝いと、魔女退治のイロハを教えて貰ってるとこなんですよ。魔法少女の卵ってとこですかねー」
「願い事？」
「『契約』する代わりに、僕が叶えてあげる望みのことだよ」

キュゥべえがしっぽを揺らした。

「魔法少女となった者は魔女と命懸けで戦う使命を背負う。しかしその代わりに、一つだけどんな願いでも僕が叶えてあげられるんだ」

「なんでも？」

「うん、なんでも。願いと引き換えに魔女と戦う使命を得る、これが『契約』さ」

そりゃまた……ハイリスクハイリターンのお手本みたいな契約だな。

「その魔法少女って誰でもなれるのか？」

「いいや。名前の通り、成長途中の女性であることはもちろんだけど、持って生まれた素質がなければ契約はできないんだ。基準としては、僕の姿が見えれば合格だね。僕は普通の人間には見えないから」

「へぇ……。……？」

あれ？　僕も見えるんだけどこれいかに。

「うーん、キミの場合はミラーモンスターや魔女に接触したからじ

ゃないかな？　　簡単に言えば目が慣れたんだろうね」

なんと曖昧な基準だろうか。世界のご都合主義を肌で感じる僕だった。

「――私が話せることはこれで全部よ。さぁ、城戸くんは早く元の生活に帰りなさい」

「えっ！？」

僕の驚きにも顔色一つ変えず、マミちゃんは言い放つ。
しかもさり気なく、彼女の手には僕のカードデッキが握られていた。

気絶してる間に盗られたのか。

「カードデッキはこっちで預からせて貰うわ。キュゥべえ、この『封印』のカードがあれば、城戸くんはモンスターに襲われないのよね？」

「うん。このカードからはそういう力を感じるね。魔女は僕らがどうにかするからいいとして、ミラーモンスターから彼を守るには十分だ」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！　僕は……」

慌てて会話の流れを断ち切ろうとする。
だが、そうしたところで気付いた。
僕は何を言う気だ？　「僕にも何かできるはずだから協力させて」とでも言うつもりか？

僕が口ごもった理由を察したのか、マミちゃんは淡々とした口調で言う。

「僕は……何？」

「……」

「魔法少女の契約もできない。変身しても秋山蓮花ほどの力は出せない。そんな人にできることは何もないわ」

マミちゃんの瞳は怖かった。まどかちゃんもさやかちゃんも、彼女の放つ威圧感に畏縮している。
僕もそれは同じだった。

マミちゃんの言葉は、僕という人間に対する明確な『拒絶』だったからだ。

「……私に協力しようとしてくれたことは嬉しいわ。けれど私が立つ場所は、戦う力も、戦う力を得る手段もない人が来るには酷過ぎる場所なの」

マミちゃんの声は、いやに遠く感じた。
目の前に彼女がいるのにも関わらず、見えない壁が僕らの会話を遮っているようだった。

「けど、マミちゃんは……」

「そんな心配そうな顔しないでよ」

マミちゃんは笑う。
見ているこっちがツラくなるような儚さで。

「大丈夫。今までずっと魔法少女として戦ってきたのよ？
城戸くんの助けがなくたって、私はちゃんと戦えるわ」

呆然と立ち尽くす僕に、マミちゃんは最後通牒のように言う。

「だから――帰って」

城戸くんはまだ、後戻りできるんだから。

◆◆◆

「……はぁ」

城戸、そしてまどか達が帰ったあと、マミはベッドに寝転がり、ぼんやりと天井を見つめていた。
キュゥべえは「見回りに行ってくる」と言い残し外に出ているため、今部屋にはマミ一人だ。

『鹿目さんも美樹さんも、戦いが怖く見えてきたなら、無理に私に付き合わなくてもいいのよ?』

城戸が帰った後、マミはまどかとさやかに言った。

『元々、私から誘ったことだもの。勿論、私は二人の意志を尊重していたつもりだったけれど……知らないうちに、契約を無理強いしてたのかも知れない』

『わ……私達はそんな風に思ったこと一度もないです！』

『そーですよ！　マミさんに着いてくって決めたのは、私達がそうしたいって思ったからです！　マミさんが気にすることなんか何もありません！』

二人がそう言ってくれたことが素直に嬉しかった。
もしあの場で二人に拒絶されていたら……きっと自分は折れていただろうから。

信念も覚悟も、他人の暖かさを知ってしまった今となっては、いつ崩れ去ってしまうかわからなかった。

「……城戸くん」

マミはベッドのシーツをぎゅっと握り締めた。
目を閉じるとすぐに浮かんでくる。彼がどんな目で私を見ていたか。

魔女に殺されかけて、私の秘密を知って、普通ならとっくに逃げ出しているような状況。
にも関わらず――城戸はマミを助けようとした。助けようとしてくれた。

なのに、私は拒絶した。それが最善だと思ったから。

（……そう、思ったのに）

あれだけハッキリした拒絶を示せば、彼はもう自分に関わってこないだろう。

――城戸龍二とは会えない。会う資格もない。
その事実を思い返す度、マミの胸はつきりと鋭く痛んだ。

「……ぅ、くっ」

頬を涙が伝い、シーツに小さな染みを作る。
彼は前に言ってくれた。
こんな何年も前の友達を相手に、『いつでも助けにいくからさ』と。

嬉しかった。それがどんなに非現実的な可能性であっても、　それはずっと孤独に戦ってきた自分が、久しく持てた繋がりだったから。

けれど違った。
その繋がりも、結局は孤独を与えるものでしかなかった。

（私と城戸くんは……違うんだ……）

私は魔法少女で、城戸くんは普通の人間。
それはあまりに単純で、しかしどう足掻いても覆らない二人の差だった。

「う、うっ……ひっく……」

静かな部屋に、押し殺すような嗚咽が響く。

（だい、じょうぶ。私は……大丈夫）

呪文のように、マミは心の中で同じ言葉を唱え続ける。

大丈夫……。思いっきり泣けば、すぐ、立ち直れる。

◆◆◆

「……」

男はマミの痛々しい泣き声を、鏡の中から見てしまった。
彼の手には先程マミが回収したはずのカードデッキが握られている。

そう、これだけの用事だったのだが……。

（……巴マミの運命は既に定まりつつある。だが、あいつならあるいは……）

手の中にあるデッキを見つめる。
思い起こすのは、最後にこのデッキを使った男。

（……こればかりは賭けるしかないな）

情けない。と自嘲して、男は鏡の先へと消えていった。

あの龍と契約しろ．１（後書き）

はい、今回はマミさんのトゥーフーメンタルが浮き彫りになる回でした。

・ほむほむに対しても、内心では「構って構って」とか思ってたんじゃないですかねこの人は（笑）

・キュゥべえ書くの難しいなぁ……あの胡散臭さと外道っぷりがなかなか表せない。
それも最終回のほむほむとのやり取りが可愛すぎたせいなんだ。なんだって、それは本当かい！？

次回はちょっぴり落ち込み気味な龍二くんです。……3話のアレもそろそろだなー（苦笑）
では（＾Ｏ＾）

・どうでもいい近況
来るのか、次回来るのか！　後藤さんバースが！　プトティラの余韻が全部吹っ飛んだぞ！！（え

あの龍と契約しろ．2

「……はぁ」

数日後の喫茶店『花鶏』。僕はカウンターに頬杖をつき、深い溜め息をついた。

「今日はずいぶんとテンション低いねぇ龍二くん」

リョウさんがカウンターに紅茶を置いてくれる。まるで珍獣でも見るような目をしていた。

「キミが落ち込むなんて、珍しいこともあるもんだ。こりゃ明日は雪が降るかな？」

「……リョウさんは僕を何だと思ってんですか。僕だって落ち込むことくらいありますよ」

脳裏に浮かぶのは、黄色い髪の幼なじみのこと。

（……僕も女々しいもんだ）

数日前からマミちゃんに会っていない。

あのデッキを手放して以降も（ミラーワールドの存在に近付きすぎたせいか）鏡にドラゴンが見えることは度々あったが、その都度『封印』のカードで危機を避けてきた。
魔女や使い魔も、マミちゃん達が頑張っているのか出現する様子はない。

ほむらちゃんと彼女――秋山蓮花も、僕に接触してこなくなった。
おそらくデッキを手放したことが知れたのだろう。

これで完璧。
僕は退屈ながらも平穏な、素晴らしい日常に帰還した。

（そうやって纏められたらどんなに良かったか）

心に残るわだかまり。こうしている間にもマミちゃんが魔女と戦っているかもと思うと、自分の無力さがほとほと情けなくなる。

何がいつでも助けに行く、だ。
僕は所詮ただの高校生。命がけで戦う彼女と比べれば、覚悟も力もまるで届きやしない。

湖面に映る表情を見つめる。
うわぁ……なんだよこの残念でネガティブまっしぐらな顔。
自分自身にイライラしながら、僕は紅茶を一気に煽り――

「龍二ぃ！」

吹きだした。
幸いにも、正面のリョウさんに直撃なんてギャグマンガみたいな展開にはならなかったけど。

「ゲホッ、ゲホッ！　み、美穂！？」

後ろを振り返ると、店の扉の前で腰に手を当て、ふんっと鼻を鳴らす美穂の姿があった。

「ったく、学校終わってすぐ飛び出してくもんだから、どこに行ったのかと思えば……あ、リョウさんこんにちは」

「おー、美穂ちゃん久しぶり。相変わらず元気だねキミは」

突然の美穂来襲にも動じず、ＨＡＨＡＨＡと笑いながら僕が吹きだした紅茶を拭き始めるリョウさん。プロだ。

「じゃなくてっ！　おい美穂、何の用だ！　いきなりシリアスムードぶち壊しやがって！　吹きだした紅茶代に見合う用事なんだろうな！？」

「やれやれ、この程度で心乱すなんて器が知れるわよ龍二」

「なにその達観した態度！？」

「それに記憶能力の方にも問題があるようね。ねぇ龍二、最近私と何か約束しなかったかしら？」

にこやかに言い放つ美穂。ヤバイ、これはすんごく怒ってる時の笑顔だ。

さぁ、僕の脳よ。検索を始めよう。キーワードは『美穂』『マジ切れ』『約束』。

……うん、多分絞れた。

「えっと、昨日話した埋め合わせの件でございましょうか？」

「正解」

あ、よかった。声質からしてマジギレ状態からは抜け出してくれたらしい。
目はまだサドッ気を帯びてるけど。

「昨日ドタキャンしてくれた分、今日はきーっちりと私に付き合ってもらうわよん♪」

「あ、あのー美穂さん？　確かに僕は埋め合わせに関して約束したのですが、その……」

「なによ。言いたいことがあるならはっきり言いなさい」

「……今日は気分がのらないので、また後日にし」

ここで僕の意識は途切れた。
覚えているのは一つ、腹部に鋭い痛みを感じたことだけである。

◆◆◆

そして、数時間後。

「あー、楽しかった♪」

「お前だけな！」

表情を緩めて背伸びをする美穂に、僕は語気を強める。

結論から言わせてもらえば、完璧に奢らされた。
覚えているだけでも十店近い店舗を回らされ、そこで購入したものは大体僕の自腹。加えて映画館にまで引っ張られた。
……そりゃ一度した約束を反故にしたのは僕だ。しかし。

しかしだ。

「一回のドタキャンでなんでここまでのペナルティー負わなきゃならいんだよ！　そこらの高利貸しの方がまだリーズナブルだぞ！」

「たった一回の失敗が、時に更なる災厄を呼び寄せることもあるのだよ、龍二くん」

聞き分けのない子を見るような目で、美穂はやれやれと首を振った。

あっはっは、ブッ飛ばすぞこのアマ。

「そもそも龍二、忘れたの？　埋め合わせするって約束したのは

アンタの方よ」

うっ、それを言われると痛い。
あの時はあの娘（蓮花）が来たことで頭がいっぱいで、かなり適当に返事しちゃったからなぁ……。
恨むぜこの前の僕。

「……けど、僕から約束したことを考慮しても、今回の出費は正直イタいんだけど」

「金銭に細かいわねぇ。『宵越しの銭は持たねぇ主義だ』とか言えないの？」

僕は江戸っ子か。

頭が痛くなる僕を無視して、美穂は近場にあったアイスクリーム屋に入っていく。
まだ奢らせる気かよ。
軽くなった財布に手をかけるが、予想に反して美穂は僕に金を要求せず、どころか二本買ったアイスのうち、一本を僕に渡してきた。

「ほら、こんくらいは奢ったげる」

「……」

「……何。その意味ありげな沈黙は」

「……いや、ありがたくいただきます」

――暴君が珍しいこともあるもんだ。
言えば確実に殴られる感想を、心の中だけ呟いて、僕と美穂は近くのベンチに座った。

「食べたことない味だな。何味？」

「バナナ&チーズだってさ。アンタの好みがわかんなかったから、売れ筋のやつ選んどいた。嫌いな味だったかしら？」

「いや、美味いよ」

「そう」と美穂は返して、ふとアイスを食べる手を止めた。

「ねぇ龍二。アンタ最近何かあった？」

「えっ？」

危うくアイスを落としかけた。美穂は世間話をするような気軽さで口を開く。

「ここ最近、学校でも溜め息ばっかりじゃない？　授業中も上の空だし」

「……そう見えた？」

「私が見てた限りわね」

うーん、自分では顔に出したり、仕草に出してる自覚はなかったんだけどな。

……ってか、お前は普段からそんなにも僕を観察してんのかよ……あれか？　主人が奴隷を監視するような感じか？

「何があったのか知らないけど、今の龍二、ぜんぜん龍二らしくないわよ。クラスのみんなも結構気にしてたし」

「……さっきリョウさんにも言ったんだけどさ、僕だって落ち込むことぐらいあるよ」

「それがらしくないって言ってんの」

ピシャリと言い放つ美穂。こういう時の剣幕は、僕もつい背筋を伸ばしてしまう。

「龍二、アンタはバカなのよ？　バカが深く悩んだって答えなんか出やしないわ」

「……」

こりゃまたド直球の誹謗中傷だな。
しかし、美穂の言葉は続いた。

「だからアンタは、バカらしく何も考えずに突っ走ってりゃいいの。どーせアンタのことだから、また誰か助けようとして面倒事に巻き込まれてんでしょ？」

図星。
なぜ美穂はこうも僕のことを見透すのだろうか。

「悩みについて詳しくは聞かないわ。ただアンタは、自分が正しいと思うことをしなさい。
アンタの場合、そうした方が上手くいくわよ。“私の時”みたいにさ」

「……」

僕はいつの間にか美穂の方を凝視していた。
……もしかして、励まされているのだろうか。

歯に衣着せぬ言い回し。しかし美穂の言葉に、少しだけ心が軽くなっているのも確かだった。

僕はできるだけ、皮肉混じりに聞こえるよう呟く。

「本当……清々しいヤツだよな。美穂は」

「あら、今頃気付いたの？」

ニカッと笑う美穂。

余裕綽々のこいつの態度がちょっと羨ましかった。

同時に、こいつに励まされたという事実に、悔しさが込み上げてくる。

くそう。いつもは暴君っぷりを遺憾なく発揮するくせに……ええ、不覚にも嬉しかったよ。癒されたよ。

……礼なんか言えば、さらに調子に乗るだろうから言わないけど。

「――あ、おい美穂。アイス落ちそうだぞ」

「え？」

美穂が手元を見るより早く、食べられて欠けたアイスの一部が溶け、
美穂のスカートに落ちそうになる。
僕はさっと指先で垂れたアイスを掬い、そのまま口に運んだ。

「……なっ！？」

「ん。こっちの味も美味いな。……？　どうした美穂、鳩が豆鉄砲食らったような顔して」

喉を鳴らしてアイスを飲み込む。
美穂はあわあわと口を開いたまま、アイスと僕を交互に見やる。

「それ、わ、私が……」

「――ああ、アイス勝手に食べちゃったことか。悪かったよ。でも、あのままだとお前のスカートに落ちそうだったし」

僕がそう言っても、美穂の挙動不審は終わらない。
どころか、火がついたように顔が赤くなっていく。

「あれ、お前顔赤いぞ。大丈夫か？」

「え、あ、いや、違……」

熱でもあんのかな。
どれ、ちょっと額に手を当てて確かめ――

「いや――――っ！！」

「のぁぁぁ――――っ！？」

頬を赤らめた美穂の強烈なカウンターパンチにあい、僕の意識は本日二度目のブラックアウトを迎えた。

◆◆◆

「ちくしょう美穂のヤツ……まだフラフラするぞ……」

おぼつかない足取りで、龍二は帰路についていた。

気絶から回復すると、そこに美穂の姿はなかった。
近くの店にいた店員さんの証言によると、僕を殴り倒した挙げ句、顔を真っ赤にしたまま逃走したらしい。

……もはや通り魔のやることだな。
まぁ逃げ出さなかったとしても、美穂が僕を介抱したり、素直に謝ったりする可能性は限りなくゼロだけど。

「やれやれ、もう日も暮れてきたか……」

さっさと帰ろう。そして早く美穂からのダメージを回復させよう。
身体を引きずりながら、商店街を抜け、大通りに出る。

――と、

『……あ』

車の喧騒に包まれた大通り、ふいに歩道橋を降りてくるピンク色の髪の女の子と目が合った。

「あなたは……」

「キミは……」

女の子――鹿目まどかちゃんはその場に立ち止まる。
なんの邪気も感じさせない瞳に、僕の姿が映り込んでいた。

「あー……やあ」

どうリアクションを取ればいいのか分からず、僕は適当に挨拶する。

「こ、こんにちは」

まどかちゃんも似たり寄ったりの心境らしく、挨拶がぎこちなかった。
しかも、会話はそこで途切れてしまう。

「……えっと、奇遇だね。今日はマミちゃんやさやかちゃんは一緒じゃないの？」

「あ、はい。今日は早めに魔女退治が終わったので……」

「ああ、なるほど」

「……」

「……」

うん。何か言葉返して。
ほとんど素性のわからない僕に緊張するのはわかるけど。

会話の糸口が掴めないまま、僕とまどかちゃんは一緒の方向に向かって歩き出す。示し合わせたわけじゃないのだが、多分まどかちゃんの家も、僕の家と同じ方向なのだろう。

街路樹のざわめきと、側を流れる小川のせせらぎに、僕とまどかちゃんの足音が重なる。

――ふとまどかちゃんの横顔を見ると、かなり顔が強張っていた。
大人しそうな見かけに違わず、人見知りする性格のようだ。

「……ねぇ、まどかちゃん。マミちゃん元気？」

話題作りを装って、僕は割と気になっていたことを聞く。
急に話しかけられ驚いた様子のまどかちゃん。しかしそれ以上に、
会話が生まれたことにほっとしたようで、

「はい。元気ですよ。いつも頼りになるし、今日だってすぐに魔女を倒しちゃいましたし」

まどかちゃんは羨望の籠もった声で言う。確かにマミちゃんは同性から好かれるタイプだよなぁ。

「ただ、その……」

しかし、まどかちゃんは言いづらそうに口ごもる。

「ただ？」

「魔女退治の時は変わりないんですけど、普段の時に、凄く落ち込んでるように見えることがあって……」

まどかちゃんの声からは、不安がありありと伺えた。
マミちゃんが落ち込んでる、か……気になったところでどうもならないけど、やはり心配にはなる。

「あの、城戸、さん？」

「ん？　何？」

「マミさんと城戸さんって、どんな関係なんですか？」

……え、何これ。今の流れで、何故こんなガチな質問されるんです

か？
やや遅れて、自分のした質問が含むニュアンスに気付いたのか、まどかちゃんは慌てて、

「あ、へ、変な意味じゃなくてですね！　　その、マミさんが落ち込み出したのは、城戸さんと別れてからなんです。だ、だから、二人が仲直りしてくれれば、マミさんも元気になるかなって思って、だから私も、二人が仲良くなってもらえるように、まずは城戸さんのことを知ろうって……！」

「落ち着いて」

どうもこの子は話しづらいな。
いや、誰にでも美穂レベルの会話力を求めるのは酷か。

（――仲直り、ね）

あれだけビシッと突き放した手前、マミちゃんが僕との関係で落ち込んだりするわけないと思うんだけど……まぁでも、質問くらいは答えようか。

「んー。まどかちゃん、マミちゃんからはどう聞いてるの？　僕らの関係」

「えっと、魔法少女になるずっと前に、一緒に遊んだ幼なじみだっ

て……」

「うん。否定するほど間違っちゃいないな。僕としてもマミちゃんはそんな印象だよ。――裏を返せば、それだけの関係ってことさ」

「……そう、なんですか？」

まどかちゃんは納得がいかない、と微妙な表情を作った。いや、そんな顔をされても困る。

僕らの関係は、相関図で見たとしても互いに『幼なじみ』以外の名称を持たないのだから。

「だから、僕なんかとの関係を修復するより、まどかちゃんやさやかちゃんが一緒にいてあげた方がいいと思うな。キミ達と違って、僕は役立たずだし」

「そんな、役立たずだなんて……」

「少なくとも、魔女やミラーモンスターに関しては役立たずだよ。じゃなきゃ、マミちゃんに拒絶されたりなんかしないだろ？」

なけなしのプライドをナイフで斬りつけているような気分だった。

――これは悔恨に見せかけた妬みだ。
僕ではマミちゃんを助けられないという　悔しさと、僕と違ってマミちゃんを助けられるまどかちゃんへの嫉妬。

（……最低だな）

いつから僕は、こんな利己的な人間になったんだろう。せっかくの美穂の励ましも、どこかに霧散してしまっていた。

「そういう意味じゃ、まどかちゃんは凄いよ。マミちゃんの役に立てるってだけで、僕からすれば羨ましいし――」

「凄くなんか、ないですよ」

まどかちゃんが、いやにはっきりした声で言う。

「それに私、役に立てる人間でもないんです。いつもさやかちゃんや他の人の足を引っ張ってばかりだし、今だって、マミさんの後ろについていくことしか出来ないし……」

まどかちゃんの口元には、自嘲の笑みが浮かんでいた。

「マミさんに会って、魔法少女のことを知って――やっとこんな私

でも誰かの役に立てるんだって思えるようになったんですけど……
でもそれは逆に、今までずっと諦めてたってことなんです」

「誰かを助けることなんてできない」「なにも私にはできない」と
勝手に決めつけた。

「でも城戸さんは違います。私みたいに、キッカケを見つけて初め
て誰かの役に立てるような、ダメな人じゃありません」

「……買いかぶりだよ。僕はただの一高校生だ。幼なじみの力にす
らなってやれないダメなやつだよ」

「けど、城戸さんはマミさんを助けようとしたじゃないですか。あ
の時すぐに帰らなかったのは、力が無くたってマミさんを助けたい
って思ったからじゃないんですか？」

……さりげに痛いところを突くなぁ。
ただ引っ込み思案なだけかと思いきや、意外に聡い子のようだ。

「さあね……。仮にそうだとしても同じことさ。どんな講釈を並べ
ても、僕がマミちゃんと同じステージに立つ手段はないんだから」

カードデッキはもうない。まどかちゃんのように『契約』もできな

い。
もはや笑い話の類だ。なるほど、秋山蓮花の言っていたことはまるで間違っていなかったわけだ。
お前には――何もできない。

「違いますよ」

まどかちゃんが立ち止まった。
つられて立ち止まると、彼女は何やら訴えかけるような視線をぶつけてくる。
――本気でこの子の性格が読めなくなった。気弱なのか気丈なのか、これならあのキュゥべえとかいう白うさぎの方が、まだキャラがわかりやすい。

「マミさんが城戸さんに望んでるのは……一緒に魔女と戦って欲しいとか、そういうことじゃないんだと思います」

「……？」

首を傾げる僕に、まどかちゃんは畳みかけるように言葉を重ねた。

「マミさんは、城戸さんを突き放したんじゃありません。
だって、私達に城戸さんのことを話す時、マミさんすっごく優しい顔になるから……あんなに嬉しそうに語れる人のこと、本気で拒絶

したりなんか絶対にしませんよ」

「……」

正直信じられなかった。
だって、もう何年も会ってない友達だぞ？　僕自身、先日会うまで、マミちゃんの記憶は思い出の中に沈殿してしまっていた。マミちゃんの側にしろ、それは同じだろう。

……ただ、僕の中には、まどかちゃんの語る事実を否定したくない自分も確かにいて、

「だから、城戸さんを拒絶したのは、城戸さんが足手まといなんじゃなくて、城戸さんを巻き込みたくなかったんですよ」

非日常からの脱却。
拒絶ではなく、解放。

「でもマミさん、本音を言えば城戸さんに今まで通り接して欲しかったんだと思うんです。
助ける助けないとかじゃなくて、ただ普通に話せる友達でいて欲しかったんじゃないでしょうか」

「よくわからないな。だいたいなんで僕なんだ。マミちゃんのこと

だから、こんな廃れた関係のやつよりも他に、相談できる友達だっているだろ？」

「……いいえ。マミさん、友達を作る暇なんてなかったって言ってました」

繋げる形で、まどかちゃんが言い放った。

「“ご両親が亡くなって”、魔法少女としての役目を果たすので手一杯だったからって……」

……えっ？

「だからマミさんは……」

「……ちょっと、待って」

「えっ？」

「まどかちゃん。今、なんて言った？」

声が震えた。
体感温度が一気に冷え、脊髄に液体窒素を流し込まれたかのような錯覚さえ覚える。
受容仕切れない事実が、口をついて飛び出していく。

「マミちゃんのお父さんとお母さんが、亡くなった？」

「知らな……かったんですか？」

まどかちゃんはてっきり聞かされていると思っていたらしい。

「……ごめん。詳しく聞かせてくれない？」

他人の事情。しかも親族の死が絡んでいるからか、まどかちゃんは少し迷ったようだが、しかし結局僕に話すべきと判断したらしく、ぽつぽつと語り出す。

――数年前のことだ。マミちゃんの家族はドライブの折、大規模な交通事故に巻き込まれたらしい。
マミちゃんの両親――僕の覚えている限り、とても優しいお父さん

とお母さん――は、そこで亡くなったそうだ。
当のマミちゃんも危険な状態だったらしいが、幸か不幸か、そこに例の白ウサギ、キュゥべえが現れた。
選択の余地も何もない極限状態で、マミちゃんが願ったこと。

それは『助けて欲しい』だった。

結果、マミちゃんは助かった。危険と隣り合わせの世界に、たった一人で放り込まれるという、途方もない代償と引き換えに。

「……それからずっと、マミちゃんは戦ってるのか」

「……はい」

知らずのうちに、拳を握りしめていた。

なんだよそれ。どうしてそんな理不尽がまかり通ってるんだよ。
家族を失って、友達をつくるだけの安らぎも与えられず、その上望んでもいない戦場に駆り出される？
なんでマミちゃんがそんな重責を背負わなくちゃならないんだ？

「城戸さん……」

黙りきりだった僕に、まどかちゃんが呼びかける。

「この話を聞いた時、私思ったんです。マミさんは、見た目通りの強い人じゃないんだって。むしろ、いつだって誰かに助けて欲しがってるんだって」

ああ、わかるよまどかちゃん。
キミがなぜそう思うのかも、マミちゃんが僕に何を言いたかったのかも。

（僕はなんてバカだったんだ……ッ！）

頭の中で、全てが連結していく。
マミちゃんと再開して以降、見聞きした全ての言葉と情景が。

『本当に城戸くんは変わらないね』

『……私は、こんなに変わっちゃったのになぁ』
『大丈夫。今までずっと魔法少女として戦ってきたのよ？　城戸くんの助けがなくたって、私はちゃんと戦えるわ』

『私が助けて欲しいって言ったら、本当に助けてくれる？』

なんで気がつかなかったんだよ。

――あの子はずっと苦しんでたのに。助けて欲しがってたのに！

「私、まだ願い事は決まってません。何ができるのかもわからない……でも、マミさんを一人ぼっちにすることだけは、誰かが困ってる時に何もできないのは、絶対にいやなんです！」

「だから」まどかちゃんは頭を下げた。

「城戸さんもマミさんを助けてあげてください！　魔女やモンスターと戦わなくてもいいんです、ただマミさんの友達でいてあげてください！」

――世間の目からすれば、まどかちゃんの行為は余計なお世話なのかもしれない。
秋山蓮花が、僕の行動原理を『安っぽい正義感』と評したように。
だが、それの何が悪い。
他人を思いやることの何が悪い。

ここにきてようやく、僕はまどかちゃんがどういう人間なのかを理解した。

そうか、この子は優しいんだ。誰かの為に泣いて、いつも正しくあろうと頑張れる素直な女の子なんだ。

「――ああ、勿論」

答えはすぐに出た。

「マミちゃんを、絶対一人にさせない」

「あ、ありがとうございます！」

まどかちゃんは顔をぱぁっと明るくする。子供っぽい、でも好感が持てる表情だった。

「やっぱり凄いね。まどかちゃんは」

「えっ？」

「僕も少し勇気がもらえたよ」

美穂。お前の言うとおりだった。
うじうじと考えるなんてガラじゃない。
行き詰ったら行き詰ったなりに、別のやり方を見つける。それでよかったんだ。

「まどかちゃんと同じで、僕も何ができるのか分からないけど」

まどかちゃんに、決心をつけさせてくれた女の子に手を差し出す。

「一緒に頑張ろう。お互いに誰かを助けられるように。まずは、マミちゃんを一人にさせないようにさ」

「――はいっ！」

あの龍と契約しろ．３（後書き）

今回はW更新です。

・しょんぼり龍二くん。龍騎第二話と同じく、自分の知らない世界を知った衝撃に加え、大事な幼なじみからの拒絶というWパンチ。真司は真司で大変でしたが、龍二もまた別の意味で追い込まれていく予定です。

・美穂は基本的に傍若無人。しかしお姉さんがちゃんといるので、劇場版に比べると素直になってます。……無論、龍二に対しても。

・主人公二人の会話。
しかし、まどかが若干１２話の時みたいに……まどかは『本当に優しい子』ってイメージしかありませんでしたから、なかなか動かしづらいです、この小説ではもう一人の主人公なのに……。
ちなみに、一番動かしやすいのはほむほむだったり（笑）

次回――ついに赤龍復活です。

お楽しみに！

あの龍と契約しろ．４（前書き）

彼らは必ず現れる。

どんな光も届かない暗闇の中でも。
全ての希望が失われた絶望の淵でも。

彼らが、必要とされる限り。
この世の脅威に苦しむ誰かが、一人でもいる限り。

そして人々は叫ぶ。
助けを求める声に、確かな想いを込めて。

『仮面ライダー』と。

あの龍と契約しろ．４

翌日、つつがなく学校を終えた僕は、晴れやかな気分でバイク置き場に歩みを進めていた。

これから僕は見滝原中に――マミちゃんに会いに行く。
まぁ、一晩やそこらじゃ僕に何ができるかなんて考えつかなかったから、すべてはぶっつけ本番なのだけれど。

「やっと元のバカ面に戻ったわね」とは、すっかり赤面から回復した美穂に言われた言葉。
普段は腹が立つ罵倒も、今日は悪くなかった。

うん。やっぱり僕は、適当に突っ走った方が性に合ってるらしい――

「あ」

立ち止まる。
バイク乗り場に見覚えのある姿があったからだ。

「蓮花、ちゃん」

「蓮花、だ」

不機嫌そうに彼女は言う。

「次にちゃん付けしたら、痛覚を持って生まれたことを後悔させるぞ」

「それはありがたいね。何故かキミをちゃん付けするのにはおぞましさを感じてたから」

これはかなりマジ。なんでだろうね？

「コホン。じゃあ気を取り直して――蓮花。一体何の用？」

「巴マミのところに行くつもりなんだろう？」

「いやまったくこれっぽっちもそんなことは考えてませんヨ？」

「わかりやすく目を逸らすな」

蓮花が白い目線を向ける。

むう。どうも僕は人を騙せないらしい。

「――っとに、なんなんだキミは。タイミング良すぎるだろ。まだ

出会って1ヶ月も経ってない中で、なんで僕の行動パターン予測してくるんだよ」

自分の生き筋が読まれるというのは、あまり気分のいいものじゃない。

「もしかして僕達、前に会ったりしてる？　それとも前世あたりに何か因縁でもあるのかな？」

「……」

蓮花は急に押し黙った。

あれ？　ここは「何をバカな妄想を吐いている」とか言うかと思ったのに。

……ってオイオイ。なんで僕まで蓮花の行動パターンを読んでるんだよ。マジで前世の因縁か？

（まぁ、そんなわけないけどさ）

溜め息をついて、僕は再び蓮花に問う。

「で？　マミちゃんに会いに行くから何？　また僕に『これ以上関わるな』って忠告する気か？」

「話が早くて助かるな。バカの割にはだが」

「キミは一度『言葉の暴力』って単語を調べるべきだ」

「何度忠告してもわからない単細胞を、バカと呼ばなくて何と呼ぶんだ？」

僕と蓮花の間に火花が散った。
一歩も退かない、そんな気配がありありと伺える。

「……カードデッキがもうないのは知っている。お前はさっさと日常に戻れ。お前にできることはなにもないんだ」

「何もできないかどうか、それはキミが決めることじゃないよ」

僕はまだ足掻き尽くしていないんだ。諦めるには早い。

「正直、まだ魔女やモンスターは恐いよ。あの赤い龍だって、いつ襲ってくるかわかったもんじゃないし。けど――知っちゃったからさ」

「？」

「あいつらのせいで、苦しんでる人がいるってことをさ」

浮かぶのは、幼馴染の女の子。新聞で取り上げられた、被害者の遺族の声。

「結構悩んだりしたけど、やっぱりダメみたいだ。人が誰も知らないところで死ぬなんて許せないし、目の前で苦しんでる人がいるのに、見て見ぬ振りなんかできない」

「大きく出たものだな。身の程を弁えていない子供の戯言だ」

「大人の意見をありがとう。けど、僕にしてみれば、出来るか出来ないかなんてどうでもいいんだ。
僕は目の前で苦しんでいる人を助ける。もし魔女やモンスターたちの生み出す争いが、誰かを苦しめるって言うなら――」

――止めてやる。

「そんな戦い、僕が止めてやる」

蓮花は目を見開く。
出会ってからほぼ無表情を貫いていた彼女にしては、とても珍しい表情だった。
蓮花はまだ何か言いたげだったが、その口が開くことはない。
啖呵を切った僕も次に言葉が見つからず。膠着状態が続く。

――キィィィィィィィィィン！！

『！！』

甲高い金切り音。魔女とモンスターの到来を告げる警鐘を聞き、僕達はバイクのキーを回す。

「おい、お前はここにいろ！」
「うっさい！　僕の勝手だ！」

蓮花を無視して、僕はスクーターを走らせる。
ノイズの出所を探しながら、ふとサイドミラーを見ると、僕の背後に黒いオートバイがついていた。
誰が乗り手なのかは、確認するまでもない。

そして――辿り着いたのは見滝原の大手病院だった。
おいおいマジか……この前は廃ビルとかだったから良かったけど、こんなとこで魔女やモンスターが暴れたら、とんでもない被害になるぞ……！

「どけ」

追いついてきた蓮花が僕を押しのけ、窓ガラスの前に立つ。
ポケットから取り出された蝙蝠のエンブレムが描かれたデッキを翳すと、彼女の腰回りに銀色のベルトが装着された。

右腕を軽く曲げ、蓮花は叫ぶ。

「変身！！」

デッキが装填され、エンブレムが輝く。灰色の影がオーバラップし、蓮花の姿は仮面ライダーナイトへと変わった。

「余計な真似はするなよ。――まぁ、したくてもできないだろうがな」

捨て台詞と共に、ナイトは鏡の世界――その先に続く結界へと入っていった。

「〜〜〜っ！！　あーチクショウ！」

確かに蓮花の言うとおりだ！
現場に来れば打開策が浮かぶと思ってたけど、実際何も浮かばない！

（……マミちゃん達は、もう結界に入ってるのかな）

拳に手汗が滲んだ。　無事ならばいい。僕の取り越し苦労でしたーで済む。

――しかし、なんだろう。

とてつもなく嫌な予感がする。

虫の知らせとでも言うのか。あまりにはっきりした胸騒ぎ。

しかし、その予感は役に立たない。
僕が結界に入らない限り。

「くそっ、何とかならないのか……！？」

「力を貸してやろうか？」

静寂の中に突如として響く声。しかし人影はない。

「だ、誰だ？」

周囲を見渡し、僕は蓮花が入っていった窓ガラスの方に目をやる。
日常を映す平面世界。そこに一人の男の姿が映り込んでいた。
くたびれたボロボロのコートに、覇気の感じられない表情。くしゃくしゃの黒髪は手入れが行き届いていないことがわかる。
だが、突っ込むべき問題はそこじゃない。
どうしてかって？　男は“鏡にしか映っていなかった”からだよ。現実にあるべき実体がなく、虚構の中のみで存在している。不気味なことこの上ない。
「面と向かって会うのは久しぶりだな」
「……アンタ誰だよ。魔女やモンスターの仲間か？」
「いや、違う」
首を横に振る男。
嘘を言っているようには、見えなかった。

「俺は神崎士郎」

「……神崎、士郎？」

あれ？　なんだろう、聞き覚えがある……ような気がする。

男――神崎はシニカルな微笑を浮かべた。

「まぁ、今はどうでもいいことだ」

おもむろに神崎がコートのポケットから取り出したのは――

「！！　それは！」

黒光りするカードデッキが、神崎の手の中にあった。

「選べ。城戸龍二。戦うか、戦わないか」

◆◆◆

一方、結界の最深部付近。

「願い事、私なりにいろいろ考えてみたんですけど。」

龍二や蓮花よりも一足早く結界に辿り着いていたまどかとマミ。
現在は、結界に取り込まれる際、その最深部付近に残ったさやかとキュゥべえのもとに向かっていた。
位置はキュゥべえがテレパシーで教えてくれる為、最短距離で行くことができる。

「決まりそうなの？」

その行きすがら、まどかの手を引きながらマミは尋ねる。

「はい。でも、あの、もしかしたらマミさんには、考え方が甘いって怒られそうで」

「どんな夢を叶えるつもり？」

「……私って昔から、得意な学科とか、人に自慢できる才能とか何もなくて、きっとこれから先ずっと、誰の役にも立てないまま迷惑ばかりかけていくのかなって、それがいやでしょうがなかったんです」

これは、城戸にも話したこと。自分の周りにいる人間を大切にできる人にとって、それはコンプレックス以外の何物でもない。

「でも、マミさんに会って、誰かを助けるために戦ってるのを見せてもらって、同じことが私にもできるのかもしれないって言われて、何よりもうれしかったのはそのことで……」

思い出すのは、自分の小さかった世界を吹き飛ばすまでの感動。
常識を越えた力を持って、鮮やかに戦い、人々を救うマミの姿。

「だから私、魔法少女になれたら、それで願い事は叶っちゃうんです。
こんな自分でも、誰かの役に立てるんだって、胸を張って生きていけたらって――それが一番の夢だから」

願いを叶える為に魔法少女になるのではなく、魔法少女そのものが願い。
悩んだ末に、まどかの出した結論がそれだった。

マミは振り返らずに告げる。まどかの意志を確かめるように。

「大変だよ。怪我もするし、恋したり遊んだりしてる暇もなくなっちゃうよ？」

そう――私みたいに。

「でも、それでもがんばってるマミさんに、私、憧れてるんです」
「……憧れるほどのものじゃないわよ、私」
きらきらとした子供のようなまどかの羨望。
しかしマミは、自分を蔑むように肩を落とした。
「無理してカッコつけてるだけで、怖くても、辛くても、誰にも相談できないし……一人ぼっちで泣いてばかり」
挙げ句、せっかく手を差し伸べてくれようとした友達も、拒絶してしまった。
「いいものじゃないわよ。魔法少女なんて」
あの時、死んでしまった方が良かったなんて言わない。生きていることがツラいなんて言わない。
しかし、この考えだけは、自分の中で未来永劫変わらないだろう。

まどかはマミの心境を読み取ったのか、柔らかな笑顔を浮かべた。

「マミさんはもう、一人ぼっちなんかじゃないです」

「――そうよね。そうなんだよね」

マミは振り向いて、まどかの手を取る。
驚いたまどかは、マミの顔を見て更に動揺した。

マミが、その瞳から大粒の涙を流していたからだ。

「本当に、これから私と一緒に戦ってくれるの？　側にいてくれるの？」

マミの声は震え、その問いかけは懇願にも聞こえた。
一人にしないで。一緒にいて、と。

「――はい。私なんかでよければ」

まどかがしっかりと頷く。
もう、マミさんを一人にしない。そう誓って。
マミは涙を拭った。

「まいったな。まだまだちゃんと、先輩ぶってなきゃいけないのにな。やっぱり私ダメな子だ」

「マミさん……」

「でも、せっかくなんだし、願い事は何か考えておきなさい」

「せっかく……ですかね。やっぱり」

そうは言っても、本当に見つからないのだけれど。

「契約は契約なんだから、ものはついでと思っておこうよ。億万長者とか、素敵な彼氏とか。なんだっていいじゃない」

「いやぁ……その……」

煮え切らないまどかに、マミは冗談混じりな口調で言う。

「じゃあこうしましょう。この魔女をやっつけるまでに願い事がきまらなかったら、その時はキュゥべえにごちそうとケーキを頼みましょう」

「ケーキ！？」

「そう。最高に大きくて贅沢なお祝いのケーキ。それでみんなでパーティーするの。私と鹿目さんの、魔法少女コンビ結成記念よ！」

「私、ケーキで魔法少女になるんですか！？」

「ふふっ、嫌ならちゃんと考えなさい」

「……はぁ～い」

さすがにそれは恥ずかしいものがあったのか、まどかは慌てて願い事を考え始める。そうしている内に、

「あ」

そうだ。

「じゃあマミさん、もし逆に私の願い事が決まったら、城戸さんに会ってあげてくれませんか？」

「えっ？」

予想外の名前と提案に、マミはきょとんとした表情になる。

「城戸さん、会いたがってましたよ。マミさんに」

「鹿目さん……城戸くんに会ったの？」

「はい。昨日、ちょっと」

マミについて色々話してしまったことは伏せる。

「私も魔法少女になるんですから、マミさんも少しくらい時間ができるかも知れないでしょ？」

「で、でも私、あんなひどいこと言って……」

今更どんな顔をして　会えばいいのか。
また悲しげに顔を曇らすマミに、まどかは言う。

「マミちゃんを一人にさせない」

「……？」

「城戸さん、そう言ってました」

「！！」

胸が押し潰されそうなくらいに、マミの中では膨大な量の感情が渦を巻いていた。

その感情の名は――歓喜。

まだ、そんな言葉をかけてくれるの？
私は、魔法少女なのに。
あんなに、ひどいこと言ったのに。

「会ってあげてくださいね」

「……うん」

まどかは満足そうに笑った。
――きっと、私の願い事が決まらなくても、会いに行くんだろうなぁ。

『マミ、まどか、大変だ！』

突然、二人の脳内に声が割り込んできた。キュゥべえのテレパシーによる連絡だ。

『グリーフシードが動き始めた！　もうすぐ魔女が孵化する。急いで！』

「オッケー！　今日という今日は速攻で片付けるわよ！」

マミは晴れやかな様子で言葉を返し、指輪に変えていたソウルジェムを輝かせる。

光がマミを包み込み、彼女を魔法少女へと変身させた。

「行くわよ鹿目さん！」

「はい！」

まどかの手を引き、結界の奥へと進んで行く。

（……不思議）

襲ってくる使い魔をマスケット銃で排除しながら、マミは思う。

（身体が軽い）

今までのベストコンディションが、容易く塗り替えられていくのがわかる。
こんなにも、力を有り余らせていたなんて。

（こんな幸せな気持ちで戦うなんてはじめて）

みんなと一緒にいられるという未来が、身体を突き動かす。
嬉しい気持ちが止まらない。

（私、もう何も怖くない）

だって、一人じゃないもの！

◆◆◆

蓮花――ナイトはダークバイザーを携え、回廊を走る。
病院の中に展開されたというだけあって、あちこちに医療器具やベッドが浮かんでいた。

（ここには何度来ても慣れないな……）

これなら“通常のミラーワールド”の方がまだ可愛げがあった。
――いや、本当なら戦うこと事体、もう御免被りたいのだが。

「……ん？」

進行方向に、オレンジ色の光が見えた。
魔女か？　と警戒するナイトだったが、近づいてみればそれは知り合いの姿だった。

「ほむら！」

「蓮花！」

答えるほむらは、巨大なリボンと鎖によって拘束されていた。
そこから抜け出そうともがいているのがわかる。

「巴マミの魔法か……待っていろ、今斬る」

「私のことはいい！　それより早くまどか達を追って！」

ほむらにしては珍しい。ひどく焦った様子だった。

「巴マミじゃこの先にいる魔女には勝てない！　早くしないと手遅れになる！」

「！！　……わかった！」

それだけで全てを察し、ナイトは全力で結界を駆け抜けていく。
無論、結界の住人達も黙ってはない。
おびただしい数の使い魔達が、ナイトに襲いかかってくる。

「邪魔をするな！」

ダークバイザーで邪魔になる使い魔だけを的確に斬り倒しながら、
ナイトは駆ける。
何体倒したか数えるのを止めた頃、ナイトは遂に結界の最深部に辿り着いた。

印象としてはお菓子の国。景色の至るところに多種多様なお菓子が積み上げられていた。

――その中央部で戦っているのは、魔女と魔法少女。
巴マミと、小さく可愛らしいぬいぐるみの姿をしたお菓子の魔女『シャルロッテ（Ｃｈａｒｌｏｔｔｅ）』だ。
近くの物陰には、まどかにさやか、キュゥべえの姿もある。

「あれが今回の魔女か……」

見た目こそ脆弱そうだが、外見は判断材料にならない。
ほむらが巴マミが危険だと言った以上、手を貸してでもあの魔女を倒さなければ。

ダークバイザーを構え、ナイトが動き出そうとするが――

――キシャアアアッ！！

「なッ！？」

積み上がったお菓子の影から、刃のような前足が振り被られる。

どうにか後方へのバックステップで攻撃を避けるナイト。
仮面の下にある瞳が、敵の姿を映した。
――グルルルル……。
蜘蛛の足に、蟹のようなハサミを持つ胴体が連結したミラーモンスター、ディスパイダー・リボーンだ。

「クッ、この忙しい時に……！！」

その時ちょうど、ヒラヒラ逃げ回るシャルロッテを追うマミが、ナイトに気が付いた。

「あなたも来てたのね。まぁいいわ、そこの蜘蛛さんの相手は頼んだわよ！」

「おい待て！　その魔女は危険だ、私と協力しなければ倒せないぞ！」

「でも、そこの蜘蛛さんだって放っておけないでしょ？　大丈夫、今の私なら手助けはいらないわ！」

言って、マミは再びマスケット銃でシャルロッテを狙い撃つ。一見マミの優勢だが、何が起きるかわからないのが戦いだ。

（チッ、早めにこいつを始末するしかないか……）

ディスパイダーRを睨みながら、バイザーにカードを装填するナイト。

【SWORD・VENT】

ダークウィングから授かった槍、ウィングランサーの切っ先が、ディスパイダーRに突き付けられる。

「行くぞッ！！」

――キシャアアアッ！！

ハサミをしゃきんと鳴らすディスパイダーRへ、ナイトは飛びかかって行く。

――“その時”までのカウントは、既に秒読みに入っていた。

◆◆◆

「このままでは確実に、巴マミは死ぬ」

「なっ！？」

神崎から告げられたのは、あまりに衝撃的な宣告だった。

「ど、どういう意味だよ！？　マミちゃんが死ぬって！！」

「そのままの意味だ。暁美ほむらと秋山蓮花が動いてはいるが……俺の目算では望み薄だな。巴マミが助かる確率は、良くて８％といったところだろう」

「そんな……」

不思議と疑う気にはなれなかった。

さっきから感じていた不安感が、僕の中で危険信号を鳴らしまくっていたからだ。

死ぬ。マミちゃんが。

唇を噛み締め、僕はおもむろに、神崎が映るガラスとは違う窓ガラ

スに触れた。
当然、鏡は僕を受け入れようとはせず、静かに世界を映し続けている。

「おいアンタ、さっき言ったよな。僕に戦うか戦わないか選べって」

「ああ」

「なら……僕もあいつみたいに戦えるのか？」

僕と同じライダーの力を持ちながら、ケタ外れの実力を見せつけていった彼女のように。

「もう一度変身して、仮面ライダーになれば……」

「お前の覚悟次第では可能だな」

「マミちゃんを救うことも？」

「それもお前の覚悟次第だ」

「だが」と神崎は殊更に声の調子を低めた。

「力を得るにはリスクが伴う。
――モンスターと契約を結べば、お前は後戻りできなくなる。最後まで戦い続けるしかない」

「最後……死ぬまでってことか」

神崎は答えない。
しかしその沈黙は、肯定とほぼ同義だった。

――キィィィィンッ！！

狙い澄ましたかのようなタイミングで、再びノイズが鳴り響く。
この感じ――間違いなくあの赤い龍だ。

（最後まで戦い続ける、か）

僕はポケットから、今まで僕をずっと守っていた『封印』のカードを取り出し、

――ビリッ！！

破り捨てた。
二枚に分割されたカードは、粒子となって消えていく。
さぁ、これで逃げ道は焼き落とされた。

あとは、進むしかない。

「……いいのか？　気付いてるんだろう、龍が近付いているぞ」

「……僕さ」

心に溢れていく不安を掻き消し、僕は精一杯笑ってやった。

「元々、なんでも首を突っ込まないと気が済まないんだ」

また、美穂にはバカだって言われそうだけど。

「それに、首を突っ込まなきゃ助けられない子がいる。だったら、

いくらでも関わってやるさ」

神崎はじっと僕を見つめていたが、やがて相好を崩し、

「どこまで行っても変わらないな。お前は」

そのまま神崎は、手首のスナップが利いたフォームで、デッキを投げた。
鏡の世界にあったハズのデッキは実体を取り戻し、僕の手元へやってくる。

「あの龍と、契約しろ」

「……」

僕はデッキから一枚のカードを取り出した。
真っ白な光が描かれた一枚――【ＣＯＮＴＲＡＣＴ】。契約のカード。

「……信じてはもらえないだろうが、お前を巻き込むつもりはなかった」

ぽつりと独り言のように、神崎は言った。心なしか、表情にツラさ

が混じっている。

「すまない。長らく苦しんだお前をまた、戦いの渦に引き込んでしまったな」

「……なんの話か知らないけどさ。礼を言うのはこっちだよ。このデッキ、ありがとう」

何故か頭を下げてくる神崎に、僕はそう言って、鏡の前に立つ。
鏡面が揺らぎ、その先には赤く細長い影。

「さぁ、来い――契約しよう！」

◆◆◆

「何っ！？」

ディスパイダーRと戦うナイトは驚愕する。
視線の先には、結界の出入り口にして、現実世界の様子を知ることができる鏡。

――そこに映るのは、鏡に向かって契約のカードを翳す龍二。

「まさか……！　よせぇ――――――ッ！！」

その愚行を止めるべく、ナイトは反射的に鏡へと飛び込もうとしていた。
しかし、それはディスパイダーRにとっては千載一遇のチャンス。

――キシャッ！！

吐き出された白い糸が、ナイトの身体に絡み付き、その動きを奪う。

「！！　しまった……ッ！」

身動きの取れないナイト。
ディスパイダーRは獰猛な唸りを挙げ、再びハサミをすり合わせた。

◆◆◆

――ガァァァァッ！

静寂を貫く雄叫びを挙げ、赤い龍――ドラグレッダーが窓ガラスから飛び出してくる。
その姿が、僕の翳した契約のカードに入り込み、周囲が激しい光に包まれた。

目を開くと、そこは一面真っ暗な闇の世界。
立ち尽くす僕と、その周りを動き回るドラグレッダーだけが、はっきりと視認できる。

ドラグレッダーはその鋭い瞳に僕を映す。僕もまた同じように、ドラグレッダーを見つめ返した。

――ガァァァァッ！

また一鳴き。
僕にはその仕草が嬉しそうなものに見えた。ドラグレッダーが、何故かこう言っているような気がしたからだ。

『待っていたぞ』

根拠は無いし、その意味もわからない。
力強く頷くことで、僕はドラグレッダーの意志に応える。

――ガァァァァッ！

ドラグレッダーが蜷局を巻き、一筋の光となって僕の身体と同化する。

目映い真紅の光が、僕のデッキに新たな力を与え、そして――

◆◆◆

「さぁ、キメさせて貰うわよ！」

マスケット銃をロッドのようにスイングし、シャルロッテを空中へ吹っ飛ばす。
追撃の手を緩めず、マミはマスケット銃を撃ち込んだ。

（これで終わり！）

ほむらにも使ったリボンによる拘束魔術で、シャルロッテの動きを奪う。

トドメの一撃として召喚されたのは、特大サイズの砲台。狙いを定め、マミは自分の意思という名の引き金を引いた。

「ティロ・フィナーレッ！！」

魔力の全力放出。
黄色い閃光が空を裂き、シャルロッテの身体を貫いた。

「やったぁ！」

さやかの喝采が聞こえた。まどかも声こそ出していないが、勝利に顔を綻ばせているだろう。

終わった。マミは満足げな表情を浮かべる。
今までで最高の勝利。これから始まる魔法少女コンビの門出には、相応しい戦いだった――

「そこから逃げろ！　巴マミ！」

ナイトの叫び声が、勝利の余韻を全て塗り潰した。

「えっ……？」

マミは何が起こったのか、すぐには理解できなかった。
倒したはずのシャルロッテ。そのぬいぐるみのような身体から、黒く大きな何かが飛び出してくる。
蛇のように長い体躯に、長い耳と鼻。ピエロのようなメイクの施された顔が、マミの眼前に広がっていた。

シャルロッテの本体が、その大きな口を開く。
中に生え揃った鋭利なキバ――数秒後にはマミの頭部を噛み砕くであろう凶器。

「……ぁ」

そこからは全てがスローに感じた。

まどかとさやかは恐怖に凍りついている。
ナイトはどうにか蜘蛛の糸を切り、こちらに向かっているが間にあわない。ディスパイダーRが邪魔をしている。

（死、）

自分の運命を否応なしに理解させられる。

私は死ぬ、あと数秒で。

「い、や……」

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。死にたくない。まだまだやりたいことがたくさんある。やっと友達ができたのに。もう一人じゃないのに。これから一緒に戦えるのに。こんなの嘘だ。こんな何の救いもない終わりなんて認めない。私はこれから笑って生きるんだ。ずっと泣いてきた分、鹿目さんや美樹さんと一緒に笑い合うんだ。もう泣いたりしなくていいんだ。こんなのおかしいよ。死にたくない。生きていたい。死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死

にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死――――
――！！

『いつでも助けに行くからさ』

最後に浮かんだのは、あの人の笑顔。
私を助けると言ってくれた、大切な友達。

「……けて」

掠れるような声で、マミは言った。

「……たすけて、城戸くん……」

「――ああ、任せとけ」

赤い影が、シャルロッテの首に食らいついた。

◆
◆
◆

『☆¢▼Ю――！！』

シャルロッテが奇声を上げるが、赤い影――『無双龍ドラグレッダー』はその首を放さない。
その巨大な体躯をしならせ、シャルロッテをお菓子の山へと叩きつける。

「……ぁ、えっ？」

立て続けに起きる状況の変化に、マミは思考が追いつかなくなっていた。
張りつめていた力が抜け、情けなく地面にへたり込む。

「大丈夫だった？　マミちゃん」

彼はいつの間にか立っていた。
龍の影を纏い、まるでマミを庇うように、赤き騎士は威風堂々と存在していた。

（……う、そ）

その姿と声を、マミは知っていた。
けど、こんなの有り得ない。
こんなタイミングで、私が生きている無慈悲な現実の中で、ピンチに都合よく助けてくれるヒーローなんているわけがない世界で。

彼が、助けに来てくれるなんて。

「どう、して……？」

「どうして？　あはは、変なこと聞くなぁ。マミちゃんは」

マミの問い掛けに、騎士は仮面の下で笑い、振り返った。

目映い銀色の甲冑。赤き血の如きスーツは、熱く燃える闘志を感じさせる。
左手に装着されたのは、ライドバイザーから進化した龍召機甲『ドラグバイザー』。
デッキと額には龍のエンブレム。
仮面の下にある複眼は希望に満ちた強い光を宿していた。

「約束しただろ。いつでも助けに行くって！」

――ガァァァァッ！！

主人の思いに呼応するかのように、ドラグレッダーが咆哮する。

――仮面ライダー龍騎、復活。

あの龍と契約しろ．４（後書き）

仮面ライダー龍騎、復活！

・『誰かを守るためだけに変身するから』
このセリフは大好きです。何気ない言葉に見えて、仮面ライダーの真理とも言えますしね。

・ええ、遂に一つ目の鬱フラグをへし折りましたよ！
今回はやや、レッツゴー仮面ライダーをリスペクトしているところがあります。
人々の想いがある限り、仮面ライダーは不滅。それを体現した回にするよう頑張ってみました。

次回はｖｓシャルロッテ。
さぁ、龍騎を暴れさせますよ！！

では（＾Ｏ＾）

あの龍と契約しろ．５（前書き）

報告

プロフィールに蓮花の紹介文を追加しました。

あの龍と契約しろ．5

「下がってて、マミちゃん」

「う、うん……」

起き上がったシャルロッテを睨みながら、龍騎はマミを後退させる。そこへナイトが走り寄り、自分を狙うディスパイダーRへと剣を向けた。

龍騎とナイト。両者が背中合わせとなる様子は、なぜかサマになっている。

「……言ってやりたいことは山ほどあるが、今はこいつらを倒すのが先決だな」

「よくわかってるじゃん。そっちの蜘蛛、頼むよ」

龍騎はデッキから引き抜いたカードを、ドラグバイザーに装填する。

【ＳＷＯＲＤ．ＶＥＮＴ】

空から振ってきた剣は、ブランク体のようにシンプルな作りではなく、ドラグレッダーの尾を模した青龍刀『ドラグセイバー』。

「しゃあっ！！」

気合い十分、龍騎はシャルロッテに向かって駆け出し、ナイトもまたディスパイダーRと対峙する。

『£∋○ｐ――！！』

奇声を挙げ、自分の食事を邪魔した相手へ特攻するシャルロッテ。

単調な攻撃だ。

龍騎はギリギリのタイミングで、まさに飛竜の如く跳躍し、

――ザンッ！！

シャルロッテの長い体躯へとドラグセイバーを突き立てる。

しかも、それだけでは終わらない。

「うぉぉぉ――――りゃッ！！

龍騎はシャルロッテの身体を走りながら、ドラグセイバーで真一文字を描いていく。そのラインが尻尾まで達し、シャルロッテを両断した。

（凄い……。契約してない時とぜんぜん違う！）

龍騎は跳ね上がったパワーを実感する。
同時に、パワーが上がったというより、これが『本来の力』であるかのような懐かしさも覚えていた。

「――っと！？」

脇を掠めた衝撃。
慌てて気配を追うと、そこにはさっき斬り捨てたはずのシャルロッテが、不気味な笑みを浮かべていた。傷も全て完治している。

（――そうか、コイツはさっきも、あの小さなぬいぐるみの中から出てきてた。ヘビみたいに脱皮して、傷を癒やすことができるんだ）

致死量のダメージを受ければ、また新たな個体が体内から現れる仕組み。

つまり、この魔女の特性は再生能力。
しかも倒したと油断させ、マミに見せたような奇襲を行うこともできる。厄介な力だ。

――龍騎が攻め切れずにいるその一方で、ナイトも同じくディスパイダーRに手を焼いていた。

（固いな）

ディスパイダーRの外皮に阻まれ、ウィングランサーが刺さらない。
油断すればまた糸で拘束される為、注意力も散漫になる。
長期戦は危険だ。

――キシャアアアッ！

ディスパイダーRが雄叫びを挙げる。
自分が優位に立ったことに対する余裕か。
だが、負けられない。
――“同じ相手に二度苦戦”するのは、こちらのプライドが許さないからだ。

（何度も再生するなら――）

（固い外皮が自慢なら――）

龍騎とナイトがほぼ同時に、同じカードをデッキから引き抜いた。

（それ以上のパワーで叩き潰す！！）

龍と蝙蝠を模した紋章の描かれたカード。
勝利の鍵となるそれをバイザーが読み込み、響く電子音が敵に必殺の宣告を告げる。

【ＦＩＮＡＬ．ＶＥＮＴ】

【ＦＩＮＡＬ．ＶＥＮＴ】

「はぁぁぁ……ッ！！」

両手を龍の頭部を模すかのように、上下に重ねて構え、龍騎の周囲をドラグレッダーが螺旋を描くように蠢く。

「うぉぉぉぉ――ッ！！」

ウィングランサーを携え、ディスパイダーＲに突撃するナイト。その背中にはダークウィングが、漆黒のマントとなって装着される。

『ハッ！！』

ドラグレッダーと共に龍騎は天高く飛び上がり、大口を開けるシャルロッテへと右足を突き出す。
ナイトもまた、ダークウィングのマントを用いて飛翔し、漆黒のマントがウィングランサーを基点に、削岩機の如く回転しながら巻き

ついていく。

「だぁぁぁぁぁぁ――――ッ！！」

「はぁぁぁぁぁぁ――――ッ！！」

吐き出されたドラグレッダーの火炎を纏い、それらを攻撃力と推進力に変えて放つ龍騎の必殺技『ドラゴンライダーキック』。ダークウィングの漆黒の翼をウィングランサーに巻きつけ、圧倒的な刺突力を持って敵を貫くナイトの必殺技『飛翔斬』がそれぞれ発動する。

「★∂ｂ£――ッ！？」

――キシャァァッ！！

赤い一筋の炎が、シャルロッテの牙を砕きながら口へと入り込む。凄まじいキックの威力が、再生の間もなくシャルロッテを内側から粉砕した。

天より飛来した黒い閃光もまた、強化された槍の貫通力をもってディスパイダーRを頑丈な外皮ごと貫き、その生命を刈り取る。

――ガァァァッ！！

――キィィィッ！！

――爆炎をバックに立つ二人の騎士。

勝ち鬨をあげるかのように、ドラグレッダーとダークウィングが雄叫びを轟かせた。

◆◆◆

「ん？」

戦いが終わり、龍騎はふと魔女が爆散した場所を見る。

小さな黒ずんだ石――というのが一番近い表現だろうか。

そしてまた、ディスパイダーRが死んだ場所にも、奇妙な球状の光のが浮かんでいる。

――ガァァァッ！！

――キィィィッ！！

それらをじっくり見る間もなく、ドラグレッダーが黒ずんだ石を、ダークウィングが球状の光をそれぞれ飲み込んでしまった。

「今のは……？」

「ヤツらは死んだモンスターのエネルギーか、魔女の孕んだ卵『グリーフシード』を食うことでより強い力を得るんだ。倒した魔女やモンスターが強ければ強いほどいい」

ナイトが龍騎に近付く。仮面の下にある表情は読み取れないが、その口調には僅かに怒りが籠もっていた。

「忠告を聞かないヤツだな。――なぜ勝手に契約した」

「……あのまま行けばマミちゃんは死んでた。契約すればマミちゃんを助けられる」

「だから契約した――か？」

「それ以外に何があるんだよ」

しかしもはや、龍騎はその声に威圧されてはいない。
真っ向から、ナイトを睨み返す。

「安っぽい正義感だって言いたいなら言いなよ。誰に何て言われたって、僕は目の前で苦しんでいる人達を助ける。どんなリスクを背負ってでも」

拳を強く握り締め、龍騎は宣言する。
その相手はナイトか、はたまた理不尽な運命を課すこの世界にか。

「少なくとも僕は、魔女やモンスターを倒すために変身する。誰かを守るためだけに変身するから」

「……」

ナイトは何の反応も示さなかった。
何か言いたげな、重苦しい沈黙を振り払うように、ナイトは龍騎に背を向ける。

「これでお前は、仮面ライダー龍騎だ。……満足か？」

質問とも、確認とも取れない捨て台詞。

冷めた一言を残して去る彼女の後ろ姿は哀愁を帯び、龍騎はナイトの姿が見えなくなるまで、その背中を追っていた。

同時に結界も消えていき、現実世界の暖かな夕日が龍騎を出迎える。

「城戸、くん」

遠慮がちな声。

振り向けば、魔法少女への変身を解いたマミが立っていた。

龍騎もまたデッキを抜き、元の龍二の姿へと戻る。

ナイトとは違う意味で重い沈黙。

龍二は困ったように頬を掻き、ゆっくりと口を開く。

「とりあえず、帰ろっか」

――巡る運命の歯車。
その内の一つを大きく動かしたことを、龍騎士はまだ知らない。

あの龍と契約しろ．6

気まずい。
手汗が吹き出す中、僕はそっと出された紅茶を飲んだ。

「……」

テーブルを挟んだ向かい側には、優雅に紅茶をカップへと入れるマミちゃん。
しかし、無表情に裏打ちされた怒りが、プレッシャーとなって僕にのしかかってくる。

ああ、逃げ出したい。今すぐ変身して鏡の向こうへ逃走したい。
しかし、やったら確実にマスケット銃でバーンだろう。

僕も命は惜しい。

「それで」

マミちゃんは素敵な笑顔を浮かべた。
目がまるで笑ってないけど。

「あなたの言い訳を聞きましょうか？」

◆◆◆

お菓子の魔女を倒した後はいろいろ大変だった。
マミちゃんが喰われかけたことにガチでショックを受けたのか、戦いが終わるなりまどかちゃんとさやかちゃんは、

『う、うっ、マミさぁん……』

『よがっだぁ、ホントによがっだぁ……！』

マミちゃんに抱きついてマジ泣きする始末。
当のマミちゃんは二人をあやすので手一杯だったし、僕は僕で二人に何度も礼を言われて、大分戸惑ってしまった。

大変でなかったのは、せいぜいキュゥべえくらいのものだろう。

『とりあえず、今日は早いところ切り上げようか。魔女もモンスターも倒したし、まどかもさやかも大分精神的に疲労しただろうからね』

キュゥべえマジクール。

だが、やはりこの冷静さが僕は気に入らない。
案外、あのつぶらな瞳の奥にドス黒い本音があったりするのではなかろうか。

『実は僕は地球を狙う悪の秘密組織の一員だったのさ！』みたいな。

「城戸くん、真面目な顔でくだらないこと考えてない？」

マミちゃんは鋭かった。
――まぁとにかく現状を説明すると、グロッキーなまどかちゃんとさやかちゃんをキュゥべえが送り届けに行っているため、部屋は僕とマミちゃんの二人きり。

嗚呼、マミちゃんから放たれる覇王色ばりの威圧感さえなければ、かなり魅力的なシチュエーションだというのに。

「……契約を」

マミちゃんは伏し目がちに言う。

「モンスターとの契約を破棄することは、できないの？」

「……あー、無理だと思う」

ちらりと部屋に合った鏡台――そこに映りこむドラグレッダーを見る。
先ほどまでの荒々しさは息を潜めているが、獣特有の鋭い眼光はそのままだ。

「契約してみてわかったことだけど、モンスターは契約してもまだ人間を食べたがってる。『契約』っていうのは、モンスターを従わせる代わりに、僕がドラグレッダーに餌を与え続けるってことらしい」

「じゃ、じゃあもし、あの龍にモンスターやグリーフシードを食べさせなかったら……」

「たぶん、僕が喰われるんだろーね。契約違反とみなされて」

神崎が言ったのは、多分このことだったのだろう。
力を得る代償として、血に飢えたモンスターの渇きを潤し、死ぬまで戦い続ける。
まったく……今更だけど本当にハイリスクな契約だな。

別に後悔しちゃいないけど。

「――どうして、なの？」

さっき、結界内でした質問を繰り返すマミちゃん。
顔を俯かせているため、表情は伺えなかったが、僅かに肩が震えている。
泣いているとも、怒っているともとれた。

「なんで、城戸くんが“こっち”に来ちゃうの……？」

「なんでって……」

「城戸くんは、戦う理由なんかないでしょう？　魔法少女じゃないし、魔法少女になることも、できないんだよ？」

「まどかちゃんやさやかちゃんだって魔法少女じゃないだろ」

「いつかは……、そうなるかも知れない」

「何だよそれ。魔法少女になるかも知れない二人は巻き込めて、魔法少女になれない僕は巻き込めないってこと？　それはさすがに自分勝手過ぎやしないかい？」

「っ！　そんな意味で言ってるんじゃ……！」

今までの大人びた口調から、一気に声を荒げるマミちゃん。

しかし、僕の言い分には反論の余地がないらしく、再びうなだれてしまう。

「……のに」

「？」

「城戸くんには、“こっち側”に来て欲しくなかったのに……」

「だからさぁ……」

「わかってる。こんなの私のワガママだってことくらい……でも、イヤだったんだよ」

マミちゃんはぎゅっとスカートの端を握り締める。

「私ね。城戸くんが私のこと友達って言ってくれた時、凄く、凄く嬉しかったんだ……。一緒にいたのなんて、もうずっと昔ことなのに……私はもう、昔とはぜんぜん違っちゃってるのに、昔と変わらずに話しかけてくれて。私が魔法少女だって知って、それでもまだ一緒にいようとしてくれて、本当に……本当に嬉しかったの」

途切れ途切れで、要領を得ない話。

それだけに、それが彼女の素直な気持ちだということが伝わってくる。

「でも、ね。だからこそ、城戸くんには関わって欲しくなかったの……。私が、魔法少女である限り、どんなに頑張っても、キミを危険な目に合わせることには変わりないから……」

「……」

聞けば聞くほど、まどかちゃんの観察眼に敬服したくなる。

「あはは……本当、城戸くんの言う通りだよね。私、自分勝手過ぎるよね……。鹿目さんを巻き込んで、美樹さんを巻き込んで……。――なのに、城戸くんだけは、どうしても巻き込めないんだ……」

マミちゃんの肩は震えている。その様子はあまりに儚く、ボロボロで、今にも崩れてしまいそうだった。

「なんで、“こっち側”に来ちゃったの……？」

最初の質問。

取り戻しようがない現実を必死で掴もうと、マミちゃんは問い続ける。

「城戸くんは、日常にいて欲しかったのに……仮面ライダーになんて、ならなくて良かったのに……こんな私のことなんて、放っておいてくれれば良かったのに……！」

「おい」

耐えられず、遂に僕は口を開いた。

「それ、次に言ったら、例えマミちゃんでも許さないからな」

「……っ」

自分で思っていたよりも、よっぽど低い声が出ていた。
マミちゃんの瞳に、怯えの色が混じる。

「放っておいてくれれば良かった？　　ふざけんな。だったらなんで、あんなこと言ったんだよ」

あんな――「助けて欲しいって言ったら、本当に助けてくれる？」

なんて。

「変な気を使わないでくれよ。契約は僕が勝手にやったことだし、首を突っ込むって決めたのも僕が決めたことだ。マミちゃんが引け目を感じるような話じゃない」

そう、結局のところ、僕は“僕の為にマミちゃんを助けただけ”なのだ。
僕の気持ちを曲げないための選択、僕を止めようとしたマミちゃんや蓮花を蔑ろにした、ただのエゴ。

けど、それでも良かった。
身勝手だという自覚はあったけど、やっぱり、理不尽な人が死ぬのなんて見たくない。

それが大事な友達なら、尚更だ。

「……おじさんとおばさん、亡くなったんだよね」

「っ！」

マミちゃんが目を見開く。

「どうして、知って……」

「企業秘密」

まどかちゃんも悪気があって話したわけじゃないが、その辺りの事情は黙っておいた方が無難だろう。

「ドラグレッダーと契約した時、僕はとにかく、マミちゃんに苦しんでて欲しくないって思ったんだ。魔女やモンスターのことにしろ、おじさんとおばさんのことにしろ、ね。
後悔もしてないし、僕が仮面ライダーとして戦い続けることで、マミちゃんが少しでも楽になるなら、それも構わない」

約束したから。
いつでも助けにいく。マミちゃんが呼びさえしてくれれば。
僕を、必要としてくれれば。

だから。

「僕は戦うよ。マミちゃんが苦しまないように、これ以上涙を流さないように」

おもむろに、向かい合ったマミちゃんに手を伸ばした。

「あ……」

「それから……ごめんね、マミちゃん。最初に気付いてあげられなくて」

手入れの行き届いたふわふわの髪を撫でる。マミちゃんは驚きはしたらしかったが、拒絶はしなかった。

「ずっと戦い続けて、苦しかったよね」

「……っ」

「一人ぼっちで、寂しかったよね」

「……ぅ、あ」

「誰かに、助けて欲しかったんだよね」

「うっ、ぐすっ……」

そこまでが、限界だった。

「っ、うわあああん！！」

マミちゃんの瞳から、大粒の涙が零れ落ちていく。恥も外聞もない慟哭は、水晶のように輝くそれは、彼女の奥底に閉じ込められていた本当の心。

大泣きしてる女の子と二人きり――という居心地の悪さを感じながらも、僕はテーブルの反対側に移動する。と、

――どんっ。

「わっ！？」

マミちゃんは何の躊躇もなく、僕に抱きついてきた。
かつてないレベルの動揺が襲いかかってくる。
だが、それも一瞬のこと。

弱々しく僕の服を握るマミちゃんを見て湧き上がるのは、単純な愛おしさだけ。

目の前で泣いているのは、魔法少女ではない、ただの女の子。

僕の友達、巴マミ。

「ひっく、ひっく……城戸、くんっ……！」

「何？」

落ち着かせるように彼女の背中を撫でながら、僕は言う。

「一人は……一人ぼっちは、いや……！」

「うん」

「さ、寂しいの……つらいの……！」

「うん、うん」

「もう、もう一人でなんて、いたくないよ……」

「ああ、わかってるよ」

ずっと、それに堪えてきたんだもんね。

「偉かったよ、マミちゃん」

たった一人で、よく頑張った。

「でもね。これからはみんな一緒にいてくれるよ。まどかちゃんも、さやかちゃんも、僕も」

「えぐっ……城戸くん、い、一緒に、いてくれる……？」

「ああ、勿論」

当たり前のように、僕は答えた。

「いつでも助けに行くよ。マミちゃんが、呼んでくれさえすれば」

「……」

マミちゃんはゆっくり顔を上げた。

涙目で上目づかいの表情に、今までの大人びた印象は欠片もなかった。
庇護欲を刺激する仕草に、僕は不謹慎ながら、やっぱりマミちゃんは可愛いなと思ってしまう。

「……おね、がい……します」

小さく、マミちゃんは唇を動かした。

「私を、助けてください……一緒に、いてください……っ！」

今にして思えば、ここから均衡は崩れ始めていたのかも知れない。

これは、合わせ鏡が生み出す無限の可能性の一つ。
僕、そしてもう一人――鹿目まどかちゃんを軸にする、重なった二つの物語。

◆◆◆

「やれやれ……どうあっても僕と敵対したいようだね。神崎士郎」

どこかの工事現場。
小さな光達が瞬く夜景を一望できるビル。まだ剥き出しのままな鉄骨の先端に、キュゥべえはちょこんと鎮座していた。

「城戸龍二、秋山蓮花、そして暁美ほむら……どこまで彼と通じているかはわからないけれど、警戒するに越したことはない」

そのぬいぐるみのような顔には、相変わらず感情というものは浮かんでいない。
それがかえって不気味だった。

「“あのカード”は切り札に温存しておくとして、ひとまずはこっちか。
ふぅ、まさかこんな辺境の地で、新しい契約方法を見いだすことになるとはね……まぁどう転んでも、ノルマ的に損にはならないからいいけどさ」

長い耳を起用に操って、キュゥべえは“それら”を一つ一つ吟味し、やがてその内の一つを選び取る。

「さて、キミ達はどんな願いをもって、戦いの中に身を投じるのかな？　仮面ライダー君達」

何の感慨もなく呟くキュゥべえ。
その足元には“七つのカードデッキ”が月明かりに輝いていた。

◆◆◆

次回、仮面ライダー龍騎☆マギカ。

「ゆっくり決めればいいよ。一生を賭けた選択になるんなら、尚更さ」

「誰かのためにって、やっぱりいけないことなのかな？」

――「新しい、仮面ライダー？」。

願いを胸に戦え。未来を描くために。

あの龍と契約しろ．６（後書き）

原作三話目終了！

・はい、取り敢えず問題の原作三話目はクリアしました。
……しかし最近気づいたのですが、作者はハッピーエンドは大好きなんですけど、その過程でキャラ達が葛藤するのを見るのは大好きなようなので、まだ完全に安心はできなかったりします（笑）
龍騎達が関わってきたことは、プラスになる面もマイナスになる面もあるわけですからね。

・ＱＢが持つ七つのカードデッキ。ええ、ライダーも全員が味方になるわけではないのですよ。

次回は外伝を一つ挟みまして、オリジナルストーリーに入ります。
ようやく他のライダーが出せそうだ……。

では、また次回！

断章・運命は、変えるものだ

夜。街灯が照らす人気のない通り。
コツコツ、と規則的に響く二人分の足音。
秋山蓮花と暁美ほむらのものだ。

『……』

二人の間に会話らしい会話はなく、特に蓮花は苛立ちを隠そうともせず、足元の小石を力一杯蹴飛ばした。

「――お友達のこと、残念だったわね」

ほむらがぽつりと言う。

「契約を破棄することはできないの？」

「……モンスターとの契約は絶対だ。私もあいつも、既に逃げ道は焼き落とされている」

「そう。――なら、彼の“記憶”はどうなったの？」

蓮花は答えない。
しかしその様子から、ほむらは全てを察する。
次に出てきた言葉には、淡白なほむらにしては珍しい、慈愛に満ちた声だった。

「……ツラいわよね。大切な人が、自分のことを忘れてしまうのは」

「……ああ、そうだな」

蓮花もまた、心の澱みを吐き出すように、重々しく同意する。

「けれど、契約で城戸龍二の記憶が戻らなかったのなら、神崎は本当に彼を仮面ライダーにする気は無かったようね。
貴女のように、契約モンスターが“記憶”を預かっていなかったのだから」

「……ふん。事が済んだら、諸々のことを含めて絶対に一発殴ってやる」

「その時は、是非俺も混ぜて貰いたいな」

突如聞こえた声。
二人が振り向くと、いつの間にかそこには、一人の男が、電柱に寄りかかっていた。

背格好は蓮花よりやや上。セミロングでクセのある髪に、整った顔立ち。
細身の身体にオレンジのジャケットを羽織っている。
――そして、指先で弄ぶのは、１００円玉台のコイン。

「久しぶりだな。秋山」

「手塚……！」

蓮花の無表情は変わらない。だがほんの少しだけ、その固さが緩んだ。

「誰？」

「安心しろほむら。こいつは“神崎側のライダー”だ」

身構えるほむらに、手塚と呼ばれた男は苦笑いしながら手を差し出した。

「キミが暁美ほむらだね。俺は手塚海之。仮面ライダーライアだ」

「……よろしく」

素っ気なく手を握り返すほむら。
フレンドリーとは言い難い態度だったが、手塚は気にしてはいないようだった。

「しかし……ずいぶんと背が縮んだな秋山」

「大きなお世話だ。それより手塚、記憶は？」

「ああ、戻っている。デッキを貰ってすぐ、エビルダイバーと契約できた」

手塚はポケットからピンク色のカードデッキを取り出す。
中央部には、エイに似たエンブレムが刻まれていた。

「神崎から大体の話は聞いている。城戸が契約したようだな」

「ああ、だが記憶は戻っていない。
――手塚、お前も龍二や鹿目まどか達に、真実は話すな」

「わかっている。記憶が無い以上、信用されないだろうからな。それで、他に仲間は？」

「いや、今のところ他に仲間はいない。“神崎側”にあるデッキが6個。“インキュベーター”側にあるデッキが7個という状況だ」

「半数のデッキが向こう側にあるというわけか……」

手塚はおもむろに、指先のコインを弾いた。ほむらは首を傾げたが、蓮花にはわかる。
これは、手塚の占いの手段だ。

「……これは根深い運命だな」

コインの出た目を見つつ、手塚は重い口調で言う。

「魔法少女――そのほぼ全員の運命が、絶望に繋がっている。城戸が変えたという運命も、またいつねじ曲がるかわからないぞ」

「……絶望の運命なんて信じないわ」

ほむらは拳を握り締め、言い放つ。そこには、一介の中学生が持つには強すぎる想いが込められていた。

絶望などさせない。私達が見るのは希望に満ちた未来だ。

「占いなのかなんなのか知らないけど、あなたの予言は、外れるこ

とになるわよ。……ううん、私が必ず外してみせる」

「……」

『いつまで、こんな戦い続けなきゃいけないんだよ……ッ！！　こんなのが運命だなんて、僕は絶対に認めないからな！！』

「……ああ、そうだな」

手塚はなぜか笑みを浮かべ、コインをポケットにしまった。

「運命は、変えるものだ」

運命を変える力を持つ赤き騎士。
彼と同じ光が、ほむらの目にも宿っている。
それだけで手塚は、彼女に協力してやりたいと思うことができた。

「俺も力を貸す。絶対に変えよう。この運命を」

◆◆◆

薄暗い部屋だった。
円形の奇妙な形の機械が立ち並び、その中央部は水面のように揺らいでいる。

部屋にいるのは、中年の男が一人。
短く刈り込んだ髪に、皺が深く刻まれた渋みのある表情。
長いロングコートに覆われた肉体は、服越しにも鍛え抜かれているのがわかる。

「……客人とは珍しいな」

男はコンピューターのキーを叩く手を止め、後ろを振り返る。
目に映るのは、ボロボロのコートを纏う男。神崎士郎だ。

「この空間に来られるということは、キミもただの人間ではないな。
……『仮面ライダー』か？」

「……ある意味では、そうとも言えますね」

答えをはぐらかしつつ、神崎は僅かに頭を下げた。

「お久しぶりです。先生」

「ふむ……久しぶりか。おかしいな、私はキミに会ったことはないのだがね」

「ええ。“今この段階”では、貴方と私に面識はありません」

その言葉に、男は顔をしかめた。

「『本来の歴史』では、今から数年後、俺と貴方は出会うことになる。

渡米していた俺は、貴方の――いや、貴方達の存在を突き止め、接触。

『仮面ライダー』開発のための基盤となるデータと、『あるカード』を貴方から奪うことに成功しました」

神崎はポケットから一枚のカードを見せる。時間を操る力を持つ『ＴＩＭＥ・ＶＥＮＴ』のカードだ。男の顔に初めて驚愕が浮かぶ。

しかし、やがて合点がいったとばかりに、

「成る程、そのカードの力か。……やれやれ。そのカードの力はあまりに強力過ぎるが故に、私が厳重に封印していたのだが……」

「ええ、これを奪えたのは私の運が良かったからに過ぎません」

「ハッハッハ。私もまだまだのようだな。――それで？　私に何の用があって来たのかね？　未来からの旅人よ」

「……ある運命を変えたい」

神崎は力強く答える。

「その運命を変えることは、私自身のケジメである以前に、破滅の未来を救うことにも繋がる。しかし、今の私にそれだけの力はありません」

だから、と神崎は床に手を付く。
最大級の敬意を深々と頭を下げることで示し、神崎は言った。

「力を貸していただきたい。
先生――いえ、『マスター・ユーブロン』」

断章・運命は、変えるものだ（後書き）

はい、今回は新章突入前の掴みみたいなもんでしたが、いかがだったでしょう？

・本編に先駆け、手塚さん登場。龍騎ライダーきっての常識人といっても過言ではないでしょう。

・海外版からのゲストキャラ参戦。
やや反則な気もしますが、まどマギキャラ全員を救うには彼の協力がどうしてもいるんです；
まぁ、彼が誰かわからない人は「なんか謎の新キャラが来た」くらいに思っておいてくれて構いません（笑）
神崎は親戚に引き取られた後アメリカにいた……なんて設定があったので、仮面ライダーの技術は彼から学んだんじゃないかなー、と作者は勝手に思ってます。

新しい、仮面ライダー？・１

【ＳＷＯＲＤ・ＶＥＮＴ】

「せいっ！」

ドラグセイバーを携えた龍騎が宙を舞う。身体を軸に、さながら独楽の如く回転しながら、敵を切り裂いた。
『暗闇の魔女』の使い魔が二つのパーツに分かれ、次々に消滅していく。

「マミちゃん、そっちに三匹行った！」

「オッケイ！」

マミがリボンを解き、拘束魔法で逃げた三体の使い魔を捕縛する。
召喚された巨大なマスケット銃が標的に狙いを定め――

「ティロ・フィナーレ！」

黄色い閃光が、残る使い魔を射抜き、跡形もなく消し飛ばす。それが最後だったのか、周囲を覆っていた結界は消え、夜の静寂が戻ってきた。

「ふい～、疲れた疲れた。お疲れ様。マミちゃん」

「うんっ！　城戸くんもお疲れ様！」

龍騎とマミは、爽やかにパシッとハイタッチを決めた。
変身を解除した二人に、まどかとさやかが駆け寄ってくる。

「ふわぁ……やっぱマミさんも城戸さんもカッコイイっす！」

「はっはっは。もっと褒めたまえさやかちゃん」

「マミさん、城戸さん、怪我はなかったですか？」

「大丈夫よ。もう、鹿目さんったらこの前のこと引きずりすぎ」

まどかを安心させるように、マミはふわりと笑った。

「けど、城戸さんもマミさんも息ピッタリでしたね。さすが幼なじみ！」

「まあね。マミちゃんの援護射撃が正確だったおかげで、僕も心おきなく戦えたし」

そうさやかに言う龍二だったが、マミは首を横に振った。

「ううん、城戸くんが使い魔達を引きつけてくれてたからこその精密射撃だもの。メインの活躍は城戸くんだよ」

――二人の作戦。
群がった敵に対し、まず龍騎が奇襲をかけ、敵の注意を彼に向けさせる。
一方でマミは精密射撃による龍騎の援護。龍騎が敵のほとんどを引きつけている為、命中率も格段にアップする利点があり、龍騎が取りこぼした敵も、拘束魔法を持つマミならば難なく対処できる。

龍二とマミ、お互いがお互いの力を理解し合っているからこその芸当だ。

「いやいや、後ろにマミちゃんがいてくれるからこそ、僕も安心して戦えるんだよ。――あはは、情けないね。こっちが守ってるつもりなのに」

控え目な龍二に、マミは慌てた様子で、

「そ、そんなの気にしないでいいよ！　私だって守られてばっかりは嫌だし……それに、頼ってくれるのだって、嬉しいし……」

ごにょごにょと言い澱むマミ。龍二に助けられて以来、マミは時折、頼りになる女性としての見栄を外すことが多くなってきていた。年頃の女の子らしくなった、と言えるかもしれない。

さやかはそんなマミの態度に目ざとく反応し、

「おーおー、なにやらノロケ話の匂いがしますなぁ」

不意をつかれ、マミは一気に顔を赤らめる。

「〜〜っ！　もう、美樹さんからかわないでっ！」

「わはは、怒った怒った〜！」と逃げ回るさやかと、それを追いかけるマミ。

龍二とまどかは、それを微笑ましそうに見つめていた。

（マミさん、楽しそうですね）

（そうだね。いい傾向だ）

普通なら子供っぽいと見られるだろうが、マミにとってこれは前進だと思う。
今までは本当に、こんなやり取りをする余裕もなかったのだから。

「ほらほら、マミちゃんもさやかちゃんもそこまで。えっと――」

敵を倒したと思しき場所を顧みる龍二。
だがそこには、戦闘の痕跡さえも残っていなかった。
まどかがぽつりと呟く。

「グリーフシード、落とさなかったね」

「さっきのは魔女から分裂した使い魔でしかないからね。グリーフシードは持ってないよ」

まどかの肩に乗ったキュゥべえが淡々と言う。
護身用バットを担ぐさやかも不満そうだ。

「ここんとこハズレばっかじゃない？」

「使い魔だって成長すれば、分裂元の魔女と同じになっちゃうの。放っておけないのよ？」

マミがそう窘める様子を見ながら、龍二はぐいっと伸びをして、

「さて、そろそろ帰ろっか。暗くなってきたしさ」

◆◆◆

龍二が魔女退治に加わるようになり、数日が経った。
彼の真意を理解し、共に戦うことを選んだマミが、改めて彼に協力を頼み込んだからである。

前回で命の危険に晒されたマミだったが、それが尾を引くようなことはならず、魔法のキレは微塵も揺らいではいない。
――むしろあの出来事が尾を引いているのは、まどかとさやかの方だろう。

『マミさん、あの……』

まどかがそう切り出したのは、シャルロッテを倒した翌日のことだ。
その話をされることを予想していたのか、マミは笑って頷いた。

『わかってる。もう一度、魔法少女になるかどうか考えたいんでしょう？』

まどかの方は一際ばつが悪そうに肩を落とした。

『……っ、ごめんなさい、マミさん……。願いが決まったなんて言っておいて、こんな……』

『いいのよ。あんなところ見させられたら、気持ちが揺らいでも仕方ないわ』

まどかは言った。
人の役に立てることが、自分の願いだと。
もちろん今でも、あの時の気持ちに嘘は無かった。

――だが、そんな生半可な覚悟で生きていられるほど、魔法少女の世界は甘くはない。
さやかも口にこそ出さないが、同じ心境だろう。

『それに、私も本当のところは理解してなかったのかも知れないわ。……魔法少女になるのが、魔女と戦うことが、どれだけ恐ろしいことなのか』

今でも思い出せる。
自分の命を刈り取ろうと迫り来る牙。
あの時城戸くんが来なければどうなっていたか――考えるだけで震えが止まらない。

『だから、鹿目さん。前にも言ったことだけれど、念を押しておくわね――魔法少女になりたくないと思ったなら、すぐにそう言って』

『……マミさん』

『誤解しないでね。城戸くんが一緒にいてくれるから、あなた達を突き放そうなんて思っているわけじゃないわ』

今でも、二人と一緒に戦いたいと思ってる自分がいるのは、マミ自身もわかっていた。

『ただね。魔女との戦いの中で“誰かが助けにきてくれるなんて都合のいい奇跡”は、そうそう起こらないってことだけは、覚えておいて欲しいの』

『……』

『誰だって、首を食べられれば死んじゃうのよ』

そう、ここは漫画やアニメのようなフィクションではない。
リアルな現実だ。
死んだ人間は生き返らない。勧善懲悪など夢のまた夢。

『美樹さんにも言っておくつもりだけれど……もう一度、よく考えてみて。あなたの願いが、本当に命を賭けるに足る願いなのかどうか』

『……はい』

神妙にまどかは頷く。落ち着きはしたようだが、まだ顔が暗い。

（鹿目さんはいい子だからなぁ……）

やはり、一度決めた願いを先延ばしにしてしまったことに、罪悪感を覚えているのだろう。

重い空気を吹き飛ばすように、マミは快活に笑った。

『ほらほら、しょんぼりしないの。それに、魔法少女になったってならなくたって、私とあなた達は友達でしょ？』

突然手を握られ、まどかの表情は悲哀から驚愕に変わる。

『だから今まで通り、普通に接してきてくれると嬉しいな♪』

マミの笑みは決して優雅なものではなかった。
今まで纏ってきた大人っぽさは微塵もなく、子どものように無邪気で、無条件の安心を与えてくれる温かい笑顔。

『――はい。私なんかで、良かったら』

だから――まどかは自然とそう返せていた。

シャルロッテとの戦い以降、マミは少し変わった。
ずっと我慢してきたものが消えたような、憑き物が落ちたような晴れやかさを感じる。

たぶん、そうなった理由は――

（城戸さん、なんだろうなぁ……）

何気なく、隣を歩く龍二を見る。
マミと柔らかな物腰で喋る姿に、戦っている時の覇気は殆ど見られない。
けれど、この気の置けない態度も、龍二の一面なのだと、まどかは知っていた。

魔女もモンスターも寄せ付けない外側の強さと、孤独に震えるマミ

の心を癒やした内側の強さ。

（……かっこいいなぁ）

マミとは違った意味で尊敬してしまう。
それに比べて私は――

「まどかちゃん？」

はっと思考の海から引き戻される。
龍二が、立ち止まっていたまどかの顔を覗き込んでいた。

「どうかした？」

「あ、いえ。気にしないでください。何でもないですから……」

やや力無い笑顔ではあったが、龍二は「ふうん？」と首を傾げただけで深く言及はしてこない。

胸を撫で下ろすまどかだったが、マミはその仕草を見逃さない。

「鹿目さん、焦っちゃダメ」

「！！」

「言ったでしょ？　ゆっくり、ちゃんと考えて決めなさい」

「……はい」

自己嫌悪よりも、羞恥が先立ってしまう。

……私ってそんなに表情に出やすいのかな。

「美樹さんも同じよ。願いを叶えた後は、命懸けの世界に身を置くことになるんだから」

「はい。……あ、マミさん」

さやかがふとマミに尋ねる。――願いが叶うと聞いた時、一番最初に思いついた望み。

「願い事って、自分の為の事柄じゃないと駄目なのかな？」

「誰かの、為？」

さやかも含めた全員が立ち止まり、彼女の声に耳を傾ける。

「例えばの話なんだけどさ。あたしなんかよりずっと困ってる人がいて、その人のために願い事する……とか、できるのかなって……」

「さやかちゃん、それって上条くんのこと？」

（上条くん？）

知らぬ名前に、龍二とマミは心の中で疑問符を浮かべる。

――ただ、「たっ、たとえ話だって！」と焦ったように言うさやかの様子から、その人物が彼女にとってどんな人物で、さやかが考えた願いの内容も、多少は予想がついたのだが。

いつもの笑っているような表情のまま、キュゥべえが頷いた。

「うん、可能だよ。前例がないわけじゃないし」

「でも、あまり感心できた話じゃないわね」

淡々と答えるキュゥべえに対し、マミは否定的だった。

他人の為。一見してそれは道徳的な願いと言えるだろう。

しかし――

「美樹さん、あなたはその人の夢を叶えたいの？　それとも夢を叶えた恩人になりたいの？」

「！」

マミの問いに、さやかは固まってしまった。わかったからだ。マミが何を言いたいのか。

「他人の願いを叶えるのなら、なおのこと自分の望みをはっきりさせておくべきだわ。同じようなことでも全然違うことよ、それ」

利他的であることと、利己的であることは、本当に薄い仕切りで分けられている。この二つは表裏一体だ。
誰かのためを思ってのことだったとしても、いつ自分勝手な理屈を振り翳してもおかしくはない。

それが人間という生き物だ。

「……きつい言い方でごめんね。だけど、そこを履き違えたまま進んだら、きっとあなた後悔すると思うから」

勘違いしてはならない一線。
さやかを気遣っているのがわかるからこその、厳しい言葉。

（マミちゃん本人は気を張ってるだけとか言ってたけど……）

少なくとも自分で言うよりは、マミちゃんはしっかり者だ。
龍二はそう思った。
他人を導くというのは、単に気を張るだけでできるようなことじゃない。

「……うん、そうだね」

さやかは静かに呟く。

「あたしの考えが甘かった。ごめん！」

一件落着、と全員が顔を見合わせた。

「難しいことよね。焦って決めるべきじゃないわ」

「そうそう。ゆっくり決めればいいよ。一生を賭けた選択になるんなら、尚更さ」

「僕としては、早ければ早いほどいいんだけどな」

「だめ！　女の子を急かす男は嫌われるぞ？」

マミがキュゥべえを窘めて歩き出し、まどかとさやかがそれに続く。必然的に、龍二とキュゥべえが並んで歩く形になった。

「やれやれ、ライダーのこともあるけど、ここに来てから意外なことだらけだなぁ」

「意外なこと？」

キュゥべえが漏らした言葉に龍二が反応する。

「何が意外なんだよキュゥべえ。ライダーよりも意外なことなんてあるのか？」

「いや、ただの経験則だよ、城戸龍二。たいていの子は２つ返事で魔法少女になってくれるのに、まどかやさやかは随分と時間をかけるなぁ……と思ってね」

「何だ、そんなことか。人間なんだから、悩むことなんか当たり前だろう」

願いといっても、命賭けのリスクを背負うことになる。
マミのように絶望の淵から魔法少女になるならともかく、何不自由なく生きてきた二人からすれば、命と釣り合う願いなどそうは見つからないだろう。

「ふーん。そんなものなのかい？」

「そんなもんだ」

「ふむ、まだるっこしいね人間は。わけがわからないよ」

「まだるっこしくていいんだよ。まだるっこしいってのは悩むってことだ。それがどんなに不条理な問題だろうが、悩んで悩んで悩み抜いて答えを見つける。それが人間だ」

「まるでそんな経験をいくつもしてきたような口振りだね」

「は。買い被りだよ。マミちゃんの時はともかく、一介の高校生にそこまで真剣になる悩みなんて……。……？」

『なんでだよ……僕が止めろって言う時は誰も止めないクセに……なんで僕が闘おうとすると誰も闘わないんだよ！！』

『お前は、そうやって何でも飲み込もうとするから迷うんだ！！』

『悪いけど遠慮しとくわ。一つは、今そういう気分じゃないってのと、あと一つ。……何があったのか知らないけど、今のお前、見てらんないよ』

『龍二くん！　私……そんな風に助けてもらっても全然嬉しくないよ！』

「？　どうかしたのかい？」

「……ああ、いや、なんでもない」

ただだ。
ドラグレッダーと契約したあたりから、時たまフラッシュバックする映像。
覚えのない、しかしどこか懐かしさを覚える記憶。

「本当になんなんだよ……」

解明不可能な事象。
混乱する思考を、髪をむちゃくちゃに掻くことで発散しつつ、龍二

は再び歩き出した。

――キィィィンッ！！

「！！」

甲高い金切り音。
モンスター出現を告げるミラーノイズ。

（どこだ？　どこから聞こえてくる？）

集中し、ノイズの発生源を辿る。目に止まったのは、公園に水分を散布する噴水。
中心から噴き上がり、アーチを描く水の表面――そこには巨大な影が映し出されていた。

影はハサミのような腕をしゃきんと鳴らす。その先には、捕食者に気付かずにいるまどかの姿。

「まどかちゃん危ないっ！！」

「きゃっ！？」

ほとんど背中から押し倒すような形で、龍二はまどかを強引に伏せさせる。
そのすぐ上を、鏡から飛び出してきたハサミが掠めた。

「わぁっ！？　　な、なんかハサミが水の中から！！」

「美樹さん下がって！」

マミはすぐ臨戦態勢に入る。影はまだ消えておらず、唸り声をあげながらこちらを睨み付けていた。

「まどかちゃん大丈夫？」

「痛たた……は、はい。大丈夫です。……城戸さん、さっきのは……」

「ああ、モンスターだ。けど……」

まどかを片手で庇うようにしながら、城戸は思考を巡らせる。

（どういうことだ。ミラーモンスターは魔女が結界を貼らない限り、現実世界には干渉できないんじゃなかったのか……！？）

符合しない事実に困惑するが、やるべきことは変わらない。
龍二がデッキを、マミがソウルジェムを取り出す――その時だった。

暗闇に響く足音。
噴水を中心にクロスする道の先から、何者かが近付いてくる。
全員がそちらに目を向けると、月明かりが乱入者の姿を照らし出した。

ハサミのように交差した二枚刃を持つ手甲。
その身に纏う硬質な鎧は、オレンジと金色の中間色といったカラーリング。
頭部を覆う仮面は、蟹を彷彿とさせるデザインが施されており、ベルトに装填されたデッキにも、同モチーフのエンブレムが刻まれていた。

「あれは……！」

「新しい、仮面ライダー？」

龍二とマミが呆然としながら、謎の仮面ライダーを凝視する。
それが過ちだと気が付くのに、そう時間はかからなかった。

「……ハァッ！！」

乱入者――仮面ライダーシザースは、手甲の二枚刃を振り上げ、隙だらけの獲物に襲いかかっていった。

新しい、仮面ライダー？・１（後書き）

遂に蟹さん登場！

・またしても龍騎ライダーの設定を都合よく捻じ曲げました；
作者はリュウガがミラーワールドで活動時間無限なように、他のライダーは逆に現実世界では活動時間無限なのだと解釈しています。
多分現実で戦わなかったのは、人に見つかると面倒だったのと、モンスター達の行動時間が限られてしまうからでしょう。
ちなみに次回で説明はしますが、この作品でモンスターは現実世界に来れませんが、契約モンスターだと別です（時間制限はありますが）。ＡＤＶＥＮＴのカードがゲートになると思っておいてください。

・カルト的人気を誇るシザース……生存するのか、はたまたマミられるのか（笑）
今後をお楽しみに！

・よくよく考えれば、今回の会話がさやかの死亡フラグの発端だったんですよね……さて、どうやって救済してやるべきなのか（オイ

では（＾Ｏ＾）

新しい、仮面ライダー？・２

「うわっ！？」

シザースバイザーの刃が狙ったのは龍二だった。慌てて龍二はまどか更に後退させ、ギリギリで攻撃をかわしていく。

「龍二くん！！」

状況はまるで呑み込めないけど、とにかく今は龍二くんを助けないと！

マミのソウルジェムに光が灯るが――

「待った！　マミちゃんは変身するな！　僕一人でなんとかなる！」

「えっ！？　　でも！」

「さっきの戦いで結構魔力使ってただろ！　　グリーフシードも手に入んなかったし、それなら僕が戦った方がいい！」

確かに、マミのソウルジェムの穢れはそれなりに進行している。相手は未知の敵。魔力が回復していない状態で戦うのは危険だ。

それでもマミは納得できないのか、

「キュゥべえ！　グリーフシードのストックってまだあったっけ！？」

「あるにはあったけど、僕が預かってた分は、もう随分前に使い切ってしまったじゃないか。
家に置いてある分にしても、キミが僕に『預ける』って言わなかったから持ってきてないし」

「ドジっ子か私は――――！！」

「マ、マミさん落ち着いて！」

まどかとさやかの宥めも、自分のおっちょこちょい振りに頭を抱えるマミには届かなかった。
最近慌ただしかったとはいえ、非常用のグリーフシードをキュゥべえに預け忘れるなんてどうかしている。

騒がしい外野を捨て置いて、二名の戦いは続く。
龍二はシザースの攻撃を回避しながら、噴水の水面に向かってカードデッキを突き出した。
鏡面に映る自身の虚像に、Ｖバックルが装着される。

「変身！！」

右手を左側に伸ばすポーズを取り、龍二はデッキをバックルに装填。
灰色の影がオーバーラップし、仮面ライダー龍騎への変身が完了する。

「っしゃあ！！」

いつもの掛け声と共に、龍騎は戦いへと赴く。

とはいえ、今回の相手は魔女ではなく人間。迂闊に攻撃もできない。

（ならひとまずは……）

思考を纏め、デッキからカードを一枚引き抜く。

【ＧＵＡＲＤ．ＶＥＮＴ】

ドラグレッダーの固い外皮を模した盾『ドラグシールド』を前方に構え、シザースバイザーを受け止める。
火花散る互いの武器を境目に、二人のライダーは対峙した。

「おい、アンタ仮面ライダーだろ！　なんで僕達を襲うんだ！？」

「……」

シザースは無言のままカードを一枚引き抜き、バイザーに装填する。

【ＡＤＶＥＮＴ】

――グルォォォッ！

「何っ！？」

噴水の中――否、ミラーワールドから、先ほどまどかを狙っていた影が飛び出してきた。
契約主と同じ、オレンジの外皮と、両手に鋭いハサミを持つ蟹型モンスター『ボルキャンサー』が、実体を持って龍騎に襲いかかる。

二枚ある盾を両方使って、ボルキャンサーとシザースの攻撃を防ぐ――が、二対一、圧倒的に不利だ。
鋏がしゃきんと鳴り、龍騎の焦りを誘う。

（まただ。あのモンスター、現実世界で活動してる）

モンスターは魔女の結界を介さなければ、現実世界に干渉できない。
でなければ、なにかしらの要因が働いていると考えるのが妥当。
ボルキャンサーと、野良モンスターとの違い。

（……ひょっとして、ライダーと契約したら、モンスターはミラーワールドの外に出られるのか？）

ならば。
龍騎がデッキから引き抜いたのは、さっきのシザースのように、契約モンスターの描かれたカード。
素早い動作で、ドラグバイザーにベントイン。

【ＡＤＶＥＮＴ】

――ガァァァァァッ！！

噴水から水柱が上がる。
主の呼びかけに応え、ドラグレッダーが長い体躯をしならせ、ボルキャンサーを弾き飛ばした。
ボルキャンサーは呻きながら数歩後退し、シザースの後ろに控える。

沈黙。

互いの契約モンスターを従え、龍騎とシザースが対峙する。
ドラグシールドをいつでも構えるように留意しつつ、龍騎はシザースを睨み付けた。

「お前、なんなんだ？」

「……」

再度の質問。

「なんで僕と戦う？」

「……死にたくなければ」

仮面の下で、初めて声が発せられる。
しかしそれは、好意的とは程遠い口調だった。

「死にたくなければ、黙って戦うことですね」

【ＳＴＲＩＫＥ．ＶＥＮＴ】

電子音と共に、シザースの右手へと縦型のハサミが付いた武器、シザースペンチが装着される。

「！！」

来るか、とドラグシールドを攻撃軌道上に置く。

【ＮＡＳＴＹ．ＶＥＮＴ】

――キィィィィッ！！

「うわっ！？」

「……っ！」

「な、なにこれ……！？」

「耳、いたい……」

「うるさっ……！」

甲高く、凄まじい不快指数を持つ音に、その場にいた全員が耳を塞いだ。
音源である蝙蝠――ダークウィングが飛来し、ノイズで周囲を攪乱させていく。

「ハァッ！」

夜の暗闇に紛れ、仮面ライダーナイトのウィングランサーがシザースを捉える。

「蓮花！？」

「っく！？」

シザースペンチとウィングランサーの間に火花が散るが、互いにダメージはない。距離を取り、相手の交代と言わんばかりに、ナイトがシザースに槍の切っ先を突き付けた。

「……邪魔が入りましたか」

そう呟き、シザースとボルキャンサーは噴水を入り口にミラーワールドへと飛び込んでいった。

「あっ、待て！」

「待つのはお前だ」

慌てて追いかけようとする龍騎の腕を、ナイトが強引に掴む。

「今から行っても追いつけない。それに、出口で待ち伏せされる可能性もある」

「……」

ごもっとも。

龍騎が諦めたのを確認し、ナイトは手を放した。

「蓮花、あいつも仮面ライダーなんだよな？」

「ああ、仮面ライダーシザースだ」

「シザース？」

怪訝そうにする龍騎。ナイトは相変わらずつっけんどんな態度で、

「お前はヤツに関わるな。シザースは私が始末をつける」

「始末をつけるって……おい、まさかあいつと戦うってことか！？」

ナイトは何を今更、と言う風に溜め息をついた。

「仮面ライダーは元来そういうものだ。お互いの目的が反発し合うのなら、そこにあるのは戦いしかない」

「ちょっと待てよ！　相手はモンスターと違う、生身の人間なんだぞ！？　それに、ちゃんと説得すれば……」

「甘いな。第一、ヤツは今もお前を全力で潰そうとしていただろう。説得の余地があるとは思えないが」

ぐっと言葉に詰まる龍騎。

ナイトは、その反応を見越していたかのように、さっさと背を向けてしまう。

「お前は大人しく、魔女とモンスターの相手だけしていろ。そんな生ぬるい考え方なら、足手まといになるだけだ」

「――待って、秋山蓮花」

立ち去ろうとするナイトを引き止めたのは、意外にもマミだった。同じライダーでも、龍騎に向けられるものとは違う――警戒心に満ちた視線。

「あなた、シザースを倒すつもりなのよね？」

「さっき言った通りだ」

「……どういうこと？　城戸くんみたいに偶然ライダーになった人ならともかく、あなた達ライダーは、みんな暁美ほむらと手を組んでるんじゃないの？」

その時龍騎は、ナイトが僅かながら失笑したのに気付いた。

「違うな。検討外れもいいところだぞ、巴マミ。まぁ、私以外に仮面ライダーを知らなかったのだから、そう誤解しても仕方ないだろうが……」

「……あなた以外の、仮面ライダー？」

「そう、仮面ライダーは全部で１３人。それぞれが、お前達魔法少女と同じく、自らの願いの為に動いている」

１３人。
龍騎、ナイト、シザースを除いても、まだ十人、まだ姿さえも知らない鏡の戦士達がいる。
その事実に驚きながらも、龍騎が問う。

「願いって、どういうことだよ。仮面ライダーにも、何か願いを叶えられる力があるってことか？」

「さあな。そこまで説明してやる義理はない」

「……おい、秘密主義も大概にしてくれ」

ここまで思わせぶりなことを言っておいてそれはないだろう。
さすがの龍騎も額に青筋が浮かぶ。

だからなのか――龍騎は気付かなかった。ナイトがほんの一瞬だけ、まどかの肩に乗るキュゥべえに、突き刺すような視線を向けていたことに。

「……とにかく、お前達はシザースから手を引け。そこの魔法少女も、偶然拾った命を無駄にしないことだな」

マミへついでのように言い残し、ナイトは今度こそ夜の帳の中に消えていった。

（……一体、何が起ころうとしてるんだ？）

新たな仮面ライダー、シザース。
この戦いで、彼らは更に思い知ることになる。
仮面ライダー、そして魔法少女の立つ世界が、どれほど救いのないものなのかを。

新しい、仮面ライダー？・２（後書き）

蟹さん大活躍……とまではいかなかったかもですが、なかなか暴れさせることが出来たので満足です。今回書くにあたって龍騎を見直したんですが、蟹刑事の変身ポーズはやはりカッコいい。

次回はとある病院へ。ようやくさやかにスポットが浴びせられそうです（汗）

では（＾Ｏ＾）

どうでもいい近況

化物語最新刊、囮物語読了。……はい、戯言シリーズ以来、すっかり忘れてましたよ。西尾先生は萌えキャラ殺しだということを。

新しい、仮面ライダー？・3

「よーう、三人ともご機嫌よう」

翌日。
見滝原中学の校門前にスクーターを止め、まどかちゃん、さやかちゃん、マミちゃんと合流。

……遠目から見るとすげえ見栄えするな。桃、青、黄の信号機ヘアカラー。

「城戸さん、こんにちは」

「どもどもー」

「こんにちは、城戸くん。いつもごめんね。見滝原中まで来てもらって」

「いーよいーよ。見滝原と城南って、終礼ほとんど同じ時間だし、それならスクーターがある僕の方が来るのは当然だろ？」

見滝原中は進学校な為、そこまで特筆すべき点のない城南高校とは、授業時間にそれほど差はなかったりする。
その点では、待ち合わせ時間的には便利なのだ。

「よし、じゃあ今日も元気にモンスター&魔女退治と行きますか！」

「あ、城戸くん。それなんだけど」

おおう、やるなマミちゃん。
やる気満々な僕の出鼻を見事に挫くとは。
いや、別にいいんだけどさ。

「美樹さんが行きたいところがあるみたいなの。ちょっと寄り道してもいいかしら？」

「行きたいとこ？　魔女とモンスター探しよりも先に？」

「ごめんなさい城戸さん。先に言っとけばよかったんですけど」

さやかが申し訳なさそうに言う。

「いや、別に僕はぜんぜん構わないけど……」

魔女とモンスターよりも先にってのが疑問だ。
用事があるならあるで「今日は用事があるんで一緒に行けません」
って言ってくれればそれで済む。

わざわざ僕ら三人を引き連れて、魔女&モンスター探しの前にプログラムを組むのは、さやかちゃん的にも煩わしいし回りくどいんじゃなかろうか。

僕の考えたことを予想していたのか、マミちゃんが口を開いた。

「美樹さんだけじゃなくて、私達としても行っておかなきゃいけない所なのよ。
城戸くん、この前の病院覚えてる？」

「ああ、覚えてるよ。けど、あそこにいた魔女とモンスターは倒しただろ？」

「いや、そう楽観視もできないんだよ。城戸龍二」

まどかの肩にいつの間にか乗っていたキュゥべえが、長い尻尾を揺らした。

「一度結界ができた場所にはその力が残留して、他の魔女を呼び寄せ易くなるんだ。絶望の力の吹き溜まり、とでも言えばいいのかな？　もちろん結界が貼られれば、それに伴ってモンスターも出現する」

「倒した魔女の力は数日かそこらで消えるけど、それまではあの病

院も警戒しておかなきゃね」

「成る程」

言われてみれば、ここ数日の魔女&モンスター捜索コースに、あの病院は含まれていた。

……なんやかんやでマミちゃんは一流だな。戦いから魔女の事後処理まで、いろんなことに手慣れている。

「了解。それじゃあまずは、見滝原総合病院ってことで」

おー。となんだか緊張感のない掛け声がシンクロする。
今日も今日とて、見滝原の平和維持活動が始まるのだった。

◆◆◆

（なんで神様は、人間に意地悪ばっかりするんだろ）

彼を見るにつけ、さやかはそう思う。

彼は、不幸になるべき人ではなかった。

懸命に努力して、夢を追い続け、たくさんの人達を魅了してきた姿は、本当に輝いていた。
かく言うさやかも、彼を心から慕う人間の一人である。

だが、運命の巡り合わせは彼を絶望の底に叩き落とした。

理不尽に、不条理に、彼の生きる糧を奪い去っていった。
あいつは、何も悪いことをしていないのに。
その瞳の先には、輝く未来が広がっていたのに。

（幸せにならなきゃいけないヤツを、不幸にすんなっての）

もし神と会う機会があるのなら、絶対にタコ殴りにしてやる。
益体のない決意を固めているうちに、目当ての病室が見えてきた。

もう何度となく通った部屋――大切な幼なじみを閉じ込める、小さな鳥籠。

「おや、さやかちゃん。また来たのか」

「あ。こんにちは、解谷先生」

病室のドアから出てきた２０代後半ほどの男性医師。
解谷蛍（かいたに・けい）。これから会う幼なじみの主治医で、さやかとも顔見知りの先生だ。
爽やか系のルックスと柔らかな物腰、加えて腕も確かというパーフェクトなお医者様。

さやかがぺこりと頭を下げると、解谷は端正な顔立ちを緩めて笑う。

「いやいや、恭介くんが羨ましい限りだね。こんな可愛い子に何度もお見舞いに来て貰えるとは」

「あはは。解谷先生ったらまたご冗談を～。褒めても何も出ないっすよ」

変に砕けたやり取りのあと、解谷は一瞬、視線を病室のドアに移して、

「幼なじみのキミには今更言うまでもないことだとは思うが、恭介くんとしっかり接してあげてくれ。彼の場合、せめて心の怪我だけでも治してあげたいんだ」

「……はい」

さやかが神妙に頷いたのを見て、解谷は回廊の奥へと姿を消していく。

ふうっと息を吐いて、さやかはそっと病室のドアを開けた。

――窓際、日の光が燦々と差し込むベッドが、彼の定位置。
否、定位置とならざるを得ない。
彼は自分の力だけでは、あのベッドの上から動くことさえできないのだから。

「恭介」

呼び掛けると、彼はこちらを振り向いた。儚げな瞳が、さやかをまっすぐに見据える。

「やあ、さやか。こんにちは」

彼――上条恭介は、ゆったりと微笑んだ。

◆◆◆

「――それで一命は取り留めたらしいんですけど、その事故で上条くん、音楽家としての道を完全に絶たれちゃったって……私もさやかちゃん伝てに聞いただけですから、そんなに詳しくはないんですけど」

「ふーん……」

別の場面では非常にシリアスなシーンが続いていると予想される中、僕、マミちゃん、まどかちゃん、キュゥべえの三人＋一匹は、病院一階のホールのソファに腰掛けていた。

一応敵出現に気は払っているが、今のところその兆候はない。ここに残留している力もキュゥべえ曰わく「これなら1日も経たない内に消えるよ」とのことだった。

「夢を失った幼なじみ、か」

「美樹さんが昨日、あんな質問をしたのは、その上条くんの身体を治してあげたかったからだったのね……」

ブルーな話に、僕もマミちゃんも表情を曇らせた。話してくれたまどかちゃんも、である。

――時間を持て余した僕は、いい機会なので、さやかちゃんが今お見舞いに行っている『上条くん』とやらについて、まどかちゃんに尋ねていた。

まどかちゃん曰わく、その上条くんというのはさやかちゃんの幼なじみで、将来を嘱望されたヴァイオリニスト“だった”そうだ。

過去形なのは、既にその道が絶たれているから。

とある事故に巻き込まれた彼は、命は助かったものの、身体にかなりの後遺症を残してしまった。
ヴァイオリニストからすれば生命線とも言うべき、腕が特に酷い状態らしい。

幼馴染であるさやかちゃんもまた、頻繁に病院に通って上条くんを元気付けているらしいのだが、事態の根本的解決には至っておらず、自分の無力さに嫌気がさしている――という悪循環が続いているのが現状。

「城戸さん、マミさん、キュゥべえ」

一通りのことを話し終えて、まどかちゃんは問う。

「誰かのためにって、やっぱりいけないことなのかな？」

「……どうなのかしらね」

マミちゃんは答えを濁す。それはそうだろう。まどかちゃんの質問は、いくら考えても絶対的な答えが出ないタイプの質問だ。

「ただ、私が言えるのは昨日と同じよ。誰かの為に生きることを目的にするのか、その先にある見返りを目的にするのか。それさえハッキリさせていれば、あとはその人個人の問題だと思うわ」

「僕は、願い事に僕個人の見解を挟まないようにしてるからね。何とも言えないかな」

当たり障りのない答えを返すキュゥべえから、まどかちゃんは僕に視線を移した。

「城戸さんは、どう思いますか？」

「別に悪い事とは思わないよ。自分を捨てて誰かのために何かをできる人は、凄いと思う」

僕なんかは結局、自分の為に誰かを助けているだけだから、そういう人に憧れることもある。

「けどね。昔会った人に言われたんだけどさ。誰かの為に何かをしたつもりでも、“たまたま”それが裏目に出ちゃうこともあるんだよ。誰かの為に何かをする時は、その“たまたま”があることを、忘れないようにしなきゃいけないんだって」

「裏目に……」

「人間は誰かの為だけに“だけ”じゃダメなんだよ。誰かの為に生きていても、たまたまがあるんだったらいつか綻びが出る。だったら、自分のこともちゃんと考えないと」

清濁を飲み込みながら生きていく。人間っていうのはそういうことなんじゃないだろうか。
僕の口からは、淀みなく言葉があふれてくる。
物事の是非なんて、考えたこともなかったのに。

――ずっと前に、同じことで苦悩していたような気分になる。

「まどかちゃんもさ、あんまり何が正しいとか考えない方がいいよ。世の中は正しいかどうかじゃない。“自分の信じるもの”さえあればいいんだ。ここにね」

自分の胸元を指す僕。

「私の、信じるもの……」

「そう。わからないならゆっくり考えるんだよ？　キミにとっても、さやかちゃんにとっても大切なことだ。それまでは――」

――キィィィィンッ！

ミラーノイズ。
それと同時に、マミちゃんのポケットから、ソウルジェムの光が漏れる。

「――あいつらのことは、僕達で何とかするからさ。行こう！　マミちゃん！」

「ええ！　キュゥべえ、鹿目さんについててあげて。何かあったらすぐ連絡してね！」

「うん。了解したよ」

二人を残し、僕らは病院の外へ出る。気配はそう遠くない。すぐに着けるだろう。
走りながら、マミちゃんは可笑しそうに笑っていた。

「ふふっ、“自分の信じるもの”か……カッコいいね。城戸くんは」

「むっ、嫌味かね巴くん？」

「褒めてるのよ。さっきの質問は、私じゃ上手く伝えられないことだったし。やっぱり凄いよ、城戸くんは」

「……マミちゃん、僕を買い被るのは悪いクセだぜ？」

「えっ？」

自慢じゃないが、僕はただのバカだ。
さっきの言葉だって、綺麗事で片付けられればそれまで。

「だから僕よりも、キミがまどかちゃん達を引っ張らなきゃいけないんだよ？　僕はあくまでも仮面ライダーなんだから、魔法少女のことはマミちゃんが教えてあげなきゃ」

「……うん」

マミちゃんはパンッと頬を張った。

「ごめん。またこの前みたいに気を抜くところだった」

「いいさ、戦いの時に気を引き締めればいいんだから。怪我しちゃダメだよ、先輩魔法少女さん」

「うん、そっちこそね、新米ライダーくん！」

気合い十分に、また戦いが始まる。

――が、そうやって構えていても、予定外の事態が起こるのが、世の常だということを、僕らは忘れていた。

◆◆◆

「……」

病院から飛び出す龍二とマミを、入り口外のガラスに背を預けながら見つめる男。

黒いロングコートにネクタイ。年齢は若く、引き締まった表情が実直な印象を与えている。

男はしばらく二人の消えた方を見つめていたものの、ポケットで携帯が震えると、そちらに意識を向けた。

「はい、須藤です。――はい、今は例の病院の正面です。――ええ、今のところ動きはありません。どうしますか――はい、わかりました。では引き続き様子を見るということで――はい、失礼します」

携帯を閉じ、男は聳え立つ病院を見上げた。

――彼の背後の窓ガラスが、不気味に蠢く。現実を空虚に映し出す世界には、巨大な金色の影が映り込んでいた――

新しい、仮面ライダー？・３（後書き）

上条と聞くと、そげぶの方より（０Ｈ０）の方が先に来る俺はなんなんですかね（笑）

・上条くん三話でハブられた挙げ句、登場したと思ったらセリフ１つ。仁美なんて一度も（ｒｙこれも一条ツカサってやつのせいなんだ。

作者的には、上条くんも仁美も「嫌いじゃないわ！」なんですけどね……魔法少女のことを知れるわけがないですからね。それは仕方ない。

ただ、自分の気持ちに素直に従っただけの仁美はともかくとして、上条くんは「付き合うならせめてさやかの気持ちに気付いた上で付き合えよ」とは思います。

・龍二に、偶々がある云々の言葉を教えたであろう、明日のパンツがあれば生きていける人に関しては……多分彼が日本を放浪してた頃、龍二に会ってたんじゃないですかね（丸投げ）

次回は再びｖｓシザース。蓮花＆ほむほむも来ますよ。

お楽しみに！

どうでもいい近況
レジェンド戦隊にブ〇ックコ〇ドル……だと……？しかも脚本が井上さんってそれ大丈夫なのか。子供番組だよゴーカイジャーは。昔ほど規制は緩くないよｗｗ
いや、キバでもやったことだからいいのか？なんにせよ楽しみです。

新しい、仮面ライダー？・４

「ここだね」

「うん」

辿り着いたのは工場。
設置された機材が窓ガラスから覗いているが、実際のところは魔女とモンスターの巣窟。

龍二もマミも、そこにある異質な気配を感じ取っていた。

「結界はもう貼られてるね。中の人達は……」

「一人一人助けていたら、逆に被害が広がるわ。先に元凶を断ちましょう」

「了解」

つまりは迅速に、魔女とモンスターを排除すること。
龍二は窓ガラスにカードデッキを翳し、マミはソウルジェムを取り出した。

「変身！！」

右手を左側に突き出し、Ｖバックルにデッキを装填。
隣ではマミの身体が、黄色い光に包まれたのが見えた。

灰色の影がオーバーラップし、龍二は仮面ライダー龍騎に。
マミは魔法少女としての装束を身に纏う。

「行きましょう！」

「っしゃあ！！」

マミがソウルジェムで結界に侵入したのを見て、龍二もまたガラスから結界に飛び込んだ。

◆◆◆

今回の敵の中に魔女はいなかった。
以前と同じケモノのような容姿を持つ『暗闇の魔女』の使い魔。

ちょろちょろと動き回って殲滅には面倒だったが、所詮は使い魔。
ベテランであるマミと、未熟ながらもバランスの取れた戦士である龍騎の力を持ってすれば、そう苦戦することもない。

「ふぅ、今ので最後？」

「そうね。結界も消えてるみたいだし……今回はこんなところかな」

ドラグセイバーと、硝煙を上げるマスケット銃を担ぎながら、二人は顔を見合わせた。

「結界に囚われた人は……」

「ああ、戦いのどさくさに紛れて、奥の部屋に放り込んでおいたよ。そんなに大きい工場じゃないから、あれで全員だろうね」

「……城戸くんはなんだかんだで、戦いの中でも余裕あるよね。ねぇ、前にも聞いたけど、本当に素人？」

「うん、本当に素人。道場通いとかもしたことないし」

暢気な口調で言う龍騎だが、マミは納得できなかった。
いくら仮面ライダーといっても、たかが数週間やそこらで、ここまで戦えるようになるのだろうか？

（天賦の才能……とかじゃ片付けられない気がするんだけどなぁ）

何度も死線をかいくぐらなければ、身に付かないほどの戦闘センス。
マミが長い時間をかけて手に入れたそれを、龍二はあっさりとやってのけている。
これは、無視できないことなんじゃないだろうか？

「それにしても妙だね」

「えっ？」

龍騎の呟きに、マミの思考は掻き消える。

「妙って、何が？」

「いや、今回ってさ。僕とマミちゃんが同時に気配を感じたじゃん。使い魔は倒したけど、モンスターが一体も出なかったのは可笑しくない？」

「あっ」

確かにそうだ。
結界さえ消えればモンスターはミラーワールドに帰る。
だが、龍騎が気配を感じた以上、使い魔のいる近くにモンスターがいないのは変だ。

首を傾げる二人。

程なくして、その問題は解決した。

『――っ！！』

気付いたのは、マミも龍騎もほぼ同時。
鏡から飛び出してきた二つの影の攻撃を、横っ飛びで回避する。

「外しましたか」

「あなた……この前の仮面ライダー！！」

『グルルル……！！』

「そうか……さっき僕が感じたのは、このデカ蟹の気配か」

自分にシザースバイザーを向けてきた敵――仮面ライダーシザースを睨むマミ。
片や龍騎はドラグセイバーを持ち直し、ボルキャンサーと対峙する。

「また城戸くんを狙ってるの？　なら、悪いけど容赦しないわよ」

マスケット銃の狙いを定めるマミの目は、完全に据わっていた。
しかも、さりげなくリボンを解いている。
『ティロ・フィナーレ』の発動まで想定しているらしい。

「ま、待ったマミちゃん！」

ヤバそうな空気を感じ取ったのか、龍騎はマミの腕を掴む。

「何をナチュラルに必殺技発動させようとしてんの！　いくらライダーでもそれ喰らったらタダじゃ済まないでしょ！」

「止めないで城戸くん。友達が二度も命を狙われて、それでも黙っていられるほど、私は温厚じゃないわ」

「だから落ち着いて！　キミそんなキャラじゃないだろ！？」

こっちがドン引きするほど冷ややかな口調だった。
いや、友達と思われてるのは嬉しいけど。

猛るマミを抑え、龍騎はシザースに問う。

「おい、アンタ一体何が目的なんだ！　同じライダー同士で、なんで戦わなくちゃならない！？」

「……ちょっとした契約でしてね」

仮面の下から、清涼な印象の声が漏れた。

「あなたに恨みはありません。が、これも必然。私以外のライダーはすべて始末させてもらいます。
そこのお嬢さんも、邪魔をするなら排除しますよ」

掲げられたシザースバイザーが怪しく光る。
その動作一切に、遊びは見受けられない。本物の殺意だ。

「はぁっ！」

『シャァァァッ！』

二つの影が、突進をかけてくる。シザースは龍騎を、ボルキャンサーはマミを狙う。

「城戸くん、来たわよ！」

マスケット銃が火を吹く。ボルキャンサーはハサミでそれを弾くと、マミの間合いへと入った。

「舐めないでっ！」

マミは助走もなく飛び上がってハサミを回避。再び空中でマスケット銃を放つ。

「……ああっ、もう！　なんでこうなるかなぁ！」

期せずして始まった戦いに、頭を抱える龍騎。
片やシザースは走りながらカードを抜き、バイザーに装填する。

【ＳＴＲＩＫＥ．ＶＥＮＴ】

バイザーよりも更に鋭い爪を持つ手甲『シザースピンチ』が、龍騎目掛けて振り下ろされる。

「っ」

咄嗟の判断で、龍騎もカードを使用する。

【ＧＵＡＲＤ．ＶＥＮＴ】

龍騎の手に現れたのはドラグシールド。
発動がギリギリ間に合い、シザースピンチはシザースごと盾に弾かれる。

「やりますね」

「嬉しくない！」

龍騎はドラグセイバーとドラグシールドを同時装備し、攻守のバランスを整えた。

シザースの追撃を防ぎつつ、ドラグセイバーで攻撃する単純なヒット&アウェイ。

しかし、シザースの攻撃に容赦がない反面、龍騎の剣にはいつものキレが見られない。

「どうしました？　防いでばかりでは相手は殺せませんよ！」

「ふんっ、あんま喋ると舌噛むぜ！」

強がるも、龍騎は攻めきれない。当たり前だ。

相手はモンスターではなく――人間。
いくら自分を倒そうとしているとはいえ、やり返していい筈もない。

（一歩間違えれば……）

相手を殺してしまうかも知れないという重圧は、確実に龍騎の動きを鈍らせていた。

（マズいわね……城戸くん、全然動けてない）

ボルキャンサーを相手取りながら、マミもまた龍騎の不調に気付いていた。

（早く加勢したいけど、まずはこっちの蟹さんをどうにかしなきゃ）

しかし、こっちはこっちで苦戦していたりするのが現状だ。

『シャァァァッ！！』

マミの撃った弾丸を弾きながら、ボルキャンサーは近距離戦を続ける。
甲殻類らしい堅い外皮が、マミの攻撃を全てシャットアウトしてし

まっていた。

かといって、『ティロ・フィナーレ』のような大技を放とうにも、近距離戦に持ち込まれている以上、どうやってもスキが出来てしまう。

（ただでさえ、私の武器はエイム（狙い）とファイア（発射）の手順があるしなぁ……）

遠距離に逃げても、技のアプローチの間に近付かれるか、鏡に逃げ込まれれば終わりだ。

（だったら）

マミは新たに二丁のマスケット銃を構え、ボルキャンサーとの距離を詰めた。

『ギッ！？』

今までしきりに距離を取ろうとしていた相手が、急に至近距離にまで来たことで、ボルキャンサーは一瞬怯む。

（チャンス！！）

マミはマスケット銃二丁を腕ごと引き、さながら槍のごとく、前方へと突き出した。
狙いは違わず、ボルキャンサーの口に突っ込まれる。

「外側が駄目……なら、内側からの攻撃はどうかしら？」

――タァン！
乾いた銃声と光が、口内で炸裂する。

『ガッ！！』

さすがにダメージがあったのか、ボルキャンサーが数歩後退し、動きを止める。
致命傷ではない。
だが、マミからすれば十分な時間。

「城戸くん！」

マスケット銃を再召喚し照準を合わせる。
シザースが感づいたがもう遅い。

――タァン！！

二撃目。
放たれた弾丸はシザースの頭部の左側面にヒットした。

「ぐおっ！！」

「！！　っだぁ！！」

頭を押さえながら、シザースは体勢を崩す。隙を見計らって龍騎は身体を捻り、その反動を生かした空中回転蹴りを繰り出した。

工場の地面を滑るシザース。
龍騎はドラグシールドを捨て、すかさずカードを抜く。

【ＳＴＲＩＫＥ．ＶＥＮＴ】

ドラグセイバーを持ち替え、空いた方の手に装着されたのは、ドラグレッダーの頭部を模した手甲『ドラグクロー』。

「はぁぁぁ……っ！！」

腰を落とし、右手を引く。鏡から現れたドラグレッダーもまた、主の動きに合わせてその口から炎を覗かせた。

「っ！！」

来る技の威力を予測し、シザースは立ち上がりつつ、カードをベントインする。

【ＧＵＡＲＤ．ＶＥＮＴ】

甲殻を思わせる盾『シェルディフェンス』を防御手段に、シザースは龍騎の攻撃に備えた。

（よし、あの盾に当てれば……！）

少なくとも致命傷にはならない。

算段をつけ、龍騎はドラグクローを突き出した。

「だぁっ！」

そのアクションと同時に、ドラグレッダーの『ドラグクローファイヤー』が発動。
吐き出された灼熱の火炎流が、シザースの盾と激突する。

「ぐ、ぉおおお！」

防いだ。
しかし、技そのものの勢いに勝てない。
踏ん張りが利かず、シザースは後方の壁まで吹っ飛ばされた。

「はぁっ、はぁっ……」

緊張が切れたからか、息切れが止まらない。
ドラグクローを下ろしながら、龍騎はシザースの方を見る。
呻いているのがわかる為、死ぬようなダメージではないだろう。

（……とにかく、事情を聞いてみないと）

あれなら、戦いの続行はできないだろうし、もしかしたら落ち着いた話ができるかも――

【ＡＤＶＥＮＴ】

「城戸くん、後ろ！！」

「なっ！？」

切迫したマミの声と、シザースバイザーの電子音が重なった。
マミが目を離した一瞬でミラーワールドに飛び込み、龍騎背後の窓ガラスに移動したボルキャンサーは、そのハサミで龍騎に襲いかかってくる。

（やば……っ！！）

ドラグシールドはドラグクローを呼び出すために棄てている為、今の龍騎に防御手段はない。
マミがマスケット銃を構えているのが見える。しかし、とても間に合わない。

「くそっ！！」

せめてもの抵抗として、腕を交差させながら、龍騎は自分を貫かんとするハサミの脅威に備えた――

◆◆◆

工場内に響く轟音。
空気を震わせる衝撃と共に、ボルキャンサーの外皮の上で爆炎が挙がり、その巨体を主人と同様に吹っ飛ばした。

『……えっ？』

突然の大爆発に、龍騎のみならずマミもポカンとしていた。

何が起こった？
龍騎は何もしていない。マミのマスケット銃も沈黙したまま――というか、マスケット銃はあんな大火力を保有した銃器ではない。

ならば、

「蓮花が『危なっかしくて見てられない』って言うのもわかるわね。戦いの最中、相手に手加減するなんて」

上方から聞こえてくる第三者の声。
全員が、作業中に備えられた二階の回廊に目を向けた。

硝煙の上がるロケットランチャーを放り捨てながら、彼女は溜め息をつく。

「そんな危なっかしい人が、同じように危なっかしい貴女と組むのは、ある意味必然なのかしらね？　巴マミ」

「暁美……ほむら」

マミの呟きと共に、ほむらは鮮やかに一階へと降りてくる。
その片手にはいつの間にかサブマシンガンが握られ、その銃口はシザースに向けられていた。

「消えなさい。さもなければ、ここで排除するわ」

「……」

「もっとも、三対一で勝つ自信があるのなら、別に止めはしないけ

れど」

その一言がトドメだったのだろう。
シザースは無言のまま、ミラーワールドの先へと逃げて行った。

それを見送った後、ほむらは二人に目をやった。
無機質な瞳に、龍騎とマミの姿が映り込んでいる。

「……えと、ほむらちゃん、取り敢えずありが……」

「貴女達は狙われている」

龍騎の言葉を遮り、ほむらは言った。
突き放したような口調に、龍騎もマミも気後れしてしまう。

「あのライダーはしばらく泳がせた後、適当なところで私達が始末をつける。当面の間、貴女達は派手な行動を控えた方がいい」

言葉を挟む隙を与えずにまくしたてて、背を向けるほむら。

「ま、待って！」

一方的な警告に呆気にとられていたマミが、慌てて彼女を止める。

「どういうこと？　仮面ライダーが私達を狙う理由を、貴女達は知ってるの？」

「知らない方が身のためよ。せっかく拾った命を、また危険に晒したいのかしら？」

マミの脳裏にフラッシュバックする、お菓子の魔女との戦い。
たじろいだマミを威圧するように、ほむらは冷ややかなトーンを崩さない。

「大人しくしていなさい。特に巴マミ、貴女はね」

「えっ？」

「貴女の運命は根深い。回避したと思った事象が、思わぬ形で貴女の身を切り裂くこともあった」

「……いったいなんの話をしているの？」

「別に、意味のない話よ。……長い巡りの中で、もう消えてしまった道標の話」

（……？）

そこで初めて、ほむらの口調に翳りが混じったのを、龍騎は見逃さなかった。
だが、彼女はそれを誤魔化すように、

「要するに貴女は、せいぜいそこの彼と愛の言葉でも囁き合ってればいいのよ」

「なっ！？」

顔を紅潮させたマミが罵声を浴びせるより早く、ほむらの姿は一瞬で掻き消えていた。

（これも魔法なのか……？）

そう言えばほむらと初めて会った時も、彼女はいきなり校庭に現れていた。
何か関係があるのかも知れない。

と、工場の奥の方から、何やらガヤガヤと声がする。
どうやら、さっき龍騎が放り込んでおいた職員が起きたようだ。

「早いとこ出よう。見られると色々面倒……ってマミちゃん？　顔紅いけど大丈夫？」

「ふぇっ！？　　あ、ううん、大丈夫」

呆けていたマミは慌てて変身を解除し、龍騎もデッキを外して元の姿に戻った。

（それにしても）

工場からそそくさと退散しつつ、龍二は思い返す。

やはり、蓮花にしろほむらにしろ、悪い人物には見えない。
さっきだってこちらに手を出さず、あまつさえこちらに警告をしてくれた。

だがその裏で、キュゥべえを狙って、新しい魔法少女誕生を阻止していたと言うし……。

（何か、きっと裏がある）

それはきっと、ライダー同士の戦いが生まれた理由にも繋がっている筈だ。

新しい、仮面ライダー？・４（後書き）

マジですみません。
蓮花を出せませんでした……；

・カニさん二戦目。マミさんも加わりましたが決着はつかず。
なんやかんやで、モンスターと魔法少女が戦ったのは、今回が初めてなんですよね。これからもちょくちょくこういうバトルは増やして行きます。

・ほむほむ見参。
しかし工場でロケットランチャーはいかんよ（↑おい作者

・ほむほむはさりげなく、本当にさりげなーーく、マミを巻き込ませないようにしてます。
まどかが最優先なだけで、ほむほむもマミさん達を救いたがってる筈……と、最近１０話を見返して思いました。アレ、作文？

次回は須藤さんが龍二達と遂に接触。
お楽しみに。

どうでもいい近況
鋼殻のレギオス１３～１６を一気読み。
以前どっかで１２巻でストップしてる的なことを書いたら「そこか

ら先が熱いんですよ」ととある作者さんに言われまして、再スタート。

いやいや、熱い展開の連続でした。
これは確かに損してましたよ私（汗）

レイフォンとリーリンの関係性の決着。
レギオス誕生の謎。
あとは天剣総動員のバトルも見逃せませんね。
リンテンスさんはかっこいいしバーメリンは可愛いし。

やっとこさレイフォンが前向きになってきましたが、果たしてどうなっちゃうのか。早く17巻買わないと。

新しい、仮面ライダー？・5

「けど、なにがしたいんだろうね。ほむらちゃんにしろ、蓮花にしろ」

病院に戻る途中、僕は何となくマミちゃんに振ってみた。

「マミちゃんは、僕よりも二人と付き合いが長いんだよね？」

「長いって言っても、数日くらいの差だと思うわよ。それに、そこまでしっかり話したことがあるわけでもないし。
ほら、二人ともあんな性格だから……」

「ああ……」

確かに、いつも向こうの言いたいことしか言わないからなぁ……あの二人。
元々クールな性格っぽいし、僕に限らず、マミちゃんでも会話のキャッチボールは成立しないだろう。

「私が知ってるのは、あの二人が手を組んでるってこと。あとは、キュゥべえを狙ってるってことくらいかな」

「キュゥべえを狙ってる、か……魔法少女が生まれるのを防ぐために？」

「キュゥべえ本人はそう言ってたわ。多分、グリーフシードを独占したいんでしょう」

「……本当に、そうなのかなぁ」

「えっ？」

マミちゃんがきょとんとした表情で振り向く。

「いや、マミちゃんには言ってなかったんだけどさ。ほむらちゃんと初めて会った時、あの子は僕が仮面ライダーになるのを止めなかったんだよ」

「？　けど、秋山蓮花は……」

「うん、僕をライダーにしたがってなかった。けどほむらちゃんは『僕のことはどうでもいい』って言ってたんだよ。けど、これっておかしくない？」

「おかしいって……あっ」

ハッとしたマミちゃんに、僕は頷く。

「そう。魔法少女も仮面ライダーと同じで、グリーフシードを必要としてるよね？」

グリーフシードを食べさせることで、モンスターは強くなる。
見方を変えれば、魔法少女の商売敵にもなり得るはずだ。

「だとしたら、ほむらちゃんは僕がライダーになるのを止める筈だ。僕は彼女にとって、グリーフシード独占の邪魔にしかならないんだから」

「うーん。けど、城戸くんのドラゴンは他のモンスターを食べさせてもパワーアップするんでしょ？　グリーフシードしか狙わない魔法少女よりも、危険性は少ないって思ったんじゃない？」

「かもね。けど、可能性は捨てきれないだろ？　それにマミちゃん、ほむらちゃん達の口から一度でも『私達の目的はグリーフシードの独占よ』なんて言葉が出たの？」

「……そりゃ、向こうが何も話してくれないから、聞いたことはないけど……」

そう。蓮花達の行動理由は、未だマミちゃんやキュゥべえの想像の域を出ていない。

彼女達の目的が『不明』である以上、勝手な推測を事実にすべきではないのだ。

「蓮花達は“何か”を知ってる。シザースについて調べる為にも、ここはあの二人にくっついてみない？」

「うーん……」

シンキングタイムに入るマミちゃん。
会うとほぼ確実に、険悪ムードに突入する相手。歩み寄るのは抵抗があるのかも知れない。

しかし、

「――そうね。確かに、やってみる価値はあるかも」

マミちゃんは頷いて、

「ただ私としては、まだあの二人を信用出来ないわ。どんな理由があれ、キュゥべえを狙っていたのは変わらないから」

「……うん」

さすがに僕も、それは否定仕切れない。

「だから、接触は慎重に行きましょう。
特に城戸くんは、絶対に一人で会っちゃ駄目だからね」

「は？」

何故にＷＨＹ？

「だって城戸くん、どんな相手もすぐ信用しちゃうじゃない」

マミちゃんは腰に手を当て、僕をビシッと指差した。
……先生みたいな仕草だなぁ。

「さっきからやたら、暁美ほむらや秋山蓮花を持ち上げるのだって、
あの二人を信じたいからでしょ？
そんな『この世に悪人はいません』みたいな姿勢じゃ、コロッと騙
されちゃうわよ」

「……さらりと人をボロクソにするね。マミちゃん」

「否定できる？」

真顔で問われた。
――ごめんなさい、否定できません。

「……って言っても、それが城戸くんのいいとこでもあるから難しいんだけどね」

「……毎度のことだけど、僕の長所は短所と紙一重のようで」

一転してくすりと笑われ、何も言えなくなる。
どうにも僕は、マミちゃんの笑顔に弱い節があるらしい。いつか克服しなければ。

「まぁ取り敢えず、当面はあの二人にもっと話を聞く。ただし、城戸くんは絶対に一人で会わないこと。こんなところかしら？」

「了解。後でまどかちゃんとさやかちゃんにも話しておこう」

本来なら二人を連れていくべきではないけど、今更除け者にもできない。
向こうがまどかちゃんとさやかちゃんにも接触しようとしていた以上、むしろ一緒に話を聞いて貰うべきだ。

――そうこう考えを纏めている内に、病院に着いていた。
ホールに入ってすぐ（ドアの近くで待っていたのか）キュゥべえを頭に乗せたまどかちゃんが駆け寄ってくる。

「あっ、城戸さん、マミさん！」

「ただいま、鹿目さん。ちょっと待たせちゃったかな？」

「そんなのいいですよ！　それよりマミさんや城戸さんが怪我する方が心配です！」

「大丈夫大丈夫。僕はちょっとハサミでじょきんってされそうだったけど、それ以外は何にもなかったよ」

「それって大ピンチだったんじゃないですか！？」

アタフタまどかちゃん。
非常に和みます。

「もう城戸くん、鹿目さんをからかわないの。……キュゥべえ、待ってる間は何もなかった？」

「うん。報告するようなことは何もなかったよ。むしろキミ達の方こそ、報告するべきことがあるんじゃないのかな？」

キュゥべえは先を促すように首を傾けた。

「またあの蟹のライダーが出たんだろう？　ここからでも気配を感じたよ」

「えっ？　本当ですか？」

ライダーの気配を察知できないまどかちゃんが、不安げに瞳を揺らした。

「――ええ、本当よ。それについて、あなた達に話しておきたいことがあるのだけれど……美樹さんはまだお見舞い？」

「あ、はい。もうすぐ戻ってくると思うんですけど……」

「おやおや、誰か私の名前を呼んだかにゃー？」

いつの間にかまどかちゃんの背後に、さやかちゃんが忍び寄っていた。

その見事な隠密スキルに、まどかちゃんは「ひゃっ！」と飛び上がる。

そのままコンボが発動したのか、さやかちゃんの腕がまどかちゃんの身体に回される。

はい皆さん、本日の百合展開ですよ。

「なになに、あたし不在の時でもあたしの話をしてくれてたのかい？　くぅ～、可愛いヤツめぇ～！」

「わひゃっ！　さ、さやかちゃん、驚かさないでよ……」

さやかちゃんの手がいろいろと際どい場所に伸び、まどかちゃんが可愛らしい悲鳴を挙げた。
ふむ、僕に百合の傾向は無いが、しかしこうして見ると、美少女二人の絡みというのも目に優しい光景――

「城戸くん」

「スミマセンデシタ」

思考を読まれたのか、マミちゃんのシャレにならないほど低い声が、僕の背筋が凍らせる。
こちら側からは目元が前髪で隠れており、マミちゃんの表情は伺えないが、むしろそれが怖い。

あの、後輩二人を可愛らしいと思うのはそんなに大罪でしょうか！
いや確かにマズいという自覚はあるけど、これは健全な男子高校生としては仕方ない現象であって――

「おや、さやかちゃん。お友達かい？」

冷や汗を流す僕に救世主。

通りがかった白衣の男性が、さやかちゃんに声をかけたのだ。
爽やか系の顔つきが、否応なしにイケメンの風格を醸し出している。

「あ、解谷先生。……あれ？　先生、おデコに痣ができてますよ」

「ああ、大したことはないよ。さっきそこの廊下で転んじゃってね」

「もう、しっかりしてくださいよ～。お医者様が怪我しちゃ世話ないんですから」

「あはは、面目ない」

軽やかに会話が成立するあたり、さやかちゃんも顔見知りのようだ。

「あ、みんな。こちら、恭介の担当医の解谷先生」

「や、これはどうもはじめまして。解谷蛍です」

軽く会釈する解谷先生に、僕らもそれぞれ軽くお辞儀。

「みんな、恭介くん繋がりの付き合いかい？」

「いえ、まどかは私の同級生で、マミさんは三年生の先輩。城戸さんはマミさん繋がりで知り合った人です」

「なるほど。学年問わず人気があるんだね。さやかちゃんは」

さやかちゃん、頭を掻きながら「いやぁ～」というベタな照れ笑い。

「私が言うのもあれだけど、怪我しないように気を付けて帰りなさい。最近は失踪事件だの何だのと、いろいろ物騒だからね」

言って、解谷先生は再び病棟へと戻っていく。……よもやその失踪事件に深く関わっているとは言えませんネ。

解谷先生の雰囲気に押され気味だったマミちゃんが、未だ呆然とした表情で呟く。

「物凄く爽やかな先生だったわね――美樹さんとは、長い付き合いなの？」

「恭介が入院した時に知り合いましたから、そんなに月日のある仲じゃないっすよ。ただ、あんな性格だから、今じゃすっかり仲良くなっちゃいましたけど」

さやかちゃんの話には頷けるものがあった。

確かに、あれは万人受けする人柄だろう。

「それで、なんかあったんですか？　あたしを待ってたみたいですけど」

「そうね。ゆっくり話したいし、一度私の家まで戻りましょうか」

全員が同意し、僕らは病院を後にする。

（あー、だいぶ足がふらつくなぁ……）

軽く死にかけた分、緊張感が解けたあとの虚脱感は半端じゃない。
早く戻ってマミちゃんのケーキと紅茶を戴きたいもんだ。

――ただまぁ、そんな時に限って何か起きるのが、世の中というものでして。

「すみません。ちょっとよろしいでしょうか？」

病院の敷地を出てすく、謎の兄ちゃんに声をかけられた。
黒コートに背広、生真面目そうな印象だ。

急なことで驚くみんなを代表して僕が受け答える。
やや声が不機嫌になるのはご愛嬌。

「なんですか？　一応急いでんですけど（ケーキ的な意味で）」
「すみません。お時間は取らせませんので。――私、こういうものです」

懐から取り出された手帳には、国家勢力の威光を示す代紋。
階級と名前――『須藤雅史』というらしい。

まどかちゃんがおずおずと尋ねる。

「警察の人、ですか？」

「はい。少々、捜査にご協力願いたいのですか」

「わわっ、聞き込みされるの初めてだ！　なんかドラマみたい！」

「美樹さん、失礼よ」

「いえ、お気になさらず。むしろ、こういう反応をして下さる方のほうが、こちらも気兼ねなく話せますし」

ミーハー全開のさやかちゃんに、須藤さんはさすが警察というか、手慣れた対応を返していた。

警察か……小さい頃は何回かお世話になったから、あまりいい思い出はないんだけど……まぁいいか。これも一市民の務め。

「わかりました。時間をかけないなら」

「助かります。――こちらの病院は、よくご利用されますか？」

「それほどは。ただ、さやかちゃんはよく来るんだよね？」

「はい。お見舞いがありますから……だいたい週に一回は必ず来てますかねー」

話に入れるのが嬉しいのか、さやかちゃんの声は弾んでいる。

「では、こちらの病院で何か変わったことはありましたか？
どんな小さなことでも構いませんので」

「へ？　うーん……別に変わったこととかは特にないですよ。普通の病院だと思いますけど」

「そうですか……」

さして落胆した様子もなく、須藤さんは手帳にペンを走らせていた。

興味本位なのか何なのか、マミちゃんが問う。

「あの、何かあったんですか？　この病院で」

「ああ、いえ。何か実際に事件が起こったわけではありませんよ。――ただ、少々この病院には黒い噂がありましてね」

「黒い噂？」

須藤さんは頷いてその噂を、恐らくは捜査に支障が出ない範囲で、説明してくれた。

「最近になってからのことなのですが、この病院内の何者かが、臓器や薬品の密売に加担している――との話が持ち上がったのです」

「密売……本当ならガチで速攻逮捕のレベルですね」

「ええ。事実、病院の関係者が数人行方不明になっているんです。口封じか何かに巻き込まれた可能性も含めて捜査しているんですが……」

僕、まどかちゃん、さやかちゃん、マミちゃんが同時に顔をしかめた。

今さっきまでいた病院で、そんなことが行われているかも知れないと言われれば、気分も悪くなる。

「もちろん、未だ噂の領域を出ない話です。ですがもし真実ならば『見滝原連続失踪事件』にも関わりますから、こちらとしても放っておけないわけでして」

「成る程。――すみません。お役に立てなくて」

「いえいえ、ご協力感謝します」

淀みないモーションの敬礼と共に、須藤さんの聞き込みは終わった。

「また何か気付いたことがありましたら、情報提供にご協力をお願い致します」

そう言い残して、須藤さんは僕らと別方向に歩き去っていった。

「……なーんか、生真面目を絵に描いたような刑事さんだったな」

その場にいた全員が頷く。
今日び、あそこまで刑事という肩書きが似合う人は少ないのではなかろうか。

――と、そんな生真面目刑事さんとの邂逅こそあれ、僕らはそのまま普通にマミちゃんの家へと向かった。

まどかちゃんとさやかちゃんに『蓮花とほむらちゃんの動向を探る』という当面の方針を伝える中で、須藤さんの言った話の内容はすっ飛んでしまった。

――そう。この時までは。

◆◆◆

「……」

秋山蓮花は、遠くからその様子を伺っていた。
普段通りの鋭い表情には磨きがかかっており、その細い瞳には須藤――龍二と話していた刑事を映している。

「彼が、仮面ライダーシザース？」

距離を取りながら彼を尾行する蓮花の隣――ほむらが問いかける。

「ああ。城戸達と接触を図ってきた以上、その可能性は高い」

「成る程。随分と姑息なやり方をするのね、あのライダーは」
「前回の闘いでも、ヤツは闘いを有利にするために、裏で散々手を回していたからな……」
蓮花の命を狙い、それどころか神崎の妹であるアイツを捉えようとまでした。
だが、今度はそうはいかない。
「……ほむら。お前は鹿目まどかに目を光らせておけ。もし城戸との闘いで、人質に取られでもしたら厄介だ」
「言われるまでもないわ。あと、美樹さやかはどうするの？　魔法少女でない以上、彼女も人質に取られる可能性があるんじゃなくて？」
ほむらの指摘に、蓮花は思考を巡らせる。
龍二やマミといる時はともかく、それ以外は彼女もまどかと行動していることが多いだろうから……。
「鹿目まどかと共にいる時には、お前が見ていてやってくれ。それ以外の時は手塚に任せよう」
「了解。あなたは？」

「取り敢えず、監視を続ける。インキュベーターの動向を出来るだけ調べておきたいからな」

慎重な蓮花に、ほむらはやや不満そうに言う。

「……あまり時間を掛けすぎるのも問題よ。それだけまどか達の危険度を引き上げることになるわ」

「安心しろ。そのあたりのタイミングは心得ているさ」

静かにカードデッキを取り出す蓮花に、迷いは一切なかった。

「ヤツが派手な動きを見せたその時には――」

私が、始末をつける。

◆◆◆

次回、仮面ライダー龍騎☆マギカ。

「やられた！！」

「この力は私に素晴らしい刺激を与えてくれる！！」

「僕は人を守るためにライダーになったんだ。誰かを守るためだけに変身するつもりだったし、そしてこれからも……」

「けど」

――「あんただけは許せない」。

願いを胸に戦え。未来を描く為に。

新しい、仮面ライダー？・５（後書き）

・やや龍騎原作と被る展開に。須藤さんの丁寧口調は常に慇懃無礼に聞こえる不思議（笑）

・マミさんと龍二、そろそろ蓮花とほむらのコンビが気になりだした様子。果たして和解の手助けとなるのか。

シザースとの闘いもいよいよ大詰め。
終わったらぼちぼちまどマギ第四話～第五話のストーリーにも入ろうかな……お楽しみに！！

どうでもいい近況
まどマギ声優六人による座談会『魔法少女達のお茶会』を聞きました。
本編そっちのけなほのぼの会話……ってか声優さん達やりたい放題。
特に碧さんと水橋さん（笑）

碧さん「（杏子に対して）俺の嫁、俺の嫁！」
「（１０話で魔法少女になった時）ｋｔｋｒ俺の時代！」
「（キュゥべえのぬいぐるみに対して）こっちみんなｗｗ」

水橋さん「べえさんマジぱねえっす」
「マミさんの人形が出たら、首取って遊ぶ人いそうｗｗ」
「みんな必殺技言ってないよね？私だけで……」

しかし一番吹いたのは『ティロフィナーレ』の初期案が『アルティ

マシュート』だったということです（笑）

断章・俺は負けられない

「話はわかった。……だが、まだキミを信用し切ることはできないな」

「……」

全ての事情を聞いた上での、ユーブロンの結論がそれだった。

「タイムベントの完成はデッキ開発の副産品――言わば偶然の産物だ。時を操るのは本来、禁忌以外の何ものでもない。だから私はそのカードを封印した」

ユーブロンは静かな口調で、神崎を糾弾する。彼の纏うピリピリとした威圧感から、神崎は自らの犯した罪を、肌で再認識していた。

「キミの罪が、愛情に深く裏打ちされたことは理解している。私の仲間にも一人、そんな男がいたよ。しかし、今回は彼の時とは違う。私は彼のことを良く知っていたが、キミのことは何も知らないのだよ」

身内贔屓などではなく、単純な信用度の差。

神崎もそれは自覚していた。

やり直しのチャンスを与えられるには――自分はあまりにも罪深い。

「私の中でキミはまだ『己が欲望の為に、何の関係もない者達を時間の牢獄に閉じ込めた大罪人』でしかない。
贖罪の意識を確かめぬまま、おいそれと私の知識を貸すことはできないな。また同じことをしでかす可能性もあるのだから」

「……つまり、協力を仰ぐことはできない、ということですね」

「私は贖罪の意識を確かめぬままでは――と言った筈だが？」

ユーブロンは首を振って、神崎と目線を合わせる。

「キミを信じることはできない――が、インキュベーターの問題を捨て置けないのもまた事実。そこでだ、まずはキミの心願を確かめさせてもらう」

「俺の、心願？」

「なに、難しいことではないさ。私と、一戦交えてくれればいい」

ユーブロンがコートの中から取り出したのは、一つのカードデッキ。
だが、神崎の作ったデッキとはやや意匠が異なり、中央には円形のエンブレムが刻まれている。

「戦いは言葉よりも明瞭かつ多くのものを語る。私に勝てば、キミへの協力を約束しよう」

「……しかし、俺は」

勝負以前の問題だ。
今の神崎には、実態がない。
傀儡だったオーディンへの変身には、常に適当な浮浪者等を代理人に使っていた。

「心配はいらない。ミラーワールドが鏡の世界なら、ここ『ベンタラ』は鏡の更に向こう側。地球と構成物質を異にするこの世界ならば、キミの変身も可能だ」

「……」

ユーブロンと同じく、神埼がポケットから取り出したのは、鳳凰の紋章が刻まれたデッキ。
近くには、己の姿を映し出す鏡面状の機械もある。

「……わかりました。お相手しましょう」

デッキを構える神埼。鏡に映り込んだ黄金のVバックルが実体化し、その腰に装着される。

「俺は負けられない。またあいつらを時の牢獄に閉じ込めてしまった以上、俺には、あいつらを全力で助ける義務がある」

「よろしい。では……」

ユーブロンは貫録のある顔つきを僅かに緩める。
しかし、それも一瞬のこと。
歴戦の猛者が放つ戦意は研ぎ澄まされ、神崎でさえも畏怖を禁じえなかった。

「始めようか」

デッキを正面に構えるユーブロン。
エンブレムから発生したスパークが左手を伝い、腰周りで収束。
武骨な銀色のベルトを形成する。

視線が交錯し、両者は同時に叫んだ。

「変身！」

「ＫＡＭＥＮ・ＲＩＤＥＲ！」

デッキがバックルに装填され、エンブレムが輝く。
神埼の身体に虚像が幾重にも重なり、その姿を仮面ライダーオーディンへと変える。
だが――その姿は見る者が見れば違和感を覚えるだろう。
今のオーディンは肩当てが無く、本来ならライトブラウンカラーのデッキも黒色だ。

片やユーブロン。
彼の姿は金色の球体に包まれ、その周囲を2本のサークルが一周。
その身に纏うのは、昆虫を思わせる複眼と、黒を基調とした重厚な鎧。
腕にはカードリーダータイプのバイザーが装着されている。

オーディンと対峙する戦士――それはかつて、ある科学者の開発したオルタナティブ・ゼロと呼ばれる疑似ライダーに酷似していた。
しかし、姿が同じでもそれは似て非なる者。
カードデッキの創造主にして、13人の仮面ライダーを束ねる存在――アドベントマスターだ。

「それが、キミの作り上げたラスのデッキか」

「ええ。俺はオーディンと呼んでいますが」

「ふむ。だが、インキュベーターに力を奪われたその姿で戦いに臨む気かね？」

「戦え――そう言ったのはあなただ」

呼び出された『鳳凰召錫ゴルトバイザー』が床を叩き、乾いた音を立てる。

「戦う以上――無い物ねだりをする気はない」

これから先の問答は不要――オーディンの鋭い口調に、アドベントマスターは静かに拳を握り、臨戦態勢に入る。

向き合うはどちらも最強クラスの仮面ライダー。
魔法少女も、仮面ライダーさえも認知できない場所で静かに、その戦いの幕は上がった。

断章・俺は負けられない（後書き）

今回は断章。すみません。サークルでの一次創作が忙しいんです……；

・オーディンｖｓマスターユーブロン。
ドラゴンナイト未視聴者の方の為に言っておくと、オルタナティブ・ゼロは仮面ライダードラゴンナイトにて最強クラスの仮面ライダーです。

・力を失ったオーディン。キュゥべえに奪われたカードが何なのかも、多少予想がついてしまうかも知れませんね。

あんただけは許せない．１

「手こずっているようだね」

「……キミですか」

自分に力を与えた白い生き物――キュゥべえは、いつの間にか背後に立っていた。
表情はあまりに無機質で、赤い瞳にシザースの姿が映り込んでいる。

「聞いていた以上に邪魔者が多かったもので。あなたの言う“魔法少女にはなるべく手を出さない”という制約さえなければ、もう少しやりやすくはなるのですが」

「それは僕への不満かい？」

「単純な事実ですよ」

認めたくないが、龍騎も巴マミもなかなかの実力者だ。
二人がかりで一方を殺さず、しかもナイトや暁美ほむらの介入もあり得る――ハードルは上がるばかりだ。

「確かに、キミにとって不利な状況下であることは認めよう。しかしだからといって、彼女たちを消すことを許可するわけにいかないね。

運良くキミとの戦いで、彼女たちのソウルジェムが“限界”を迎えてくれればいいが、そうならないなら僕達にとっては損失以外の何ものでもない」

「……」

「もし彼女たちを手にかけるつもりなら――僕は容赦なくキミとモンスターの契約を強制解除するよ」

キュゥべえの声に起伏はない。しかしそれ故に、冗談の混ざる余地はなさそうだった。

「わかっていますよ。力を戴いた手前、キミに逆らうつもりはありません」

この生き物は信用できないが、その点においてだけは感謝している。仮面ライダー。常識を逸脱した力を持つ存在の中で、自分がその頂点に君臨する――考えただけでゾクゾクする話だ。
少なくとも、今までの型にはまり切った生活よりは何億倍もマシに違いない。

故に、シザースはこの力を使い続ける。
キュゥべえとの契約――他のライダー全てを倒す為に。

「しかし、未だライダーは私を含めて三人――他のライダーはまだ

現れないんですか？」

「僕の側のライダーはまだ揃わないね。キミ以外に契約してくれたのはガイとベルデだけだし……まぁ、焦らなくとも、いずれはキミの前に現れるさ。そのライダーを全て倒した時、シザースの力は永遠にキミのものだ」

もっとも――僕からしたら、神崎士郎側のライダーさえ潰してくれればいいんだけどね。
尻尾を揺らすキュゥべえの口から、その本心が漏れることはない。
代わりに、自分をより有利にするための布石を打つ。

「そうだ。制約の破棄は出来ないけれど、多少キミを有利にする方法ならあるよ」

「ほう、それはいい」

仮面の下で笑うシザース。
と、それと時を同じくして、部屋にあった小さな鏡から、何かが飛び出してきた。
――床に転がる女性モノの靴。鏡の中には、満足そうに口元を拭うボルキャンサーの姿があった。

「彼もちょうど“食事”を終えたところですし、お聞かせ願えますか？」

◆◆◆

「ふむ。まどかちゃんもさやかちゃんも遅いね」

「休日だし、寝坊してたりするのかも知れないわよ。美樹さんはなんとなく、朝弱そうなイメージあるし」

「あー、わかる。逆にまどかちゃんは、１０時就寝６時起床を地で行きそうなタイプだ」

マミちゃんの話に合わせながら、口の中に広がる甘味を楽しむ。
うん、美味い。

例によって例のごとく、僕らは本日も魔女とモンスター探し。
昨日の話し合いで、蓮花とほむらちゃんから何か情報を引き出すことも視野に入れているが、優先されるのは人を守ることだ。

待ち合わせ場所は商店街の一角――前に美穂と一緒に来たクレープ屋。
現在僕とマミちゃんは、なぜか遅れ気味なまどかちゃんとさやかちゃんを待ちつつ、クレープを頬張ってます。

さあ考えてみよう。
こんな超可愛い子と並んで甘いもの。
しかも今日のマミちゃんは制服でなく私服（ここ重要）！
白のカットソーにカーディガン、ロングスカートというかなり新鮮

な格好！

素晴らしい。最高の休日だとは思わんかね。

「う～ん、ここのクレープ美味しっ♪　花鶏の時も思ったけど、城戸くんって本当にいい店知ってるのね」

「いやいや、ここは知り合いから教えて貰っただけだよ。花鶏見つけたのも偶然だし」

けれど、気に入って貰えたなら何よりだ。

「もう一ついる？　さっきマミちゃん、二つの味で迷ってたでしょ」

「……うっ」

僕の申し出に、マミちゃんはかなり迷うような表情をしたが、

「ごめんなさい。二つ目はちょっと遠慮しておくわ」

「？　何故に？」

「……甘いものはね、体重に響くの……」

「……あー」

しょんぼりマミちゃん。クレープ屋の看板を見ているところから察するに、自制心をフル活用させているんだろう。

「最近は鹿目さん達によくお菓子振る舞ってたから、つられて一緒に食べ過ぎちゃったし……」

「んー。僕から見ると、そんなに変わってないと思うけど」

変わらず見事なスタイルだ。最近のゲーム風に言うとバリボー。

しかし、マミちゃんの表情は晴れない。

「男子の視点から見たらそうなのかも知れないけれどね……体重計はしっかり真実を語ってるのよ」

「……」

なんとなーく、僕は視点をマミちゃんの『ある部分』に移す。

……ひょっとすると、増えた体重ってむｎ

「ていっ」

マミちゃんの水平チョップが、僕の頭にヒットした。

「なにすんのさ！」

「なんか城戸くんから邪な視線を感じました」

――見抜いてらっしゃる。

言いながら、マミちゃんは肩を抱きながら距離を取ってしまう。私、ショックです。

まぁ、自業自得な自覚はあったので、ひとまずマミちゃんから目を放した。

「……あ」

人混みの中、ある人物に目がいった。

「マミちゃん」

「なに？　　また煩悩が刺激されるようなものでも見つけたの？」

「うん。それについてはマジで謝るから勘弁してください。――ほら、あれ」

ひそひそ声で謝罪しつつ、僕がこっそり指差す先、マミちゃんもその人物を見つけ、目を見開く。

「秋山蓮花……！」

黒コートという変わり映えのしないファッションに身を包みながら、蓮花は何か真剣な様子で、歩みを進めている。

「何やってるんだあいつ。ただ買い物に来たにしては、思い詰めたような顔してるけど……」

「……もしかして、誰かの後をつけてるのかな？」

マミちゃんが言う。

「ほら、普通に歩いてるように思えるけど、人混みの多い場所を選んで歩いてるように見えないかしら？」

「おお、マミちゃんナイス」

確かに、蓮花は意図的に人の多い場所を選びながら、目立たないようにして歩いている。

木を隠すなら森の中、というわけか。

「誰を尾行してるのかまでは、さすがにわからないけど」

「ふむ……よし、追いかけてみようか！」

クレープの紙をゴミ箱に放り投げ、僕は立ち上がった。

「蓮花達が何考えてんのか、知るチャンスかもしんないし」

「うーん、それには賛成だけど、鹿目さんや美樹さんはどうするの？」

「ちゃんと連絡入れとけば大丈夫でしょ。マミちゃん、二人のメアドは？」

「え……う、うん。知ってる、けど」

そこで何故か、マミちゃんは苦手な動物に出くわしでもしたかのように、彼を引きつらせた。

「マ、マミちゃん？　どうしたの、なんか凄い顔になってますが」

「あ、あのね、城戸くん。わた、私の携帯貸すから、城戸くんが連絡してくれない？」

「へ？　何で？　別にマミちゃんが連絡してくれればいいじゃん」

着信名がマミちゃんで声が僕じゃ、向こうにいらない混乱を与えるだけだろうに。
だが、

「その……長い間ずっと一人だったから、未だに電話越しは緊張してうまく話せないし……」

「……」

「メールとかも、どこまで砕けた表現使っていいのかわからないから、味も素っ気もない文章になっちゃうし……」

「……」

「実際この前、美樹さんにメール送ったら『マミさんそんなに文体固くしなくていいですよ（^―^；）』って帰ってきて――」

「わかったマミちゃん。僕が連絡しよう」

だからこれ以上、長期のぼっち期間が生んだ悲劇エピソードを語らないでくれ。
最後の方なんてマミちゃん、明らかに涙声だったじゃないか。

携帯を受け取り、蓮花を追いながら手早くメールを打つ。
よし、我ながら簡潔且つ重要な点のみを纏めた文章――ふっ、自分の才能が怖いぜ。

「城戸くん、秋山さん動いたわよ」

「オッケ、見つからないように行こう」

さて、何が起こることやら。

◆◆◆

ｆｒｏｍ．巴マミ
ｓｂ．追跡なう

蓮花を見つけたので尾行ちゅー。
そのまま集合場所で待機ヨロ。また連絡します。ではノシ

「……マミさん、こんなフランクにＴｗｉｔｔｅｒ用語使うようなキャラだったっけ」

「た、たぶん城戸さんが打ったんじゃないかな」

届いたメールを読みながら、むしろそうであって欲しいと願うまどかとさやか。
もしこれがマミ本人のものなら、頼れる先輩のイメージが一緒で瓦解するからである。

――龍二達の予想通りというか、さやかの寝坊により、彼女を迎えにきたまどか共々、二人は待ち合わせに遅れていた。

「じゃあとりあえず、このまま待ち合わせ場所まで行こっか」

「うん」

頷いて、まどかもさやかに並んで歩く。

「秋山蓮花か……あの人、転校生と組んで何考えてんだろーね」

さやかは携帯を閉じながらぼやく。
まどかや龍二ほどではないが、彼女も二人のことは気になっていた。

「転校生もさ、最初に会った時はキュゥべえ狙ってたのに、この間の戦いじゃ城戸さんとマミさん助けたっていうし……敵か味方かはっきりして欲しいよ」

「でも、ほむらちゃんも秋山さんも、魔女やモンスターを倒してるのは間違いないんだから……」

「わかんないよー？　少なくともあの二人、あたし達に協力的じゃなさそうだったし」

まどかもそれを言われると痛い。
詳しいことを話してくれない以上、相手をそうは信用できないというさやかの心理は、至極まともな意見だったからだ。

（ほむらちゃん……いったい何をしようとしてるんだろう）

それを話してくれれば、みんな一緒に戦えるかも知れないのに。

「私、やっぱりもっと話してみたいな。ほむらちゃんや秋山さんと……」

「……うーん、あたしは危ないと思うけどねー」

しかし、そんな否定的な言葉とは裏腹に、さやかはニカッと笑って、まどかの肩に腕を回す。

「まっ。まどか本人が言うなら止めないよ。アンタがそうしたいっ

て思った時は、だいたいアンタが正しい時だしね」

まどかは偶に、思いがけず物事の核心を突くことがある。
長年、彼女の友達をやってきて、さやかはそのことをよく知っていた。

「なんか手伝って欲しいなら言いなよ。さやかちゃん頑張っちゃいますぜ」

「――うん。ありがと、さやかちゃん」

本当に、私は友達に恵まれている。
そう感じながら浮かべられるまどかの笑みは、とても柔らかかった。

◆◆◆

暁美ほむらはビルの屋上にいた。見下ろす先は、何のことはない日常の景色――まだそこにいて、友達と楽しそうに語らうまどかの姿。

「……」

相変わらずの無表情。しかしその内に秘められた感情は、固く握られた拳にも現れている。

（……まどか）

私はいつになったら、あなたが笑っていられる世界に辿り着けるのだろう。
どうしていつもあなたは、世界の闇に呑み込まれてしまうのだろう。

「……っ」

ずきりと痛んだ胸を、覚悟で抑え込む。
今更だ。嘆いてどうにかなるものなら、私はこの『旅』を始めたりしなかった。

まどかは助ける。必ず。

『私達で終わらせるぞ。このふざけた運命をな』

（……ええ、絶対に終わらせる）

出会った時、あの蝙蝠の騎士が言ってくれた言葉。
本当におかしな人だった。冷淡なクセに、変なところで熱くなる。
でも――だからこそほむらは、蓮花を信じられた。

今こうしている時にも、彼女は協力してくれている。
だから私も、自分にできることをしなくては。

「……向こうはどうなってるのかしら」

携帯では尾行の邪魔になる。テレパシーを使うか……。
ほむらが耳に手を当てた時だった。

――ヒュンッ！

「！！」

ほむらの身体が反応できたのは、ほとんど偶然だった。
盾を後方に構え、不意打ちを弾く。

そのままハンドガンを取り出し、照準を合わせるが、

「えっ！？」

ほむらは目を見開く。背後には誰もいない。殺風景な屋上が広がっているだけだ。

――ヒュンッ！

そうこうしているうちに二撃目。今度は防げず、肩をかすってしまった。

（どういうこと……？）

盾で防いだ時、確かに衝撃があった。なのに攻撃手は見えない。ならば遠距離からの狙撃――いや、だったら弾丸が転がっている筈。

考えを纏めている間にも、姿無き攻撃は続いている。まったく発射点がわからない為、防御のしようがない。

（ならっ！！）

ほむらは盾の中から新たな武器を取り出し、放り投げた。

スプレー缶に似た煙幕弾は、床で乾いた音を鳴らし、濃い煙が散布する。

密閉空間でないここでは、その効果もたかが知れているが、ほむらにとってはそれで十分。

煙に目を凝らすほむら。すると一点、煙が不自然に揺らぐポイントが確認できる。

「そこっ！！」

銃器から打ち出したのはペイント弾。

赤い染色料が、姿無き攻撃手を現実に映し出した。

『クルルルルッ……』

「……モンスター」

目印をつけられた以上、もはや姿は隠せないと悟ったのか、そのモンスターは姿を現した。

ギョロついた眼と、緑色の身体。ほむらを攻撃したであろう長い舌。

カメレオン型モンスター『バイオグリーザ』だ。

「透明化しての奇襲……カメレオンそのまんまね」

神崎の作った生命体と言う話だが、本当、デザインに忠実というかなんというか……。

少し呆れながら、ほむらはハンドガンを携え、バイオグリーザと対峙する。

「私を狙うなんて、運が無かったわね。――消えて貰うわよ」

ほむらの冷ややかな声が響く中、漆黒に輝く拳銃が火を噴いた。

あんただけは許せない．１（後書き）

・キュゥべえとライダーとの契約内容公開。魔法少女と違ってかなりシビアな契約……まぁあの白いのは、そのシビアな契約に乗りそうな人間を選んでるんでしょうがね（笑）

・まどマギのキャラって、私服姿なかなか無いですよね。劇中だと杏子とさやかは私服見せて、まどかとほむらは制服かパジャマ……いや、まどかの女神服もあったか。
ってかマミさん、回想以外だと制服しか着てな……うわなにするやめ（ｒｙ

・マミさんのぼっち武勇伝。この人、一人カラオケとか行き慣れてそうだなぁ……。

・まどかとさやかはやっぱりこうあるべきなんだよ！（力説）
後半はさやかの余裕が無くなったせいで険悪になっちゃったけど、やっぱり二人は仲良くあるべきなんだよ……

・先行登場のバイオグリーザ。果たしてその目的は。

次回、蟹の正体公開。
お楽しみに。

あんただけは許せない．２

尾行なう。
携帯でツイートしたいところだけど、今は前方の追跡対象に集中しよう。

「相変わらず誰を尾けてるのかはわからないわね」
「でも、だんだん人通りが少なくなってきてるし、焦らなくてもそのうちわかるよ。今は蓮花を見逃がさないようにしないと」

そう。意外に今回のミッションは重要性が高い気がする。
蓮花の行動原理の糸口でも掴めれば、今後一緒に戦えるキッカケになるかも知れないからだ。

「むっ、曲がり角をまがったな。行くぞイエローラビット」
「え、なにそれコードネーム？　　城戸くんの中での私のイメージってウサギさん？」

マミちゃんは釈然としてなさそうだったが、我ながらいいセンスムだと思う。ほら、可愛さもそうだが、寂しいと死んじゃうあたりとか似てない？

果てなくどうでもいいことを考えながら、僕とマミちゃんは追跡を続ける。
しかし、そろそろ商店街のエリアから出る頃だっただろうか、再度十字路をまがったあたりで、蓮花の姿を見失ってしまった。

「あ、あれ？　いない？」

おかしい。
引き離されるような距離も、隠れる時間も無かったはずはずだ。

「もしかして、あの一瞬のうちに変身して、鏡の中に隠れたのかも」

「いや、結界とミラーワールドが繋がらなきゃ、鏡の中には入れないはずだよ。魔女の気配も近くに無いし……」

「で、お前たちは何をしているんだ？」

「！！」

ぎゃあ。
僕らの全力の叫び声は、電柱に身を潜めていた蓮花によって遮られ

た。
両手で口を抑えられたまま、同じ電柱の影に引き込まれる。

『むー！』

「暴れるな。落ち着いたようなら放してやる」

そう諭す蓮花に口を塞がれたまま、僕らはうんうんと頷く。
手が退かされ、軽く咳き込む。
おいおい、本気で窒息しかけたぞ……この女子高校生、ＣＱＣを会得しているというのか！

「けほっ、けほっ、さ、最初から気付いてたの？」

「ああ。城戸は言うまでもないが、場数を踏んでいるにしてはお粗末だったな。巴マミ」

あれ、さりげなく僕まで罵倒された？
マミちゃんも「……いくら私でも、誰かを尾行する機会なんてないもん」と口を尖らせている。

「それで、何故私をつけてきたんだ？　　まぁ、おおよその察しはつくが」

「……お前とほむらちゃんが何を考えて動いてるのか、知りたかっ

たから」

隠し立てはしなかった。
むしろここで下手な嘘をつく方がマズい選択肢だろう。

「お前達の行動は謎だらけだ。契約を阻もうとしたり、僕達を助けたかと思ったら、　今度はキュゥべえを襲ってる。それだけじゃない。素性がまったく知れないシザースのことも、何か知ってるんだろ？」

「……」

「教えてくれ。蓮花、お前は何者なんだ」

僕とマミちゃんの視線を一身に受けながら、蓮花は沈黙する。その佇まいには僅かな揺らぎもなく、言葉のない空間をより重厚なものにしていた。

「無理だな」

躊躇いなく、蓮花は質問を切って捨て、そのまま淡々と言葉を重ねていく。

「まだ悪魔の掌の上で踊らされているお前達に、私達の知る真実は

受け入れられない」

「受け入れられない？　……どういう意味だよ」

「言葉通りの意味だ。とにかく、私もほむらもお前達に話すことは――」

急に蓮花は言葉を切り、また歩みを進めていく。
僕達はしばらくその場に立ち尽くしていたが、

「行こ。城戸くん、このまま引き下がったら、それこそ何もわからないままだわ」

「うん」

蓮花の言う真実がどんなものかは知らないが、少なくとも何か良くないことが起こっているのは明白だ。
僕は仮面ライダーとして、マミちゃんは魔法少女として、その事態を見過ごせない。

僕らが後ろに追い付くと、また電柱に隠れていた蓮花は、心底鬱陶しそうに睨みを利かせる。

「おい、いい加減にしろ。どこまでお前達は余計なことに首を突っ込む気だ」

「生憎と、余計なことに首を突っ込まないと気が済まないタチなんだよ」

「もちろん、あなたと暁美さんのこともね。あなた達から教えてくれないなら、私達で勝手に調べさせて貰うわよ」

蓮花は表情を更に歪め、それはもう深々と溜め息をついた。

「溜め息つくと幸せ逃げるぞ」

「誰のせいだと思ってる。……ったく、本当に死んでも治らないのか、こいつのバカさ加減は」

ぶつくさと文句を言う蓮花からは、さっきの刺々しい態度が少し抜けているように思えた。
よっしゃ、せっかくだし、もっと踏み込んでみよう。

「で、今は何をしてるんだ？　　同じライダーなんだし、これくらいは教えてくれよ」

「こいつマジうぜえ」という目線が全力で突き刺さったが、やがて観念したように、蓮花は道の先を指差す。
よし、熱意の勝利だな。嬉しくて後ろにいるマミちゃんの「熱意って言うよりしつこさよね……」って呟きも聞こえないぜ。

「あいつを監視していたんだ」

僕とマミちゃんは二段重ねになるような形で、電柱から顔を少しだけ出す。
蓮花の指先は、道行く人に聞き込みを敢行している一人の男性を示している。

「あれ、あの人……？」

遠目でわかりづらいけど、なんか見覚えが……。

「この間の、刑事さんよね？」

マミちゃんに言われて思い出す。
前に見滝原病院の黒い噂だかなんだかを調べてた刑事さんだ。
名前は確か、須藤さんだったかな。

「蓮花、あの刑事さんと知り合いだったのか？」

「……まぁ、そうと言えなくもないな」

あまり知り合いたくない人種だが。と呟く様は、あまり好意的な関係には見えなかった。

「けど、どうしてあの刑事さんを尾けてるの？　魔女の刻印があるわけでもなさそうだし、モンスターに狙われてるわけでも……」

「シザースだ」

「えっ？」

聞こえなかったか？　と蓮花は呆けるマミちゃんに言い直す。

「あいつが、仮面ライダーシザースの可能性がある」

マミちゃんが目を剥き、もう一度刑事さんを見やる。僕もまた、走り抜けた衝撃に動揺を隠せなかった。

「あ、あの刑事さんがシザース？　えっ、だって……」

「何を驚いている。変身すれば素顔はまったくわからない。ならば、誰が仮面ライダーになってもおかしくはないだろう」

「……あの刑事さんが、僕達の命を狙った……？」

「確証はないがな。しかし、かなり確率は高い。あとは変身する時を押さえれば、間違いはない」

僕はまだ信じられずにいた。多分マミちゃんも同じだろう。
この前会った時、須藤さんはむしろ刑事の鏡のような印象を受けていたし、今だって職務に忠実に、事件の聞き込みを続けている。

だが、蓮花の確信じみた口調にも、嘘らしさは感じられない……いや、勘だけどさ。

「けど、仮にも警察の人が他人の命を狙ったりするなんてこと……」

「別に信じて貰おうとは思っていない。ただ――これだけは覚えておけ、巴マミ」

蓮花の声が、急に低くなった。

「人間は自分の願いの為にならどんなことでもできるんだ。……例えそれが、他人の命を奪うことであってもな」

言い放つ蓮花に、僕達は圧倒された。
例えようのない力強さを帯びた蓮花の瞳は、その宣言に意欲な現実感を与えてくる。

「……あいつが移動したな。着いてくるなら勝手にしろ」

いつものダウナーな瞳に戻り、蓮花はさっさと刑事さんを追いかけていく。

気圧されていた僕とマミちゃんも、慌てて蓮花の後に続いた。

（『願い』……）

マミちゃんと併走しながら、僕はその単語だけを脳内で復唱していた。

最近妙によく聞く単語。魔法少女達が魔女を倒し続ける対価として叶えるモノ。

片や僕は仮面ライダーになる時、何も叶えて貰っていない。

ただマミちゃんを助ける為、誰かを守るために変身した。

（けど……）

妙な歯がゆさが残る。見つけた筈の解答を途中でド忘れしたかのようだった。

僕に願いはない……果たして、本当にそうだったのか。

「城戸くん？」

気付くと、立ち止まっていた僕の顔をマミちゃんが覗き込んでいた。

「どうしたの？　早く行かないと」

「あ……うん」

曖昧に頷いて、また走り出す。

無視してはならなかった疑問を、頭の片隅に仕舞ったまま。

◆◆◆

「ちょこまかと面倒なカメレオンね……」

硝煙を靡かせるマシンガンを携えながら、ほむらは毒づく。

そんな彼女を嘲笑うかのように、バイオグリーザは倒されることなく、昇降口の上に存在していた。

『クルルルルッ！』

このモンスター、透明化を封印してもフットワークは軽く、ほむらの銃撃を避け続けているのだ。
そのくせ偶に思い出したように攻撃してくるので、行動パターンも読みづらい。

（面倒くさい……）

無表情なほむらの顔に、はっきりと苛立ちが浮かんだ。
魔力の無駄遣いは避けたかったが、こうなるとこのモンスターの相手をしている時間の方が勿体無い。

バイオグリーザを見据えながら、ほむらは無骨な円形の盾をガキリと回した。
しかし、

『クルッ！』

突如、バイオグリーザがあらぬ方向に目線を向け、昇降口から飛び上がった。
地上に落下しながらビルの壁にへばりつき、窓ガラスの中からミラーワールドに飛び込んでいく。

「……逃げた？」

釈然としないまま、ほむらはひとまず変身を解く。

（ミラーワールドから飛び出したってことは契約モンスターね……）

だとすれば、バイオグリーザの行動には、契約したライダーの意図が反映されているのは明白。
バイオグリーザが引き上げたのは、既に目的を果たしたということか。

（私を倒すのが目的なら、モンスターだけでは攻めないハズ）

契約しているとはいえ、一介のモンスターだけで挑むほど、相手もバカじゃないハズだ。

だから、理由は別にある。
倒すこと以外で、自分と一戦交える理由。

（……陽動！！）

思考が繋がった先にあった答えに、ほむらは表情から血の気が失せる。

脳裏に浮かぶのは、さっきまでここから見守っていた友人の姿。

「っ、やられた！！」

目にも止まらぬスピードで再変身し、盾が時計のように回転すると、ほむらの姿は一瞬で屋上から消えていた。

◆◆◆

ほむらの姿を、隣のビルから見据える影。ライトグリーンを基調としたスーツに、カメレオンらしい大きく見開かれた複眼。片手には、バイオグリーザのカードもある。

「――さて、あとはシザースのお手並み拝見といこう」

ほむらが消えたのを確認し、仮面ライダーベルデはその場を後にした。

◆◆◆

尾行開始から一時間ほど。商店街はとっくに抜け、閑静な住宅地を歩いている。
今のところ、刑事さんに怪しいところはない。

「なぁ、やっぱり間違いなんじゃないのか？」

「そう思うなら帰れ。邪魔だ」

ちょー冷たい。
前々から感じていたことだけど、蓮花は本当に女の子らしさが欠落していると思う。
マミちゃんを見習え。

「男って言われても納得できるしなぁ……」

「？　何か言った？　城戸くん」

僕の小言にマミちゃんが反応する。

「いや、マミちゃんは女の子らしくて可愛いなーって話」

「にゃっ！？　い、いきなり何言ってるのよ！！」

「……お前ら、冗談抜きで帰ってくれ頼むから」

なんか物凄く疲弊した声で、蓮花が呟いた時だった。

――キィィィィンッ！！

『！！』

僕と蓮花が同時にデッキを取り出す。近い。音のデカさからして、発生源は本当に至近距離にある。

自然と、目線が前を歩く刑事さんに向かった。……本当に、蓮花の言う通りだったのか。
ソウルジェムを握るマミちゃんの顔も、苦虫を噛み潰したようなものになっていた。

「……契約モンスターを呼び出すつもりかしら」

「ああ、恐らくまた人間を喰わせるつもりなんだろう。……さて、そろそろ行くぞ」

合図と共に、僕達は刑事さんに近付いていく。その間もノイズはどんどん強まっていき、やがてゴミ捨て場にある割れた鏡に、あの金色の蟹が映り込んだ。

『グルルルルッ……！！』

うなり声を挙げた蟹は、ハサミをしゃきんと鳴らして――

自らの獲物――刑事さんに襲いかかった。

◆◆◆

「ぐ、う！？」

ハサミに捕らえられ、刑事さんはどんどん鏡へと引き込まれていく。行き先は、鋭利な歯の並んだ蟹の口の奥。

「な、なんだこの怪物は！？」

だが、刑事さんの顔が恐怖に引きつってもなお、僕達は動けずにいた。

「お、おい！　どうなってるんだよ、契約モンスターは契約者を襲わないんじゃなかったのか！？」

僕が聞いても、蓮花は唖然としたままだった。目の前の出来事に頭がついていけないらしい。

「二人ともボサッとしてないで！！　あのままじゃ刑事さん食べられちゃうわ！！」

冷静さを取り戻せたのは、マミちゃんの喝のおかげと言わざるを得ない。

すぐに僕達は三人がかりで、刑事さんを引っ張る。

モンスターの力は確かに強いが、こっちは刑事さん本人を入れれば四人。

蟹は無念そうに一鳴きしながら刑事さんを解放し、ミラーワールドへと消えていった。

「はぁっ、はぁっ……、だ、大丈夫ですか刑事さん！？」

急に蟹がハサミを放したせいで、僕達は後ろに倒れ込む形になる。
だが刑事さんは、目を閉じたまま動かない。

「ちょっと刑事さん、しっかりして下さい！！」

「大丈夫よ城戸くん、ショックで気絶してるだけみたいだから」

マミちゃんが淡々と告げ、僕は胸を撫で下ろし、鏡の前で立ち尽くす蓮花を見る。

「蓮花」

「……笑いたいなら笑ってもいいぞ。自信満々にそいつを疑っておいて、このザマだからな」

「お前を笑って状況が変わるなら、いくらでも笑ってやるけどね」

だが今は、それどころじゃない。

「刑事さんがシザースでないなら、シザースは一体どこの誰なんだ？」

「……」

蓮花は無言だったが、突然顔を挙げ、自分の耳に手を当てた。

「……ほむらか。どうした」

「？」

え、ほむらちゃん？

おかしいな。どこにもいないけど。

首を傾げる僕に、マミちゃんが説明を入れた。

「あれはテレパシーよ。魔法少女の使える力の一つで、遠くの相手に思念を送って会話ができるの」

……便利だなぁ、魔法少女。

蓮花はしばらく会話を続けていたが、途中で急に深刻な顔つきになり、

「……わかった。すぐに合流する」

耳から手を放し、蓮花は僕達に向き直った。

「ほむらから連絡があった。
――鹿目まどかと美樹さやかが、敵に捕らわれたらしい」
「は！？」
「鹿目さんと美樹さんが！？」
蓮花が頷く。
「本物のシザースの仕業だろうな」
「でも、なんでまどかちゃんとさやかちゃんを……」
「……人質でしょうね。戦いを有利にさせる為の」
マミちゃんは焦りと困惑を入り混ぜたような口調で、口元に手を当てた。
「私や城戸くんにとっては、かなり友好的な作戦だわ。もし、鹿目さんと美樹さんを戦いに引き出されたら、私達に打つ手は無いもの」
「そんな……じゃあ早く、二人を見つけ出して助けないと！」

「シザースの正体もわからず、どうやって見つけるつもりだ？
砂漠でコンタクトを探すようなものだぞ」

蓮花の正論に、僕はぐっと押し黙る。
そう、何よりもまずは、シザースの正体を探り当てなきゃダメだ。
ヤツが二人を人質に使ってくるよりも早く。

（でも、どうすれば……）

手がかりはゼロ。
人口もかなり多い見滝原で、顔もわからない人間を探すなんて――

「……？」

「？　城戸くん、どうし……」

「ごめん。今はちょっと話しかけないで」

静かに頭に手を沿える。
なんだ、今何が引っかかったんだ？

（そうだ。見滝原は県内でもかなり人口が多い……そんな中で、僕達が尾行してた刑事さんが、目の前で狙われるなんて偶然が、そうそう有り得るか？）

もしこれが偶然ではなかったとしたら。
あの蟹は無差別に人を襲ったのではなく、ピンポイントで刑事さんを狙っていたのだとしたら。

シザースは、刑事さんが消えて都合のいい人間ということになる。

『事実、病院の関係者が数人行方不明になっているんです。口封じか何かに巻き込まれた可能性も含めて捜査しているんですが……』

刑事さんの言葉が蘇る。口封じ。蟹が行っているのがそれだとすれば、病院の関係者。
思考が次々と繋がり、脳内に再生されるのは、見滝原病院に赴き、シザースと二戦目を交えた時のこと。

◆◆◆

「城戸くん！」

マスケット銃を再召喚し照準を合わせる。
シザースが感づいたがもう遅い。

――タァン！！

二撃目。
放たれた弾丸はシザースの頭部の左側面にヒットした。

◆◆◆

「あ、解谷先生。……あれ？　先生、おデコに痣ができてますよ」

「ああ、大したことはないよ。さっきそこの廊下で転んじゃってね」

◆◆◆

「……そうか」

可能性の欠片が、一つの事実を照らし出した。マミちゃんと蓮花がこちらに注目する中、僕は告げる。

「わかったよ。シザースが誰なのか」

◆◆◆

「さて、と……」

どこかの暗い一室。
シザースは物憂げに呟いた。
すぐ側で横たわるのは、気絶したまどかとさやか。

「結局、彼の口車に乗ることになってしまいましたね……」

まぁ、これであいつらを潰せるのなら是非もない。特にあの龍騎という戦士は、自分から見ただけでも甘過ぎる。
人質は効果的なものになるだろう。

「これで私も、最強のライダーにまた一歩近付くわけですか……」

湧き上がる高揚を抑えきれなかった。

最強。
なんと甘美な響きだろうか。こんな退屈な人生よりも余程価値がある。

不気味な笑い声を漏らしながら、シザースは変身を解除した。

「さぁ、そろそろフィナーレといきましょうか！」

男――解谷蛍の表情は、黒々しい思念を反映するかのように歪んでいた。

あんただけは許せない．２（後書き）

シザース正体暴露。
解谷蛍の漢字には分解すると蟹の文字が現れます。
誘拐されたまどか＆さやか。果たしてどうなるのか。
お楽しみに！

あんただけは許せない．３

「解谷蛍？」

「ああ、見滝原病院に勤めてる医者で、さやかちゃんの知り合いだよ」

走りながら、龍二は事情を知らない蓮花とほむらに説明を続ける。

「それに刑事さんが調べてた違法取引の犯人……それが解谷先生だとしたら、あの蟹が刑事さんを狙ったのだって納得がいく」

「けど、それだけじゃちょっと強引過ぎるんじゃない？　確かに鹿目さんや美樹さんの知り合いって意味じゃ可能性は高いけど……」

「いや、多分間違いないよ。マミちゃん、キミが決め手になってくれたからね」

「え、私？」

見覚えのない事実に、マミは首を傾げた。

「前にシザースと戦った時にマミちゃん、マスケット銃でアイツの頭を撃っただろ？　その後すぐに出会った解谷先生も、同じ場所

に痣が出来てた。偶然にしては上手すぎる」

「成る程な……クソッ、油断していた。“前”と同じ契約者である保障などないのに……」

蓮花が舌打ち混じりに呟く隣で、ほむらは黙々と足を動かしていた。それ以外の身体機能全てを放棄しているかのような懸命さである。

無表情の下に尋常でない混乱を見て取ったのか、蓮花は声を落として言う。

「すまないほむら……“前回”の情報にかまけて油断していた私のミスだ」

「……油断はお互い様よ。気にしないで」

一応反応は返ってくるが、いつも以上にそっけない。

彼女はそれだけ、自身の甘さを悔いていた。

（ちょっと考えればわかった筈なのに……っ！）

想起するのはバイオグリーザとの戦い。

あんな長引くだけの戦い、陽動の可能性は即座に考慮するべき。そ

れを阻害したのは自身の油断。

ほむらは甘えすぎていたのだ。運命が今までにない良い変化を見せている『このルート』に。

（まどか……）

無事を祈るしか出来ない自分がもどかしい。
本当、こんなことじゃいつまで経っても――

「暁美さん」

唐突にかけられる声。気が付けばマミが立ち止まり、こちらを振り向いている。
しかしほむらが、さっきの言葉が彼女のものだと認識するには時間を要した。
だって、

（……暁美、さん？）

もう久しく呼ばれなかった名前。――少なくとも、マミと敵対したルートでは、一度として呼ばれなかった名前。

「正直――あなたが何を考えてるのかは今でもよくわからないわ。信用できない部分も、まだまだ沢山ある」

けど、とマミは続けた。

「あなたが二人を助けようとしてくれていることは、十分に信じられるわ。だからお願い――二人を助けるまでいいから、あなた達の手を貸して」

「……！」

ほむらが僅かに目を見開いたのに気付かぬまま、マミは真摯さと不安を入り混ぜながら言う。

「……ごめんなさい。あれだけあなたを拒絶しておいて、虫のいい話なのはわかってるわ。だけど、あのライダーに勝つには私と城戸くんだけじゃ足りない。勝って、二人を助けるにはあなた達の力が必要なの」

龍二と蓮花は口を閉ざしている。ほむらとマミ、今のこの二人の会話は、とても他人の入る余地はなかった。

（けじめ――なのかな）

龍二は思う。
彼女――ほむらがただグリーフシードを独占するのが目的でないのは、マミにももうわかっている。
だからこうして、ほむらに協力を申し出ているのは、彼女なりの落とし前だ。

もう敵対はしない。味方になれるかはわからないけれど、こちらから歩み寄らないまま、拒絶することだけはしないという意思表示。

「私は別に構わない。断ってもどうせそこのバカはついてくるだろうからな」

「相変わらず失礼なこと言うねお前は」

図星だけど。
心の声を呑み込む龍二はさておき、蓮花の了解は得た。
それに対する、ほむらの答えは、

「……是非もないわ。こんな状況になってしまった以上、あなた達の力も必要になるかも知れない」

「――そう。ありがとう、暁美さん」

柔らかく笑むマミ。好意的な視線がむず痒かったのか、ほむらは髪

をいじりながら顔を逸らした。

勢い余って、ちょっと意地の悪い質問までしてしまう。

「それにしても意外ね、巴マミ」

「えっ？」

「いくら鹿目まどかと美樹さやかが危険とはいえ、わざわざ私に協力を求めるなんて、以前のあなたなら考えられなかった。どういう風の吹き回しなのかしら？」

「……んー」

ちらっとマミは龍二を横目で見て、困ったように頬を掻く。

「誰も彼も信じようとする優しいお馬鹿さんのせい、かな？」

誰のことだよそれ。

龍二が不満そうに口を尖らせるが、特に不満は漏らさなかった。ほむらとマミ――多少なりとも、この二人のわだかまりが解けたのであれば、それは喜ぶべきことなのだから。

◆◆◆

「さて、まずは彼女達をどこかに隠しておかなければなりませんね……」

気絶しているらしいまどかとさやかを見ながら、解谷は唸る。
こちらの素姓を明かす必要はない――ただ自分が、この二人を人質に取っていることを示せば、あの四人は容易く無力化できる。

その為にはまず、人質をもっと見つかりにくい場所へと移動させ、奪還の可能性を潰すべきだ。

現在、まどかとさやかを捉えているのは、病院地下の今は使われていない倉庫。
滅多に人が訪れることはないが、それでなくとも病院という施設は人目が多すぎる。
監禁場所を探す時間がないまま、仕方なくここを選んだが、そろそろ移動させた方が無難だろう。

そう思い、解谷はデッキを取り出すが――

「待て！」

静寂を切り裂く声。

解谷が振り向くと、そこには一人の少年と三人の少女。
ほむらとマミに至っては、既に魔法少女の装束に身を包んでいる。

「そこまでです。解谷先生――いや、仮面ライダーシザース！」

解谷を見つめる龍二の瞳には、もはや敵意しか宿っていない。
彼と同じような表情を浮かべる三人を順々に眺めながら、解谷は溜め息をついた。

「よくわかったね。私がシザースだと」

「ああ、途中までまんまと騙されましたよ。最近物騒だから気をつけろ、なんて言っておきながら、その裏じゃ僕達を殺す算段をつけてたなんてね」

「言動は判断材料にならないよ。人間は所詮、偽りばかりを口にする生き物だ」

涼やかな口調は変わらないが、目はまるで笑っていない。
改めて全員が、この男が敵であることを認識する。

「鹿目さんと美樹さんを離しなさい。いつ私の手が滑るかわからないわよ」

「ふっ、どちらが優位に立っているのか理解していないようだね」

マミのマスケット銃による威嚇にも屈さず、解谷が【ＡＤＶＥＮＴ】のカードを使う。
倉庫にあった鏡の中から現れたボルキャンサーが、鋭利なハサミをまどかとさやかの首筋に当てた。

「……っ！」

「おっと、キミは特に動かないで貰いたいね。暁美ほむら」

反射的に盾へと手を添えていたほむらの動きが止まった。

「キミの魔法は特に得体が知れないからね……巴マミ、キミも彼女達の命が惜しいなら、変身を解きたまえ」

「……わかったわ」

二人の命は危険に晒せない。
マミとほむらが、静かにソウルジェムを掲げ、変身を解除する。

「心配しなくても、キミ達を殺すつもりはないよ。ただ、そこの仮面ライダー二人は別だ」

「……やはり、狙いは仮面ライダーだけか」

蓮花がどこが呆れたように呟く。この状況においては、あまりにミスマッチな仕草だったが、解谷には虚勢にしか見えない。

「そんな力で何を望むつもりだ。金か？　地位か？　いずれにせよ、浅はかな選択としか思えないな」

「ふん、キミ達には関係のない話だよ。さぁ、デッキを床に置いて貰おうか」

ボルキャンサーの刃が僅かにまどかの首筋へと触れた。
玉のような血が滲み、一筋の赤色が流れ落ちる。

全員が息を呑んだ。

「次はありませんよ」

最後通告に、龍二と蓮花は同時にデッキを床に置く。
解谷は契約のカードをちらつかせ、いつでもまどか達を消せると威嚇しつつ、慎重にデッキの前まで歩いていった。

やがて漆黒のデッキは、両方が解谷の手に渡ってしまう。

「クックック、これで遂に二人減ったね……」

あとはこのデッキを粉々に砕けば、奴らは契約モンスターに喰い殺され――

「――お医者さんが油断ってのはマズいんじゃないですか？」

「何っ！？」

龍二がそう呟くのと、蓮花が隠し持っていたペットボトルの中身をばらまいたのが同時だった。

――宙を漂った水は、鏡面となってミラーワールドの扉を開く。

「ドラグレッダー！！」

「ダークウィング！！」

予め抜き取っておいた契約のカードに呼応し、ドラグレッダーとダークウィングが水の中から飛び出した。

――ガァァァァッ！！

――キィィィィッ！！

「ぐっ！？」

二体のうち、まずダークウィングが解谷の手からデッキを掠めとり、続いてドラグレッダーが、奇襲に困惑するボルキャンサーに襲いかかった。

「まどかちゃんとさやかちゃんを傷つけるな！！」

主の指示に、ドラグレッダーは忠実に従い、まずボルキャンサーの頭部に噛みつき、その巨体を吊り上げる。
ハサミは交差し、二人を中心にして円型に広げられていた為、ボルキャンサーを上に引っ張り上げれば、まどかとさやかは傷付かない。

――グルォォォッ！！

抵抗するボルキャンサー。
だが、ドラグレッダーはトドメと言わんばかりに首をしならせ、ボルキャンサーをミラーワールドへと放り投げてしまう。

「ご苦労様」

龍二の賞賛に一鳴きし、赤龍はダークウィングと共に、ペットボトルの水が作る水たまりから、ミラーワールドへと帰っていった。

「城戸、デッキだ」

「サンキュ」

ダークウィングが掠めとったデッキを、蓮花から受け取る龍二。

「さあ、解谷先生」

「形勢逆転ね」

まどかとさやかの側には、騒ぎに紛れて再変身したマミとほむらが既に立っている。

「……やるね」

肩を竦める解谷に龍二が勝ち誇った笑みを浮かべた。

「契約モンスターを操るのは、何もあなたの専売特許じゃないってことですよ」

――「契約したモンスターは、封印されたミラーワールドから出ることができる」。
ボルキャンサーを操る解谷が頻繁に利用したルールだが、そのルールが適用されるのは龍二や蓮花も同じこと。

解谷もそれはわかっていた。だからこそ襲撃に備えて、一時的なまどかとさやかの監禁場所を『鏡の役割を果たすものが一つしかない』倉庫に選んだ。

ミラーワールドの出口が一つなら、それにだけ注意していれば不意打ちには対処できる。

だが、龍二達はそれを更に先読みし、ペットボトルの水で新たなミラーワールドの扉を開き、襲撃を成功させた。
魔法少女二人が言ったように――形勢逆転である。

「やれやれ……上手くいかないものだね。これだけ面倒な手順を踏んだっていうのに。
こんなことなら、さっさと二人を始末して、死体でも突き付けてやった方が良かったかな？」

淡々とした口調で紡がれる言葉は、あまりにおぞましいものだった。

龍二やマミに至っては震えさえ覚えていた。
本当に――この人は最初に会った時と同じ人物なのか。

「……どうしてですか、解谷先生。あなたが何でこんなことを！！」

「こんなこと、ね……どれのことかな？　臓器売買？　その目撃者を消したこと？　ああそれとも、キミ達を始末しようとしたことかな？」

「全部だ！！」

冷静に自分の罪状をあげつらう解谷。
そこに悔恨が微塵も無かったことが、龍二の苛立ちに拍車をかけた。

「命を救う医者が、なんでそんな簡単に人を殺すなんて言葉を口に

できるんだ！
あなたが殺した人は、もう誰も帰ってこないんだぞ！？　なのにどうしてそんな冷静でいられるんだよ！！」

解谷が何人を手に掛けたのかはわからない。
だが、少なくとも須藤刑事が――警察が見過ごせなくなるくらいの数には達しているだろう。
それだけの人数が、死んだ。

「答えろ先生！！　何が理由でこんな――」

「退屈だからだよ」

何の感慨もなく、解谷は言い放つ。
だが、その言葉を龍二はすぐに受け入れられずにいた。

「退、屈……？」

「ああ、それ以外に私の行動理念はないよ」

道端で世間話でもするようなテンションで、解谷は話を続ける。

「私は――まぁ、社会的に成功した人間というヤツでね。生活には困ってないし、周りにも『人気で面倒見のいい解谷先生』で通って

いる。最終的には医者の世界でもそれなりの地位にはたどり着けると自負しているしね。うん、我ながら何不自由ない人生だと思うよ。――ただね」

退屈なんだよ。
そのキーワードにのみ、解谷は熱を入れた。

「キミ達にはわからないだろうがね。成功した人間というのは、時として現状に満足できなくなるんだよ。何不自由ない人生？　聞こえはいいが、それは何の刺激もない退屈な毎日と同義だよ。少なくとも私はそうだった。そう――『刺激』だよ。私は退屈を塗り潰してくれる刺激に飢えている」

解谷の狂気が空間を侵食しているかのようだった。
龍二だけではない。蓮花もほむらもマミも、解谷の異常性に呑まれつつあった。

「臓器の取引を始めたのもそれが理由さ。バレるかバレないかのスリル――ガキじみてるとは思ったが、まぁ退屈しのぎにはなっていたよ。ただ……いつだったかヘマをしてしまってね。本当にそれが同僚にバレてしまったんだ。
――ちょうどその時だよ。このデッキを手に入れたのは」

「……っ！」

ぐにゃりと解谷の表情が歪み、口角は目元付近まで裂けた。

否、もちろんそれは錯覚だ――重要なのは、龍二がそう錯覚するほどに、解谷の笑顔は人間味が欠落してしまっていたことである。

「クククッ……本当にクセになるよ、仮面ライダーに変身するのは！　裏で誰を殺しても行方不明、しかも、そうやって人間を喰わせればモンスターはどこまでも強くなる――勿論、モンスターを使役する私の力もね！　ああ、“彼”には感謝してもしきれないね！　この力は私に素晴らしい刺激を与えてくれるのだから！！」

狂ったような高笑いが部屋に響き渡る。
地獄の底から響いてくるような声は、恐怖の感情を植え付けるのに十分だった。

「じゃあ、まさかあなたは、たかが退屈しのぎの為に、人殺しを続けてたっていうの……？」

「たかが？　おいおい随分じゃないか、巴マミ。私にとっては死活問題だよ」

マミに答える解谷は、本気で理解できないという風に首を振った。

（この人、壊れてる……！）

そう思ったマミを、誰が咎められるだろうか。
解谷蛍――この男は確実に、何かが壊れた人間だ。

「……さやかちゃんは」

龍二は拳を固く握り締めた。

「さやかちゃんは、あんたに懐いてたんだぞ……そんな子まで、あんたは何の躊躇いもなく殺せるのか」

「やむを得ない選択というやつさ。私が勝ち残り、このシザースの力を永遠にする為にはね。勝つ確率を少しでも上げられるなら――」

“その程度”ことならいくらでもするさ。

無情なる解谷の宣言に――龍二の中で、何かが切れた。

「……僕は人を守るためにライダーになったんだ。誰かを守るためだけに変身するつもりだったし、そしてこれからも……」

「素晴らしい」

賞賛する解谷だが、その声は冷め切っていた。
くだらない。そう考えているのが言外に伝わってくる。

「でも」

顔を挙げた龍二の瞳に、普段の柔らかさは微塵も残っていなかった。

「あんただけは許せないと思う。戦わなくちゃいけないと思う！！」

カードデッキを翳す龍二。

（城戸、くん……？）

敵意に満ちた龍二の表情に、マミはなんとも言えない不安を覚えた。自分の知らない幼なじみの激怒。それが彼女の心を揺さぶったのだ。

「ま、待って城戸くん！　この人にもう勝ち目はないんだから、無理に戦わないでも……」

「巴マミの言う通りだ」

蓮花も頷く。

「四対一の状況で、お前だけが戦うメリットはどこにもない。あとは私とほむらが――」

「――さて、時間稼ぎはこのくらいかな？」

『！！』

解谷のそんな呟きと共に、病院内が奇っ怪な景色へと塗り潰されていく。

――魔女の結界！！

「そんな、キュゥべえは、もうお菓子の魔女の影響はないって言ってたのに、また魔女が……！？」

一度魔女の結界が貼られた場所には、しばらく魔女が集まりやすくなる――だが現に、マミ達が数日前に調査したはずの病院で、結界は再び展開されていた。

しかも、限りなく最悪のタイミングで。

「ほらほら、私に構っていていいのかな？　早く魔女を消さないと、院内の人間がどんどん犠牲になっていくんじゃないかい？」

「……貴、様ッ！」

冷静な蓮花ももはや我慢の限界だった。

しかし、龍二がそれを手で制す。

「蓮花、マミちゃん、ほむらちゃん。三人は魔女の方を頼む。……こいつは僕が倒す」

「馬鹿を言うな、お前には無理だ！　あいつを倒すということがどういう意味かわかって――」

「蓮花」

龍二は張り詰めた声で、蓮花の名を呼ぶ。

「頼む」

「……」

ぎりっ、と蓮花は歯を噛んだ。ダメだ。こうなったこいつはもう退かない。

（まったく……これだからバカは！）

さっきとは別の怒りを露わにしつつ、蓮花は龍二から視線を外した。

「ほむら！　お前はどこかに潜んで鹿目まどかと美樹さやかを守れ！」

「ええ、わかったわ」

指示を予想していたのか、既に二人を担ぎ上げているほむら。ロケットランチャーを悠々と使う力は、遺憾なく発揮されていた。

「巴マミ、お前は私と来い！　一刻も早く魔女を始末する！」

「で、でも……」

龍二の方を見るマミ。

「城戸が心配なら尚更来い！　魔女との戦いが長引けば長引くほど、合流が遅くなる！」

蓮花の喝に、マミは不安そうに瞳を揺らす。しかし龍二は、

「行って、マミちゃん。僕なら大丈夫」

「城戸くん……」

「大丈夫だから、ね？」

有無を言わさぬ龍二の雰囲気に、マミはまだ何か不安気だったが――

「……わかったわ。城戸くん、気をつけて」

こうなったら、彼が無事であるように祈るだけだった。
マミは蓮花に連れられる形で立ち去り、ほむらはいつの間にか消えている。

残ったのは、龍二と解谷の二人だけ。

「来なよ。ここは狭い」

「クククッ、キミはなかなか話が早いね。いいだろう。――1対1だ」

睨み合う二人。
両者の手に握られた二つのデッキ。
もはや小細工はない――ルールはただ一つのみ。

戦わなければ、生き残れない。

「やれやれ……魔女を操るのも楽じゃないんだけどなぁ」

結界の外――病院近くのビルの屋上で、キュゥべえは面倒そうにしっぽを揺らした。

「ま、僕のお膳立てはここまでかな。あんまり前線には出たくないし」

あとはシザース次第だ。と、キュゥべえは赤い瞳に、今まさに結界へと囚われた見滝原病院を映す。

「さてさて……できれば手駒が生き残って、邪魔なライダーを消せれば一番なんだけどねぇ」

――どれだけマイナスになろうが、最終的にプラスになってくれれば構わない。

そう、所詮は損益計算でしかないのだ。

「さぁ、勝つなら勝つ。負けるなら華々しく死んでくれたまえ。仮面ライダーシザース」

あんただけは許せない・３（後書き）

更新遅延マジすみません……（＜＿＞）
あと二話くらいでシザース編は終わりにして、第四話のストーリーに入ろうかと思います。

・ほむらとマミさん、少しだけ歩み寄り。まだわだかまりはありますが、一応「協力はできる仲」にランクアップ。

・解谷は「更にクズいアバレキラー」というイメージで書いてます。初期の仲代先生は悪役ながら卑怯ではありませんでしたが（名乗り中の攻撃はある意味当然ですしｗ）、解谷は卑怯者だし、信念らしい信念もないクズ……って感じですかね。

・キュゥべえが魔女を操ったのは、さやかのソウルジェムをいじって痛覚を戻した時の応用で、同じソウルジェムを原料にしているグリーフシードを操作したと思ってください。
……個人的に、キュゥべえがどこまでソウルジェムに干渉できるのかどうかは知りたいところ。

次回、龍騎ｖｓシザース。お楽しみに！

あんただけは許せない．４

一見すれば一本の柱の如きそれ。
白磁器のような輝きを保つ巨大な骸の腕は、スイングされることで圧倒的な力を生み、結界内に浮かぶ物体を粉砕した。

「痛っ！！」

攻撃の余波によって吹き飛ばされたマミは盛大に尻餅をつき、ナイトは辛くも着地する。

以前も魔女結界の貼られた見滝原病院だが、今回は範囲が異なり、その領域は駐車場にまで及んでいた。平行感覚が狂う道に、車や自転車が浮遊している。

マミの探知によって、今回の結界が駐車場を中心としていることは調査済み――そしてやはりと言うべきか、問題はそこに居座る魔女だった。

「チッ、手強いな」

『◎Ａυ Φ！！』

呟くナイトを見下ろす骨の魔女『Ｋｎｏｃｈｅｎ（クノッヘン）』が、人間には理解できない言語で笑う。
その体躯はニメートルほど。頭部は人間、身体と腕は犬、脊髄から先は蛇で構成され、いずれも肉のない白骨。
胸骨に覆われた中央には、黒い靄が立ち込め、少女らしき姿を象っている。

「骨の強度が高い。俺達の武器では効果が薄いようだ」

「かといって、唯一の弱点っぽい胸骨に覆われた影へ攻撃してみても――」

マミがマスケット銃のトリガーを引く。
寸分違わず、弾が少女を象る靄へと向かうが、それが直撃する前に、ゴムのように伸びた胸骨が弾丸をはじいてしまう。

「こうなっちゃうしね」

ナイトの言う通り、面倒な相手だ。しかし、

「秋山さん。ちょっと時間稼ぎをお願いできるかしら」

「……構わないが、どうするつもりだ」

「ティロ・フィナーレに魔力を最大まで注ぐわ。チャージまでの時間が欲しいのよ」

マミの持つ最大火力、ティロ・フィナーレをもってしても、本来あの骨の防御壁突破は難しい。
だが、通常時よりも魔力を上乗せして放てば、あるいは。

しかしナイトは、返答を渋る。

「成る程、確かに現状では最善の策だ。だが相応のリスクも伴うぞ。配分を誤ればお前は――」

「ええ、魔力は0になるわね」

マミもそのリスクは承知していた。
キュゥべえ曰わく「魔力が0になり、ソウルジェムが汚れ切れば、何が起こるかわからない」。
魔法少女の力から鑑みると、引き起こされるのは決していいものではないだろう。

だから魔法少女は、グリーフシードで汚れを取り除く。

つまり、魔力を最大まで使うというのは「ソウルジェムが汚れ切るか切らないかの境界を見極める」こと。

危険度は語るに及ばずだ。

「けど、あなたもこれが最善なのは認めてるんでしょう？　なら、やるしかないじゃない。それとも、時間稼ぎできる自信がないのかしら？」

「――ふん、まさか」

一体自分がどれだけ戦ってきたと思っている。
クノッヘンから注意を外さず、尚もナイトは問う。

「ただ、こんな賭けに頼ったやり方はお前らしくないと思っただけだ。もし城戸を心配して冷静さを欠いているようなら、私にとっても迷惑極まりないからな」

「……確かにね。早く戦いを終わらせたいのには違いないわ」

骨の腕をすんでのところでかわすマミ。

「けど、一つ間違ってるわ。秋山さん」

「……？」

「私は賭けになんか頼ってない。必ず成功させて、生き残る」

ナイトは目を見張った。

以前のマミは、まるで張り詰めた弦。
強さを持ち合わせながら、極度の緊張によっていつ切れてもおかしくない不安定な強さ。

しかし、今のマミは違う。張り詰めた空気の中に、『絶対に生き残る』という渇望が宿っている。
シャルロッテの時に見せた、甘さや油断もない。

倒すべき敵を見据えるマミは、再度マスケット銃を向ける。
結界に取り込まれていた木が魔弾に射抜かれ、近付いていた骨の腕に倒れ込む。

「こんなところで負けるなんて冗談じゃないわ。私はもう絶対に死ぬわけにはいかないの。鹿目さんや美樹さんの為にも、城戸くんの為にも」

打算で戦ってきた自分に、失いたくないものが出来た。
自分が消えて、悲し人が出来た。

それら全てを守る為にはまず、自分が生き残らなければならない。
自分が死んだら、誰がみんなを守る？

意志を固めるかの如く、マミはもう一度、ナイトに宣言する。

「私は必ず生き残る。――必ずね」

「……」

ナイトは無言のままマミを見つめた。
――かつて、思想も願いもバラバラだった13人の戦士全員に、唯一共通して宿っていた『生きる』という意志。
目の前にいる少女は、確かにそれを持っていた。

「――いいだろう。見極めさせて貰うぞ、巴マミ」

お前の覚悟。果たして本物か否か。
頷き合い、二人はクノッヘンへと向かっていく。

（待ってて、城戸くん）

自分に、生きる意志をくれた少年を想う。

（絶対、すぐ助けに行くから！）

銃声と金属音が、結界に鳴り響く。

◆◆◆

「さて、ここなら戦うのに不自由はないだろう」

解谷と龍二が立つのは病院のロビー。

――もっとも、ここは結界の中。

ロビーはあくまで現実の病院の意匠を取り込んだだけであり、実際は薬品やら医療器具が浮かぶ気味の悪い空間だ。

中央で睨みを利かせる龍二と、余裕綽々といった笑みを刻む解谷。

どちらも臨戦態勢は整っている。

「キミを潰せば残るライダーは１２人。悪いけど、早めにケリをつけさせて貰うよ」

「やってみろ――出来るならな！！」

鏡合わせに構えられた二つのデッキ。

Ｖバックルが腰に装着され、両者がお決まりのポーズを取りながら

叫ぶ。

『変身！！』

デッキが装填されると共に、虚像が龍二と解谷へと重なって行く。

仮面ライダー龍騎。
仮面ライダーシザース。
直接対決の火蓋が切って落とされたのである。

【ＳＷＯＲＤ．ＶＥＮＴ】
【ＳＴＲＩＫＥ．ＶＥＮＴ】

開始早々、二人はそれぞれドラグセイバーとシザースピンチを召還。
互いの距離を一気に詰め、接近戦へと持ち込む。

「だぁっ！！」
「ふんっ！」

武器が接触した次の瞬間には、別の角度からの攻撃。
二人の間にライダーとしての技術差はさほどない。

だが、そこは大人と子供。絶対的な筋力の壁がある。

（鍔迫り合いは避けなきゃならない）

力では押し負ける。龍騎はそのことを理解していた。
故に――手数で攻め、反撃の隙を潰す戦法。

だが、シザースの余裕は消えない。

「ふむ。前の時もそうだったが、キミの持つ技能、子供とは思えないね。何か鍛える機会があったのかな？」

「ッ！　何だよ、余裕のつもりか！」

振り下ろされるドラグセイバー。
申し分ない力による一閃は、ライダーと言えども無傷では済まないパワー。

「だが」

鈍い金属音。
龍騎が息を呑む最中、ドラグセイバーの刃は、シザースピンチのハサミによって受け止められてしまう。

「まだ甘い！」

ドラグセイバーを受け止めたまま、シザースは右手を大きく振り、武器ごと龍騎を空中へと放り投げた。

「うわぁっ！」

衝撃でドラグセイバーを手放し、空中にいることから身動きも取れない龍騎。
シザースはすかさず新たなカードを取り出す。

【ＢＵＢＢＬＥ．ＶＥＮＴ】

――グルルルッ！！

召還されたボルキャンサーの口から、無数の泡が吐き出された。それらは龍騎の装甲に当たると同時に弾け、爆弾と変わらない衝撃を生む。

「うあぁぁぁッ！！」

ダメージによって受け身すら取れずに落下する龍騎に、シザースはシザースピンチで容赦ない追撃を加える。

「さぁどうしたんだい？　私が許せないんじゃなかったのかな！！」

「が、ぐッ！！」

シザースピンチが龍騎を斬りつけ、赤い火花を散らす。
丸腰に加え、泡による負傷。ベントインする暇すらないという三重苦。

対応策のない現状、龍騎はなすすべなく、シザースに痛めつけられるしかなかった。

◆◆◆

「……芳しくないわね」

一連の龍騎とシザースの戦いを、ほむらは結界を抜けた現実世界――玄関ホールの窓ガラスから見守っていた。

既にまどかとさやかは運ばれ、待合用のソファで眠っている。

（私達だけ現実世界へと戻るのは気が引けるけれど……）

――現実世界の病院も魔女の呪いが働いている為、院内の人間は生命力を削がれ、そこかしこに倒れている。

お世辞にも安全とは呼べない場所だが、まどか達を守りながら龍騎をサポートする以上、あまり離れるわけにもいかない。

「彼の性格上、もしかしたらとは思っていたけれど、やっぱり魔女相手の時と、人間相手の時とは挑む姿勢が違う」

そう、ほむらが龍騎の援護に回ろうと考えたのは、それが理由だ。

怒りのせいで本人は気付いていないだろうが、龍騎の動きが明らかに鈍い。

当たり前と言えば当たり前だ。

相手は今まで戦ってきた異形ではなく、人間。それを倒すということは、シザースと同じ側に行くということ。あの甘い性格だ。迷いが生じるのは自明の理。

「……私が、ケリをつけるべきね」

まどか達から目を離すのは不安が残るが、シザースはこちらに気付いていない。
二人で攻めれば、早くに決着をつけられる――

「う、うーん……」

「あ、あれ？　あたし何やって……」

再び結界へ入ろうとしたほむらの耳が呻き声を捉える。
振り向くと、まどかとさやかが目を僅かに開けていた。

「気が付いたのね」

「ふえ？　ほ、ほむらちゃん？」

「転校生？　あんたなんでここに……って」

朦朧としていた意識が一瞬にして吹っ飛ぶさやか。まどかも同じだ。
それもそのはず、目を覚ました瞬間広がった景色が、魔女の呪いによってダウンした人に溢れる病院なのだから。

「な、何よこれ……ここ、見滝原病院だよね？　なんでみんな倒れて……」

「魔女結界の影響よ。あなた達は魔法少女の素養があるから、生命力の減りは少ないでしょうけどね」

「け、結界……！？」

瞳を不安で揺らすまどかに対し、ほむらは無言で窓ガラスの方を示す。

鏡の中で揺れるのは、二人の仮面の騎士。

「城戸さん！？」

「あいつ、この前のライダー！！」

「蓮花と巴マミも、この結界を生んだ魔女と戦っているわ」

「マミさんも……ほむらちゃん、一体何がどうなってるの？」

「……」

さて、どうしたものか。ほむらは考え込む。

状況を説明するべきなのには違いないが、二人に聞かせるには向かない内容があるのは確か。

特に――

「……美樹さやか」

「な、何よ」

やや刺々しく身構えるさやか――解谷蛍ともっとも親交のあった少女を見つめる。

「説明するのは構わないわ。けど現状はあなた達――特に美樹さやか、あなたにとってはとても残酷よ」

「あ、あたしにとって？」

「そう。信じる信じないはあなた達次第だけど――話は最後まで聞いて頂戴」

前置きして、ほむらは説明の口火を切った。

◆◆◆

「うあっ！！」

結界内の床を転がる龍騎。シザースのラッシュは凄まじく、龍騎の体力を奪うには十分だった。

獲物を狩る側に回った者として、シザースは相棒のボルキャンサーを引き連れ、高笑いを挙げた。

「クックック、所詮キミは数の力に頼っていただけ。1対1ならば、力の差は歴然だ」

「……っ！！」

ギリッと歯を噛み締める龍騎。
力の及ばない悔しさが滲み出ている。

（負け、られるかッ……！！）

こんなクズ野郎なんかに、人の命を無為にするヤツなんかに、絶対負けない！
気迫を支えにどうにか立ち上がる龍騎だが、やはり蓄積されたダメージは、否応無しに限界を告げ、足をふらつかせる。

「くっ……」

「無理をするのは止めた方がいい。残り少ない人生を苦しみに染めるだけだよ」

勝ちを確信した相手への余命宣告。
皮肉にも、それは彼の医師らしさとも取れた。

「私も早くケリをつけたいんだ。次はあのナイトとかいうライダーを仕留めなければならないんだ。次の人質も既に考えてあるしね」

「次の、だって……？」

「ああ、さやかちゃんの幼なじみさ」

「……！！」

淡々と告げられたその情報に息を呑む龍騎。

「さやかちゃんの幼なじみって、まさか、上条くんって子のことか……！？」

「ん？　上条くんを知ってるのかい？　……ああ、そう言えばキミも、さやかちゃんのお見舞いに付き添っていたね」

名前と事情くらいは聞いてるか、と一人納得するシザースだが、龍騎の心中はそれどころではない。

「私は用意周到でね。キミが知っているかどうか知らないが、私は一人、あるライダーと手を組んでいるんだよ」

明かされた情報は、龍騎にとって最悪なものだった。

（まだもう一人、ライダーがいる……！？）

行きすがらほむらから聞いた、彼女の邪魔をしたというカメレオンと契約したライダーだろうか。

「そのライダーには既に、上条くんを攫うように打診してあってね。キミを始末した後、上条くんの安否をちらつかせれば、ナイトも簡単に始末できる！
そして残るライダーは１１人へ――クックック、感謝するよ。キミ達と知り合っていたお蔭で、こうも簡単に事が運ぶんだからね！」

派手な哄笑が周囲に反響する。聞くだけで狂っていることがわかる笑い声――しかし、シザースは気付いていなかった。

龍騎の身体の震えが疲労などではない――怒りによるものへと変わっていたことに。

「……あんたは……ッ！！」

「うん？」

シザースの視界に映る龍騎。
真紅の複眼の奥――完全に理性の枷が弾け飛んだ、怒りの波濤が、激昂となってシザースへと放たれた。

「どこまで人の命を貶めれば気が済むんだぁッ！！」

そのあとの龍騎の動きは、常軌を逸していた。
落ちていたドラグセイバーを一瞬で回収し、シザースとの距離を詰める。

「ッ！？」

勝利の余韻に浸るシザースは不意をつかれ、対処が間に合わない。

無論、それは龍騎にとって決定的な隙。

「うあぁぁぁ――ッ！！」

ダメージなど感じさせない動きで繰り出される剣舞は、シザースを遠慮なく斬りつけ、

「だりゃあっ！！」

「ぐふっ！？」

渾身の回し蹴りがシザースに叩き込まれ、その体躯を壁に叩き付ける。

「がはっ……！　し、死に損ないが！！」

「ハァッ、ハァッ……！！」

動悸と疲労が更に深まる。あれだけの動きをこのボロボロな身体で行えば、こうなるのはわかっていた。

だが、負けられない。

（あいつだけは、あいつだけは絶対に倒す！）

心を奮い立たせ、龍騎は必殺のカードをデッキから引き抜く。

【ＦＩＮＡＬ．ＶＥＮＴ】

カードが読み込まれ、召還されたドラグレッダーが蜷局を巻くように龍騎の傍らを飛ぶ。

「はぁぁぁ……ッ！！」

「ふっ……正気かい？　そんなボロボロの身体でファイナルベントを使ったところで、威力はたかが知れている」

構えを取る龍騎に、シザースもまた切り札をベントインする。

【ＦＩＮＡＬ．ＶＥＮＴ】

シザースの背後にボルキャンサーが現れ、両腕のハサミを重ねる。

「ハッ！！」

シザースが飛び上がり、ボルキャンサーがその足をハサミに乗せて、天高く跳ね上げる。
丸まったシザースの身体は高速回転しつつ、龍騎を仕留めにかかった。

「はぁっ！！」

そして龍騎もまた空中に飛翔し、ドラグレッダーが吐き出す火炎放射を纏いながら右足を突き出す。

「だりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ――ッ！！」

「はぁぁぁっ！！」

両者の必殺技『ドラゴンライダーキック』と『シザースアタック』が空中にて炸裂した――

あんただけは許せない・４（後書き）

久しぶりの更新すみませぬ（＜＿＞）

・骨の魔女クノッヘン。クノッヘンはドイツ語でまんま『骨』って意味です。

・書いてるうちに蟹さんが異様に強くなりました（笑）まぁ須藤さんも蓮と互角に渡り合う実力者でしたし、いいんですけど。
バブルベントはオリジナルです。

・上条くんに忍び寄る影。果たしてどーなっちゃうのか。

次回でシザース編は終わりです。その次はさやか契約編ですね。
お楽しみに♪

どうでもいい近況
スーパーヒーロー大戦（仮）……いろいろ楽しみだけど、それよりなにより、仮面ライダーディケイド／門矢士復活おめでとぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！
久しぶりに井上くんのディケイドが見られると思うと滅茶苦茶嬉しいですわ（＾ｏ＾）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6996r/

仮面ライダー龍騎☆マギカ・願う未来を呼ぶ魔法

2011年12月7日01時56分発行